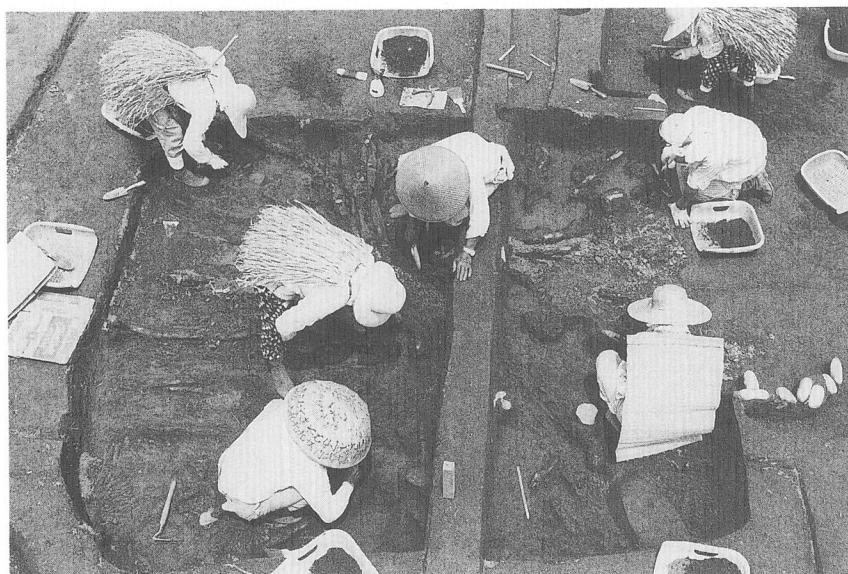


松ノ木遺跡Ⅱ

(高知県長岡郡本山町)



1992.3

本山町教育委員会

松ノ木遺跡Ⅱ

本山町埋蔵文化財調査報告書第4集

序

本山町は、西日本でおそらく初めてであろうといわれた長徳寺跡の多宝塔の根石群が発見されるなど想像以上の寺院があったことが証明されました。

また同じ場所から縄文・弥生時代の遺物が多数出土、この台地を中心には私たちの先祖が既に住んでいたことが確認されています。

松ノ木遺跡は、この台地より見下す一級河川吉野川と汗見川の合流地で発掘されたもので、西日本屈指の縄文遺跡として脚光を浴びています。

この調査は、農道開設中の工事残土から考古学ファンの竹田瑞男氏が発見したもので、町教委が主体となり、高知県教育委員会文化振興課出原恵三主幹をはじめ、埋蔵文化財に関心をもつ町内外有志の御協力により大きな成果をあげることができました。

緑と水、花と歴史の町をキャッチフレーズにする本町にとりましては、まさに歴史的意義の大きさを感じるところであります。

諸先生方をはじめ、この調査に御協力いただきました皆様に深く感謝申し上げますと共に、今後、この報告書が考古学上貴重な参考資料として活用され、埋蔵文化財に対する人々の認識が深まるよう念じます。

平成4年3月

高知県長岡郡本山町教育委員会

教育長 和田 聖寛

例　　言

1 本書は、本山町教育委員会が国庫補助を受けて、平成3年度に実施した松ノ木遺跡の発掘調査報告である。

2 松ノ木遺跡は、高知県長岡郡本山町寺家に所在する。

3 発掘調査は、対象面積2000m²のうち600m²について実施した。

4 発掘調査は、本山町教育委員会の依頼により高知県教育委員会が行った。

調査員　出原　恵三（高知県教育委員会文化振興課　主幹）

調査顧問　岡本　健児（高知県文化財保護審議会会長）

事務担当　松葉　孝史（本山町教育委員会）

5 本書の執筆・編集は出原恵三が行った。

6 遺物整理・図面作製等の作業においては浜田雅代・矢野　雅・宮地佐枝・川村亜矢・武吉眞裕氏の協力を得た。

7 本報告書作成にあたっては、下記の方々から貴重な助言、教示を得た。記して深く感謝の意を表したい。

高橋　護（岡山県立博物館）・丹羽佑一（香川大学）・千葉　豊（京都大学）・木村剛朗（日本考古学協会員）・前田光雄（高知県立埋蔵文化財センター）

8 発掘作業においては、地元寺家地区を中心とする本山町の方々の協力を得ることができた。記して深く感謝の意を表したい。

今西　和秀　石川真一郎　宮村　清郎　秋山　清稔　村山志賀野

伊藤佐代子　川村　貞子　田上佐恵子　山中　安キ　高橋　幸子

近藤　花子　中野内愛子　竹田　端男　中沢　俊雄　樋口　佳伯

平石　元重



発掘に従事して下さった方々

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の歴史的環境	3
第Ⅲ章 発掘調査の方法	5
第Ⅳ章 発掘調査の成果	7
1 基本層序	7
2 縄文時代の遺構と遺物	7
3 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物	18
第Ⅴ章 考察	33
1 縄文時代の遺構と遺物	33
2 S T 3 出土の土器について	35

図 版 目 次

図1：松ノ木遺跡の位置と周辺の遺跡	2
図2：調査区周辺の地図	5
図3：トレンチ位置図	6
図4：検出遺構全体図	8
図5：基本層序	9
図6：縄文時代の遺構	10
図7：S X 1 出土の遺物	11
図8：包含層出土の縄文土器（深鉢口縁部）	13
図9：包含層出土の縄文土器（深鉢及び浅鉢口縁部）	14
図10：包含層出土の縄文土器（浅鉢及び胴部片）	15
図11：包含層及びS X 2 出土の遺物	17
図12：S T 1 平面及び断面図	18
図13：S T 1 出土の土器	19
図14：S T 1 及びS T 2 出土の土器	20
図15：S T 2 平面及び断面図	20
図16：S T 2 炭化物検出状況	21
図17：S T 3 平面及び断面図	23
図18：S T 3 ベット部分を除去した状態	24
図19：S T 3 出土の土器	25
図20：S T 3 出土の土器	26
図21：S K 1・4・5 平面及び断面図	28
図22：S K 4・5 の土器及びS K 4 出土の鉄器	28
図23：S D 1, P 20, 包含層出土の土器	29
図24：石包丁, 太型磨製石斧, 砥石	30
図25：叩石, 石鎌, 石錐	31

写真図版 目次

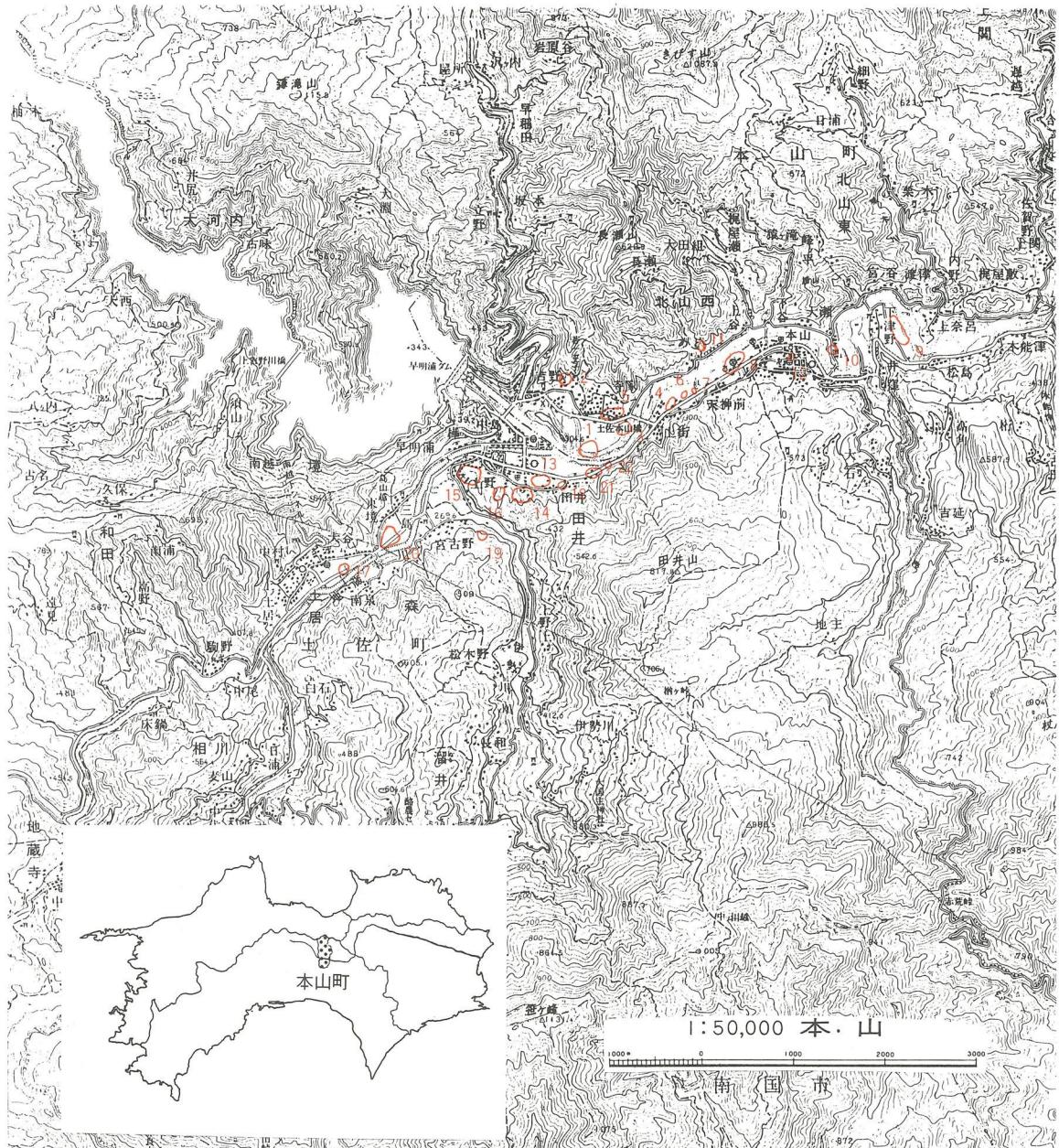
P L 1 : 発掘調査前風景 (北から)	49
発掘調査前風景 (東から)	49
P L 2 : A・Bトレンチ完掘状況	50
S X 2	50
P L 3 : S X 1 検出状況	51
S X 2	51
P L 4 : S T 1	52
P L 5 : S T 2 炭化物出土状況	53
S T 2 完掘状況	53
P L 6 : S T 3 完掘状況	54
S T 3 ベッド状遺構除去	54
P L 7 : 検出遺構と遺物	55
P L 8 : 遺物出土状況	56
P L 9 : 遺物出土状況	57
P L 10 : 検出遺構・セクション・S X 1 出土の縄文土器	58
P L 11 : 縄文時代後期土器	59
P L 12 : 縄文時代後期土器	60
P L 13 : S T 1・2・3, S K 4, 包含層出土の遺物	61
P L 14 : S T 1・2・3 出土土器	62
P L 15 : S T 3 出土土器	63
P L 16 : 縄文時代後期及び晩期の土器及びS X 1・S D 1・S T 3 · 包含層出土の石器	64
P L 17 : 石包丁及び叩石・砥石	65

第Ⅰ章 調査に至る経過

松ノ木遺跡は、本山町寺家地区で実施された第Ⅲ期山村振興農林漁業対策事業小規模土地改良（農道）事業の際に偶然発見されたものである。平成2年3月中旬、本山町寺家字落合・松ノ木の農道拡幅工事で汗見川方向に伸びる農道西端部の待避所部分の掘削廃土中に土器片が数多く含まれているのを地元の竹田端男氏が発見、本山町教育委員会に通報したことに始まる。同教育委員会は、発見遺物を県教委に持ち込んだところ、高知県中・東部では僅少な縄文後期土器で、しかもこれまでに未確認の土器型式に属することが判明した。比較的大きな破片が含まれ量的にも多いことから事態を重視した県教委は、3月23日現地に急行したところ工事は掘削・地ならし作業を終わりアスファルト舗装直前の状況であった。道路西端部に設けられた待避所の緩斜面を中心に土器片が散乱しており、道路面を鋤簾で搔いたところ遺構埋土らしき輪郭が現われた。この段階で道路面下には、遺構・遺物の残在している可能性があると判断し、県教委は本山町教委に対して直に緊急発掘調査の要請を行った。本山町教委は同町産経課と協議を行った結果、工事を一時中断して3月29日から4月14日まで、待避所部分11m×6mの範囲について緊急発掘調査を実施した。

その結果、待避所東端から西南西方向に走る小さな谷状の落ち込みが検出され、その中からコンテナケース50箱の縄文土器・石器が出土した。この谷状の落ち込みが人工的に造られた遺構であるか否かについては、工事による攪乱を多く受けているために直に判断することはできない。しかし無傷の状態で残った所に設けたセクションベルトで遺物の堆積状況を観察した限り、土器や石器は一時期にこの落ち込みに廃棄せられた状況を示している。この落ち込みは黄色火山灰の地山を掘り込んでおり、遺物の多くはこの中から出土しているが、落ち込み以外の地山上面からも出土している。土器はほとんどが縄文後期前葉に位置付けられる比較的一括性の高い資料であり、わずか数点縄文前期の彦崎ZⅠ・Ⅱ式が出土している。後期土器群は、一括性が強く、いわゆる縁帶文土器成立期の土器としては南四国で初めて確認されたものであり、遺跡名を冠して松ノ木式土器と命名した。

わずか2週間程度の発掘期間と60m²余という限られた面積の調査であったが、縄文時代の資料が僅少な本県においては真に画期的な発見であると共に、有文浅鉢土器を多量に伴う松ノ木式土器は西日本の縄文時代後期を研究する上で大変重要な資料を提供することとなった。調査区周辺の水田下及び遺跡が載っている河岸段丘上には同時期の集落遺跡が存在する可能性十分に考えられる。そして今この松ノ木遺跡の発見によって地元の人々の埋蔵文化財に対する関心が急速に高まり、松ノ木遺跡の全貌解明への熱い期待が寄せられるようになった。「森と水の里」をキャッチフレーズとする本山町も松ノ木遺跡の実態把握のために国庫補助事業として発掘調査を実施することとなり、先ず平成2年調査地点に隣接する町有地2,000m²を対称として選び、平成3年6月3日から7月20日まで発掘調査を実施することになった。



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	松ノ木遺跡	縄文・弥生・古墳	9	下津野遺跡	縄文・弥生・中世	17	沖田遺跡	縄文
2	長徳寺遺跡	縄文～中世	10	上奈路遺跡	縄文・中世	18	樋ノ口遺跡	縄文・弥生
3	東久保遺跡	弥生	11	北山瀬ノ上遺跡	中広銅矛出土	19	高笛遺跡	弥生
4	銀杏の木遺跡	弥生～中世	12	堀ノ尻遺跡	古代～中世	20	静岡遺跡	縄文
5	寺家遺跡	中世	13	八反坪遺跡	縄文	21	大畑遺跡(岡遺跡)	弥生
6	東畑遺跡	弥生・中世	14	下田遺跡	弥生	22	鳥井遺跡	縄文
7	天神前遺跡	弥生	15	玉屋敷遺跡	縄文			
8	嶺北高校遺跡(永田遺跡)	弥生～中世	16	田井古屋遺跡	弥生			

図1 松ノ木遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章 遺跡周辺の歴史的環境

松ノ木遺跡のある長岡郡本山町は四国のはば中央部に位置し、 笹ヶ峰・白髪山など四国山地の峻険な山間に開けた町である。南は南国市に接し、 北は猿田峠を界して愛媛県伊予三島市と接しており、 濑戸内海側と太平洋側を結ぶ中間の地点にある。町のほとんどは山林で占められているが、 吉野川上流域では唯一河成段丘の発達しているところであり、 人々に生活の場を提供している。この吉野川は、 四国三郎の異称をもつ四国最大の河川であり下流域において徳島平野を潤している。また近世以降においては四国山地で伐採した「御用材木」を流木する搬出路として利用され、 文物の動脈としての役割を果たして来たのである。このような地理的環境が本山町の歴史と文化の形成にあたって重要な影響力を持つことになる。

松ノ木遺跡は、 吉野川左岸に形成された低位段丘上にあり標高250m程を測る。土佐町から流れ出る地蔵寺川と県境付近から南流する汗見川が松ノ木遺跡付近で吉野川本流に合流し、 流れを大きく東に転じ、 大小の河成段丘の間を縫うようにして流れている。そしてこの河成段丘こそは絶好の遺跡立地の環境を提供するものであり、 図示したように各時代の遺跡が数珠なりに連なり県下でも有数の遺跡密集地帯を形成している。わけても縄文時代の遺跡は10余例を数え、 同時代の遺跡が僅少な県中・東部の中にあって注目すべき地域である。

周辺の遺跡で最も古いものは、 松ノ木遺跡の南の高位段丘上に位置する長徳寺址（2）から出土した縄文早期の押型文土器である高山寺式土器を挙げることができる⁽¹⁾。続く前期は平成2年の松ノ木遺跡から彦崎Z I・II式とそれに伴う石鏃が出土している⁽²⁾。中期は対岸の地蔵寺川右岸の玉屋敷遺跡（15）を挙げることができる。ここからは船元I式土器併行の土器（岡本健児氏によって玉屋敷土器と命名される）が、 横形石匙1点と石鏃15点とともに出土しており、 この他中期中葉と考えられる土器片や後期前葉の磨消縄文土器も出土している⁽³⁾。晩期は、 これも対岸の八反坪遺跡（13）から突帶文以前の深鉢・浅鉢が比較的まとまって磨製石斧やノミ状石斧と共に出土している⁽⁴⁾。上奈路遺跡（10）からも晩期に属すると考えられる磨製石斧が出土している⁽⁵⁾。これらの他にも最近実施された分布調査によって津野遺跡・沖田遺跡など多くの縄文時代の遺跡が確認されている。長徳寺址と松ノ木遺跡以外のところは正規な発掘調査を経たものではないが、 一つの地域の中で縄文早期から晩期まで欠落することなく、 その展開を継起的に追うことのできる地域は、 県西部の四万十川流域以外では当地域のみである。

弥生時代の遺跡は、 第Ⅳ様式から確認されている。嶺北高校校庭遺跡（8）から凹線文の壺・高壺と大型蛤刃石斧が出土しており、 岡遺跡（21）からも同時期の甕底部が出ている⁽⁶⁾⁽⁷⁾。今次調査においても同時期の溝が検出されたことから、 当該期が弥生時代の遺跡出現の画期をなしていることが理解できよう。続く後期前半については嶺北高校校庭遺跡以外では未確認であるが、 後期末～古墳時代初頭になると飛躍的に遺跡数が増加する。河成段丘上に並ぶ弥生遺跡のほとんどは当該期に属するのである。1981年に調査した銀杏ノ木遺跡からは、 壓穴住居址

状遺構、貯蔵穴などの遺構が検出されると共に、ヒビノキⅡ式土器併行の銀杏ノ木式土器やこれに伴って打製石包丁が3点、石錘等が出土している⁽⁸⁾。また嶺北高校校庭遺跡からもヒビノキⅠ・Ⅱ・Ⅲ式土器が、八反坪遺跡からもヒビノキⅢ式土器が出土している。

次に青銅器について触れなければならない。当地域は、県中・東部において最も青銅器が集中しているところであり、神社所蔵品など出土地の不明瞭なものを含めると銅鐸1個・銅矛5本を数える。銅鐸は、土佐町森字土居の琴平神社所蔵のもので畿内型突線紐式（高さ約60cm）に属する。文化10年（1813）に編纂された『南路志』にも紹介されており、近世以前に周辺の遺跡から出土した可能性がある⁽⁹⁾。5本の銅矛の中で出土地点が唯一明瞭な1本は、北山瀬ノ上（19）出土の中広Ⅱ式である。吉野川とその支流堺谷川の合流地点を臨む位置にあり、1917年9月山腹の崩壊により露出したのである。他の4本のうち1本は広形Ⅰ式で土佐町柚ノ木の妙見社（星神社）の宝物である。残る3本は土佐町駒野山ノ神神社の宝物となっているものですべて中広Ⅱ式に属する⁽¹⁰⁾。これらの青銅器のすべては高知平野から持ち込まれたと考えられることから、弥生後期以降の当地域の遺跡数の増加と関連して注目すべき現象であり、当地が高知平野と瀬戸内海とを結ぶルートの中継地としての要衝であったことが窺われる。このことは時代は降るが延暦16年（797）年に設置された駅家をこの地に求める説もあり、各時代を通して地政学的に重要な位置を占めていたことが理解される。

註

- (1) 岡本健児他『長徳寺址発掘調査報告書』高知県長岡郡本山町教育委員会 1977年
- (2) 出原恵三・前田光雄『松ノ木遺跡』I 同本山町教育委員会 1991年
- (3) 岡本健児・宅間一之・森田尚宏・井本葉子「玉屋敷・八反坪遺跡と出土遺物」高知県土佐郡土佐町教育委員会 1981年
- (4) 註(3)と同じ
- (5) 岡本健児 「本山町上奈路縄文磨製石斧」 前誌⁽¹⁾
- (6) 岡本健児 「嶺北高校校庭出土の遺物群」 前誌⁽¹⁾
- (7) 岡本健児 「岡出土の土器」 前誌⁽³⁾
- (8) 岡本健児 『銀杏の木遺跡の発掘』 高知県長岡郡本山町教育委員会 1984年
- (9) 岡本健児 「土佐町森 琴平神社の銅鐸」 前誌⁽³⁾
- (10) 岡本健児 「嶺北地方発見の銅矛」 前誌⁽¹⁾

第Ⅲ章 発掘調査の方法

今次調査区として選んだ場所は、長年にわたって嶺北高校の学校林であったところであり、高さ2~3m程の杉が予定地のほぼ全面に植林されていた。従って調査は杉を伐採し根をこぐことから始まった。周囲はすべて水を張った水田であり、調査区内への水の侵入を防ぐために畦の内側に排水路を巡らし、更にこの水を出すために径10cmのホースを汗見川に向って取り付けた。2000m²程の調査区のほぼ中央に幅4mのトレンチを南北に47m(Aトレンチ)、東西に40m(Bトレンチ)を設定し、最初から人力で掘り下げる行った。両トレンチ共に表土から40~50cmのところで、昨年調査した際に確認していた黄褐色火山灰土層(音地層)の無遺物層に達し、目的とする縄文時代の遺構はほとんど検出できなかった。そこで昨年の遺物集中地点に接近して東西方向にトレンチを設定し、西側をDトレンチ、東側をEトレンチとした。Dトレンチからは縄文時代後期の土坑・古墳時代初期の竪穴住居が、Eトレンチからは弥生時代末の竪穴住居が検出され、それらを完掘できる範囲でトレンチを拡張した。

遺物の取り上げ、遺構の平面実測においては、一辺4mのグリットを任意に組み南から北に算用数字を1・2・3・・・、東から西にA・B・C・・・を符して北西隅の番号をグリット名とした。また調査区南の路肩に不動点を設定した。Aトレンチの長軸は磁北よりも4度1分30秒西に振っている。

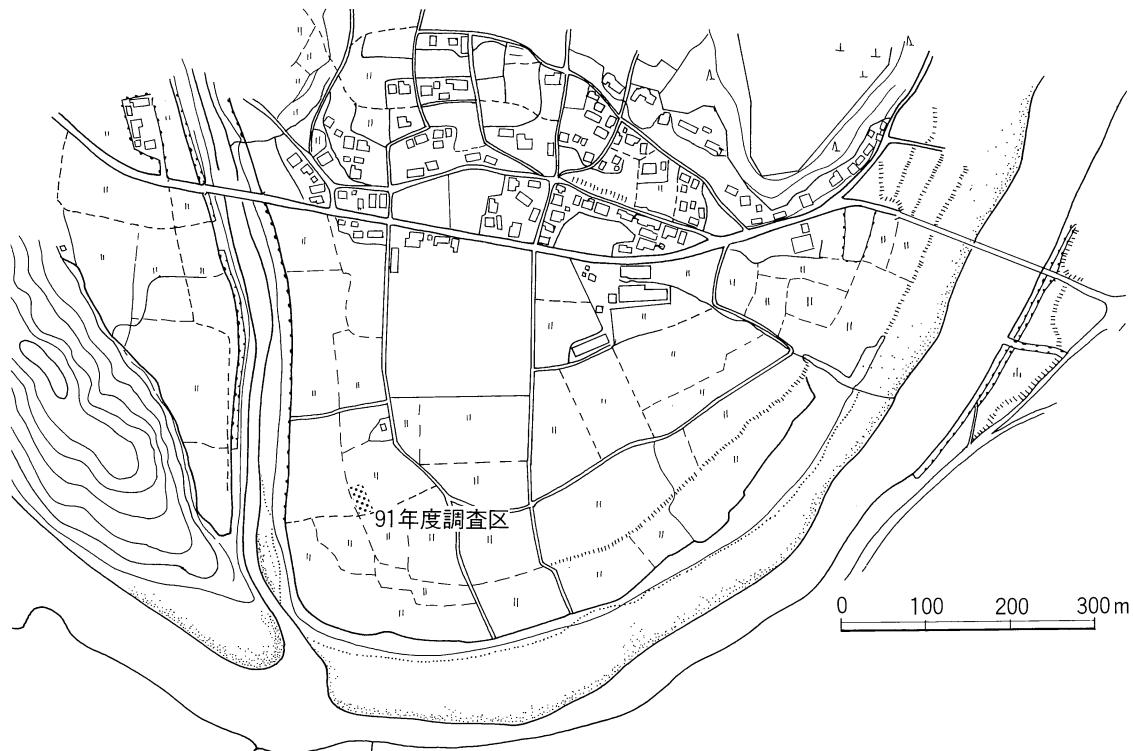


図2 調査区周辺の地図

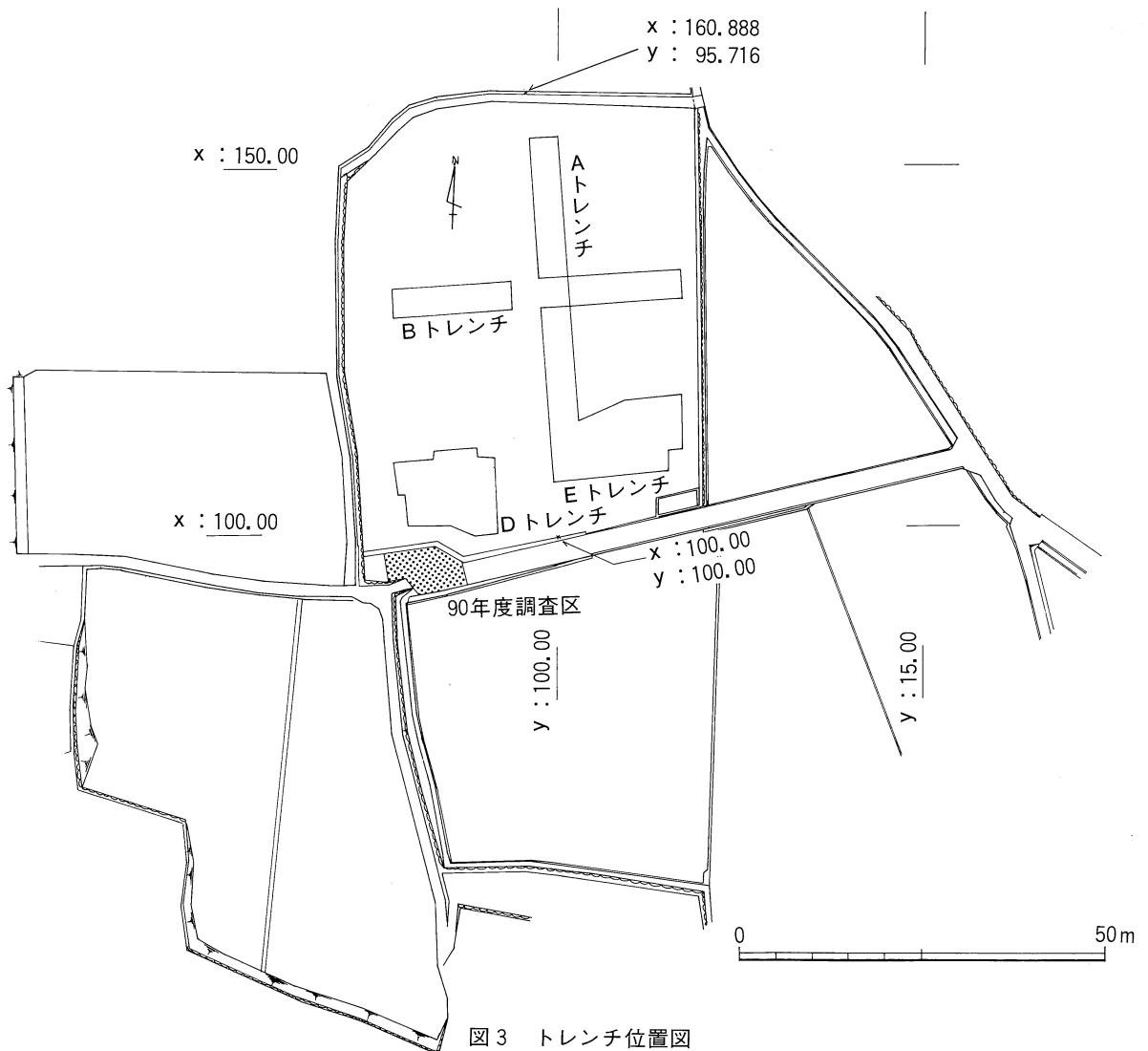


図3 トレンチ位置図

第IV章 発掘調査の成果

1 基本層序（図5）

- VI層：黄色粘性シルト層である。Aトレンチの24D・21Dの深掘り地点で確認した。層厚60cm以上を測り、24Dでは地表下1.28m、21Dでは0.7mの深度で検出できた。南に向って上昇していることがわかる。無遺物層である。
- V層：黄色火山灰土層（音地）である。VI層同様Aトレンチの24D・21Dで確認した。層厚は共に30cm前後を測り、南に向って上昇している。無遺物層である。
- IV層：黄茶色火山灰土層（音地）で縄文時代後期の遺構検出面である。層厚は0～40cm以上を測り、トレンチのほぼ全面に認められるが南端の21D付近では堆積が見られず、Bトレンチでは西に向って層厚を増している。無遺物層である。
- III層：濃茶色シルト層である。層厚は0～28cmを測り、Bトレンチ西半分以外では面的な堆積をなす。縄文後期の遺物包含層であり、弥生中期の遺構SD1はこの層準を切っている。
- II層：黄灰色シルト層で床土なす。Aトレンチではほぼ全面にわたって堆積しているが、Bトレンチでは部分的にしか認められない。縄文・弥生・古墳時代の土器細片などが入っている。
- I層：表土層である。

2 縄文時代後期の遺構と遺物

(1) SK2（図6）

Aトレンチの25Eで検出した。87cm×72cmの楕円形のプランを呈し深さ43cmを測り、断面はV字状をなす。埋土はI層：茶色シルト、II層：濃茶色粘性シルトで、I層より縄文後期土器の細片が5点出土したが図示し得るものはない。性格不明である。

(2) SK3（図6）

Eトレンチの中央部で検出した。1.7m×0.93mの長楕円形のプランを呈し深さ23cmを測る。検出面から深さ15cm前後のところに土坑内を一周するテラスがあり段掘りになっている。埋土は濃茶色シルトで遺物は全く認められなかつたが、形状からして土坑墓の可能性も考えられる。

(3) SX1（図6・7）

Eトレンチの西端に位置する。1.97m×1.65mの隅丸方形状のプランを呈し検出面からの深さは33cmを測る。床面はほぼ平坦面をなし壁は急勾配で立ち上がり、埋土は濃茶色シルト層である。平面プランの中央より南に寄ったところの、検出面直上部に最大50cm×20cmから長軸40～30cm大の河原石を5個、一部を重ね合わせるように配しそのまわりに拳大から径数cmの円礫が検出された。これらの礫の周囲と埋土下層・床直上面からは、1～10（図7）の縄文時代後期の土器・石器が出土した。この遺構は大型礫を確認した段階で周囲を精査したが平面プラン

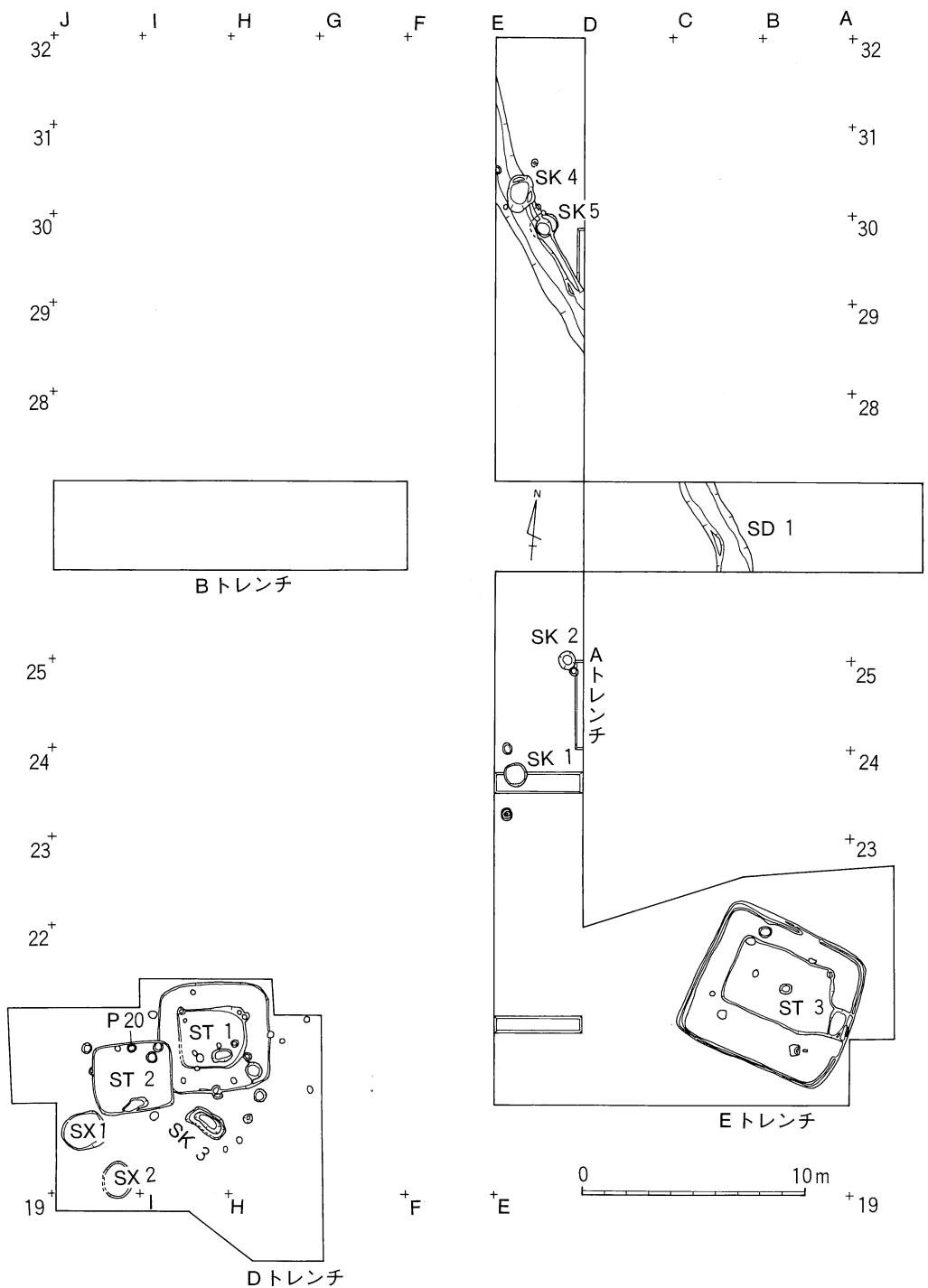
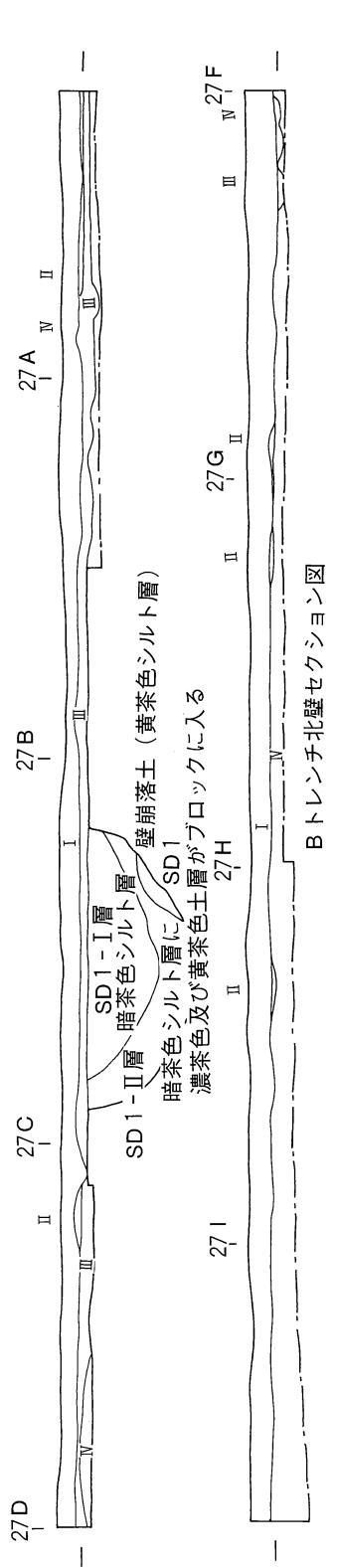
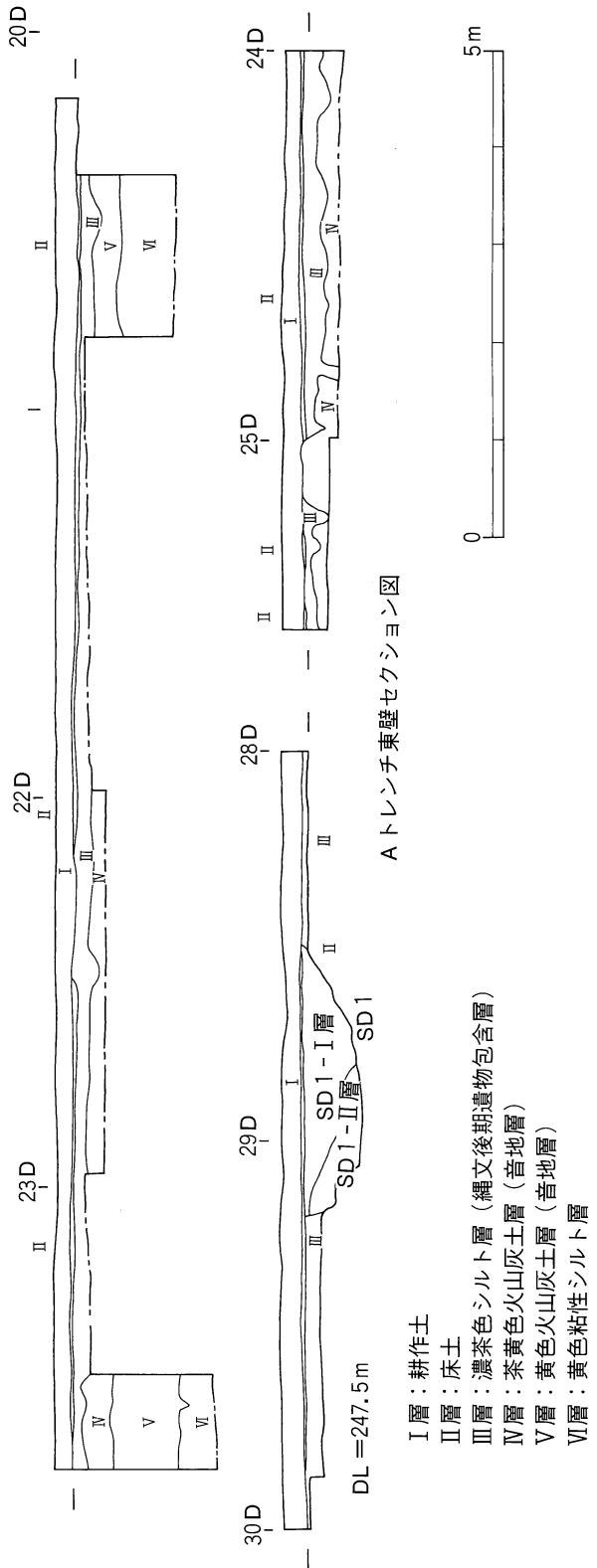


図4 検出遺構全体図



B トレンチ北壁セクション図



A トレンチ東壁セクション図

I 層：耕作土
II 層：床土
III 層：濃茶色シルト層（縄文後期遺物包含層）
IV 層：茶黄色火山灰土層（音地層）
V 層：黄色火山灰土層（音地層）
VI 層：黄色粘性シルト層

図5 基本層序

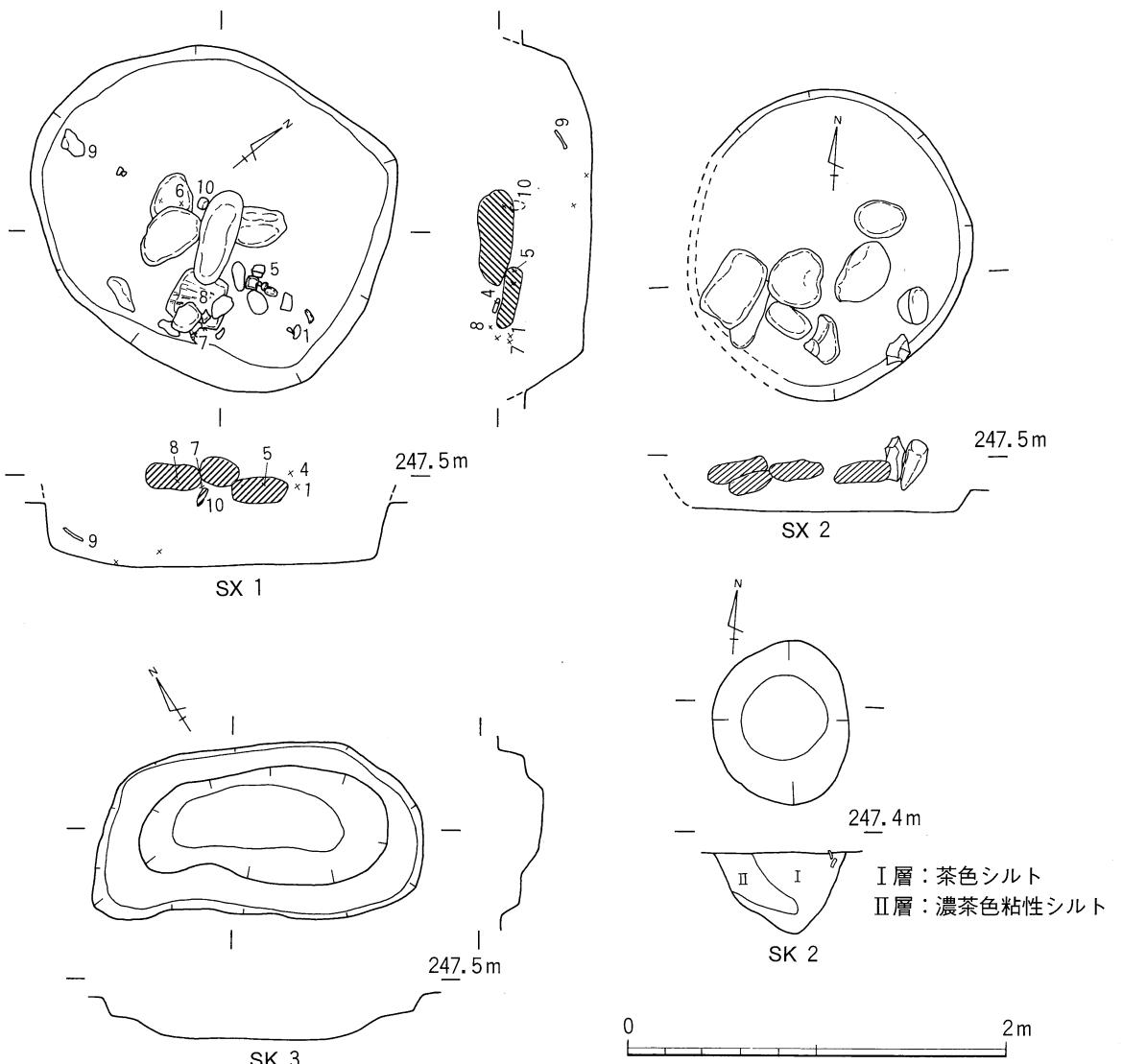
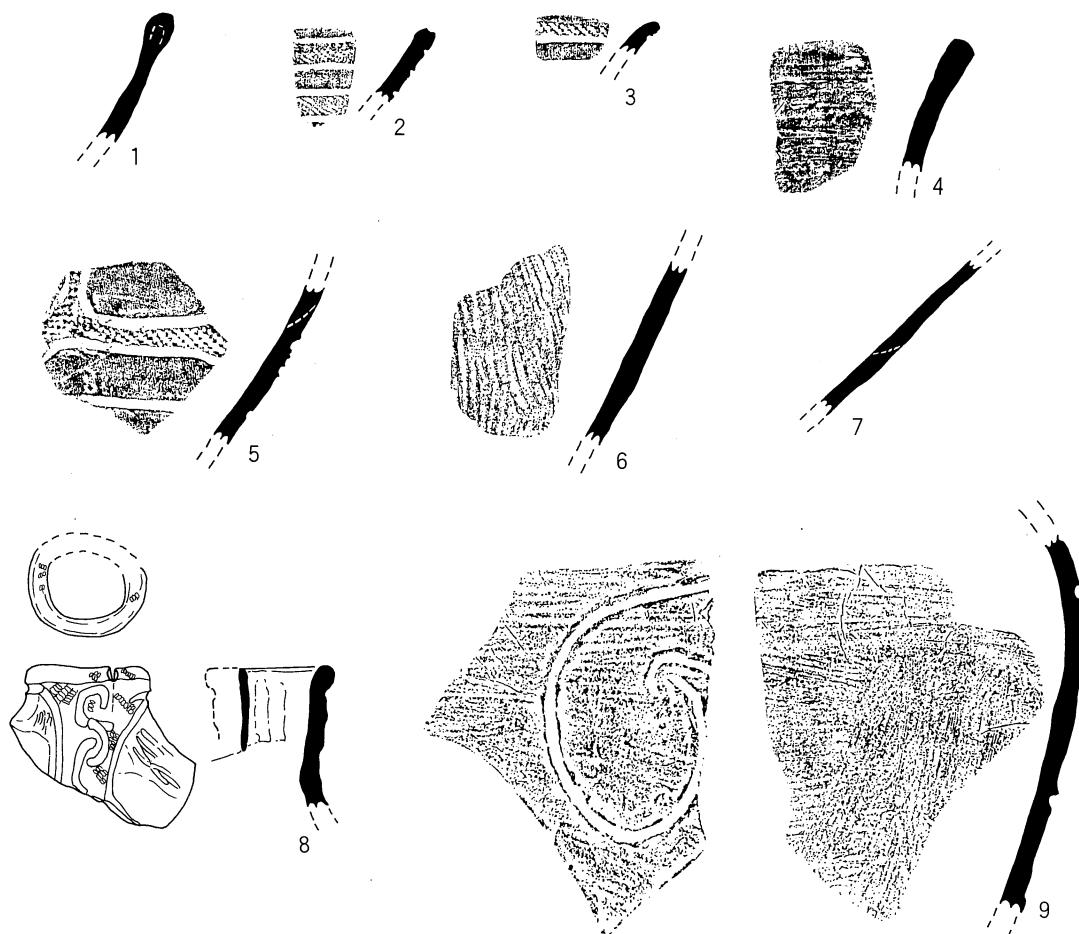


図6 繩文時代の遺構

を検出することができず、遺物を取り上げながら、東側を約10cm下げ断面観察を行ったところ立ち上がりと掘り方を確認し得たものである。したがって本来の深さは図示したものより深くなる可能性がある。遺物の多くは検出面よりも浮いた状態を示しているが、すべて集石に近接していることや上述の状況から見てSK 1に伴うものと考えられる。1～3・7は浅鉢、他は深鉢である。1は、内外面無文で口縁部が肥厚している。断面から口縁部内外面に上から粘土をかぶせていることがわかる。2は、外面の沈線間にR Lの縄文帯を2帶有し口唇部は凹状をなす。3は口縁部がわずかに外反し、外面にR Lの縄文帯を有す。7は内外面研磨された浅鉢の下胴部と考えられる。5は2本沈線の磨消縄文(R L)を有する深鉢胴部である(⑦)。8



浅鉢：1～3・7
深鉢G類：8 深鉢④類：4
深鉢肩部：5(⑦), 9(①)

は深鉢の円筒状把手部分である（G類）。円筒部上面の径は2cm×2.4cmを測り、口縁直下に沈線を施し一周することなく垂下させ、その中に鉤状の沈線を上下に配し、更に入り組み状に垂下沈線を施す。器面は丁寧にヘラ磨きされ、部分的にR Lの縄文を充填し一部は口唇部に及ぶ。9は条痕地の外面に入り組みの懸垂下文を配している（①）。4と6は、粗製深鉢の口縁部と肩部である。

4（a類）は外面に横位の条痕、

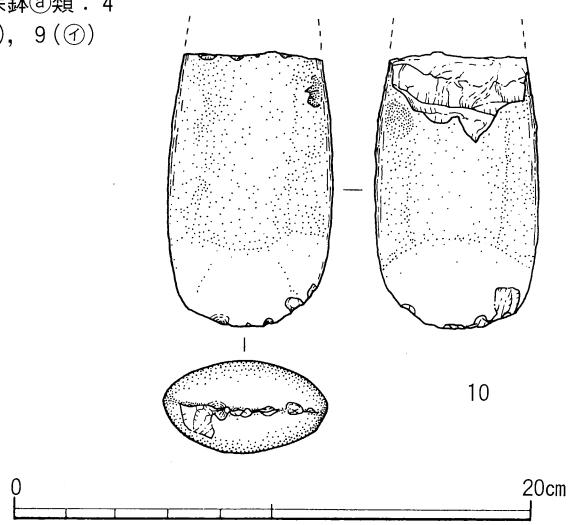


図7 SX 1出土の遺物

6は二枚貝条痕が縦に見られる。10は、御荷鉢緑色岩製の磨製石斧で刃部を下にして斜めに立った状態で出土した。基部を欠いているが全面丁寧に研磨されている。S X 1は集石土坑墓か祭祀的な土坑と考えられる。

(4) S X 2 (図6・11)

S X 1の南隣りにある。西辺の一部を明確になし得なかったが、1.55m×1.5mの楕円形プランを呈し深さ12cmを測る。床面は平坦で壁は斜めに立ち上がっている。S X 1と同様に中央から南に寄ったところに最大40cm×20cm～人頭大の河原石を一部重ねるようにして配し、壁側にある2個の礫は立っている。これらの礫はすべて床面から10cm以上浮いている。埋土は濃茶色シルトで、大型の河原石以外は図11-84が1点出土したのみである。84は長さ12.1cm、幅3.9cm、厚さ2.2cm、重さ190gを測る結晶片岩の棒状の自然礫で、特に使用痕は認められない。S X 2もS X 1と同様の性格を有する遺構であろう。

(5) 包含層出土の土器

包含層のⅡ・Ⅲ層及び後述する弥生～古墳時代の遺構埋土中より71点の図示可能な縄文後・晩期の土器及び石器が出土している。すべて細片であるため十分に形態を把握し得ないものもあるが、以下概略を述べることにする。色調・胎土等細かい点については観察表に記す。

(①) 有文深鉢口縁部 (図8・9)

A類(25)：胴部外面に3本沈線を基調とする磨り消し縄文帯を有し、口縁部は上方に立ち上がり外面にR Lの縄文を施した後、右下り（以下R）の短沈線を配す。

B類(24)：波状口縁を有し波頂部付近で内側に屈曲、外面に2条の沈線を施し沈線間及び波頂部にR Lの縄文、また沈線間には刺突文を配す。

C類(11～22)：口縁部内面に断面三角形状の粘土帯を貼付し、肥厚した口縁部上面に沈線とRの短沈線を配するものを一括した。11・13・14・16は波状口縁をなし13の突起部外面には沈線を配す。14の波頂部には2個の19には1個の刺突文を施している。頸部以外の文様については不明であるが、1次調査出土の同タイプは頸部外面無文となる例が圧倒的に多い。

D類(23・33)：口縁部文様帯をC類同様に口縁部上面に有するが、肥厚を認めないもの。23は、2条の沈線を巡らしが連結することなく端部で垂下し、沈線の外側には刻目状のRの短沈線を配す。33はRの短沈線のみを配す。

E類(34～36)：内湾気味に立ち上がり口唇は丁寧に磨かれ丸くおさめている。34は2条の沈線間に、36は口縁外面にR Lの縄文帯を施す。35は区画文風に沈線を描く。

F類(26～29・32・37)：外面施文の縁帶文土器に属する。26～28は外面に粘土帯を貼付して肥厚させ文様帯としRの短沈線を配す。29は口縁部を内側に屈曲させ外面に短沈線を配す。32は口縁部が垂直に立ち上がり、外面に2条の沈線を施し沈線間にR Lの縄文を配す。37は弱い波状口縁をなし幅広い沈線による渦巻文を有す。

(②) 粗製深鉢口縁部 (図9)

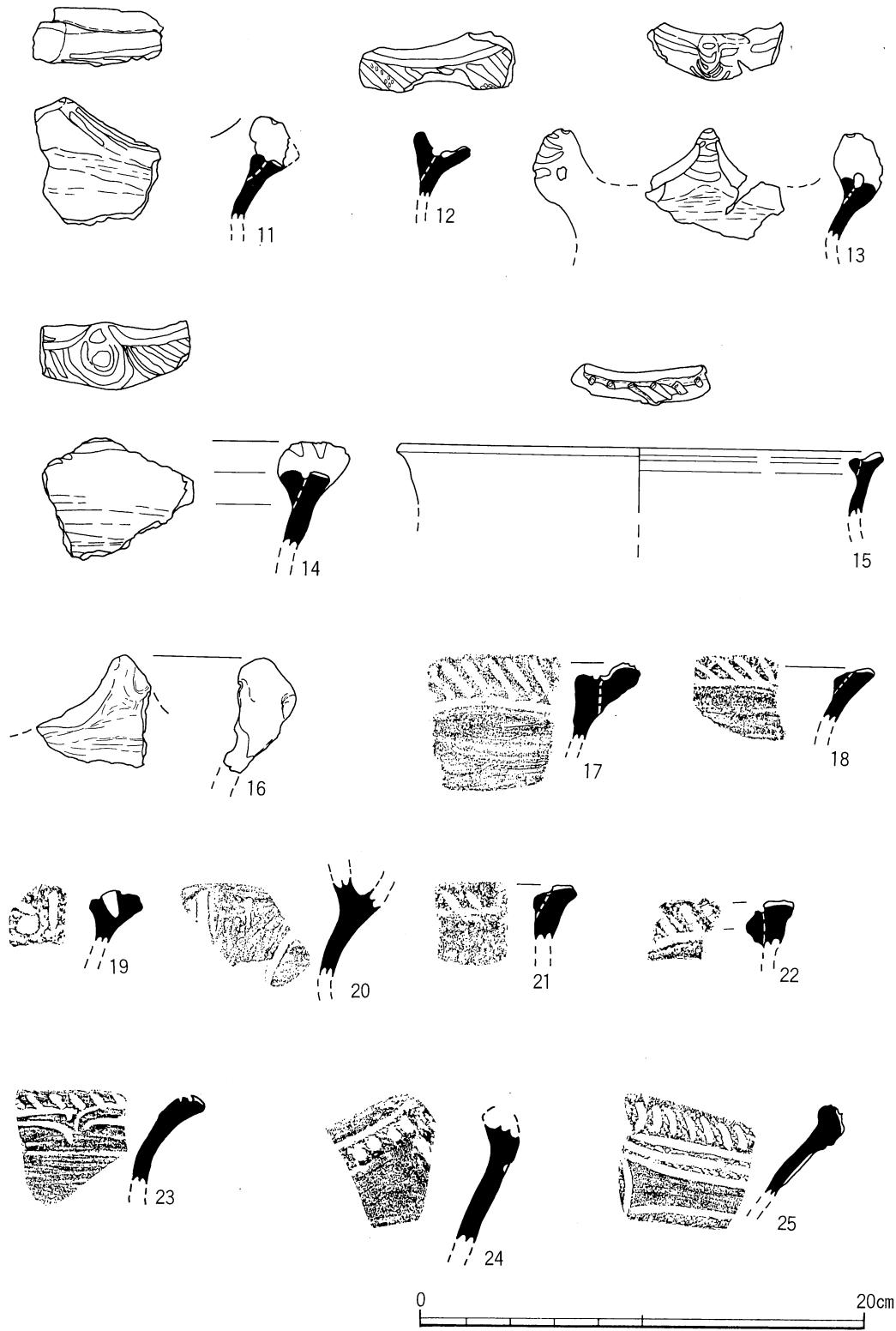


図8 包含層出土の縄文土器（深鉢口縁部）
A類（25）、B類（24）、C類（11～22）、D類（23）

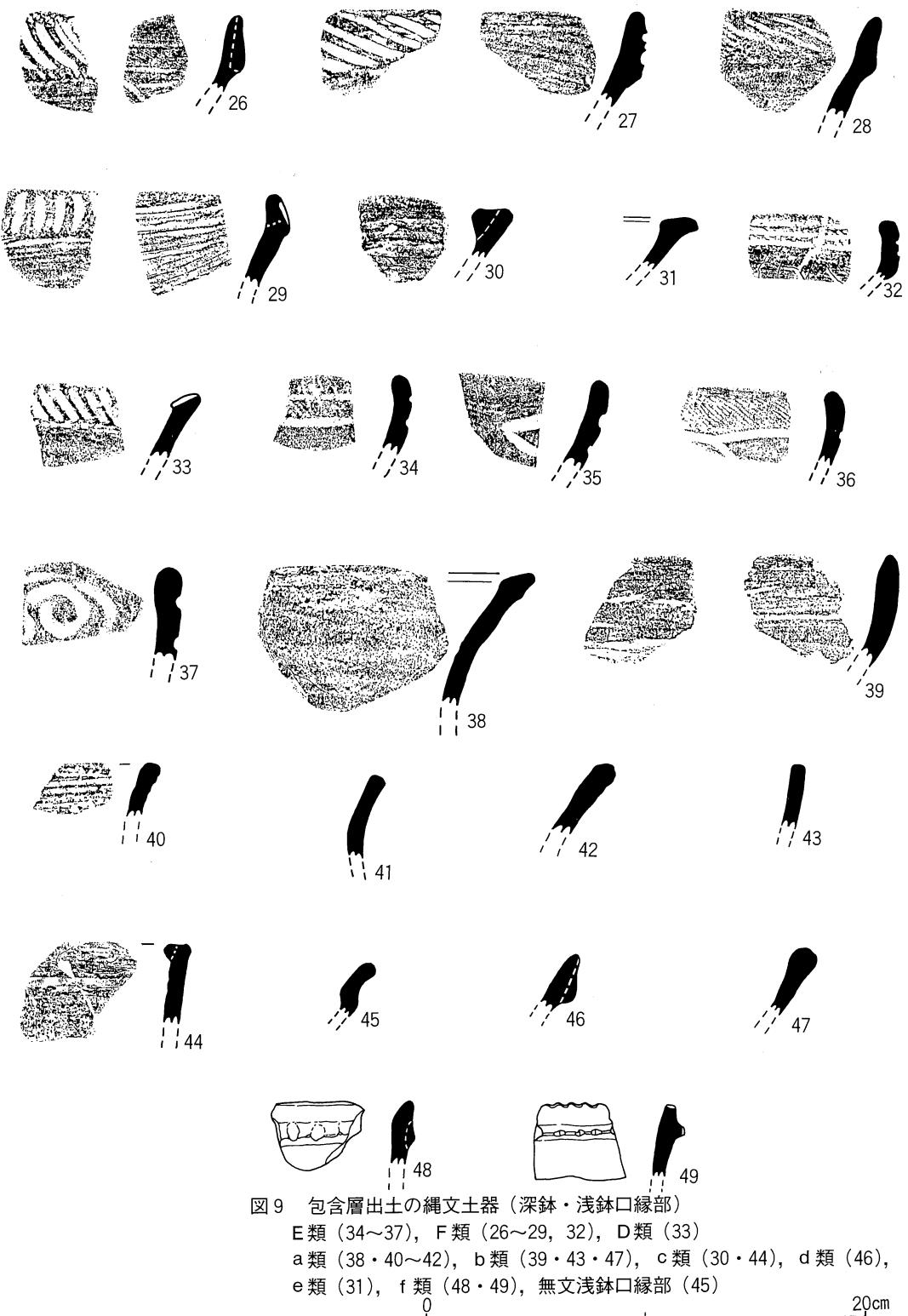


図9 包含層出土の縄文土器（深鉢・浅鉢口縁部）

E類 (34~37), F類 (26~29, 32), D類 (33)
 a類 (38・40~42), b類 (39・43・47), c類 (30・44), d類 (46),
 e類 (31), f類 (48・49), 無文浅鉢口縁部 (45)

0 20cm

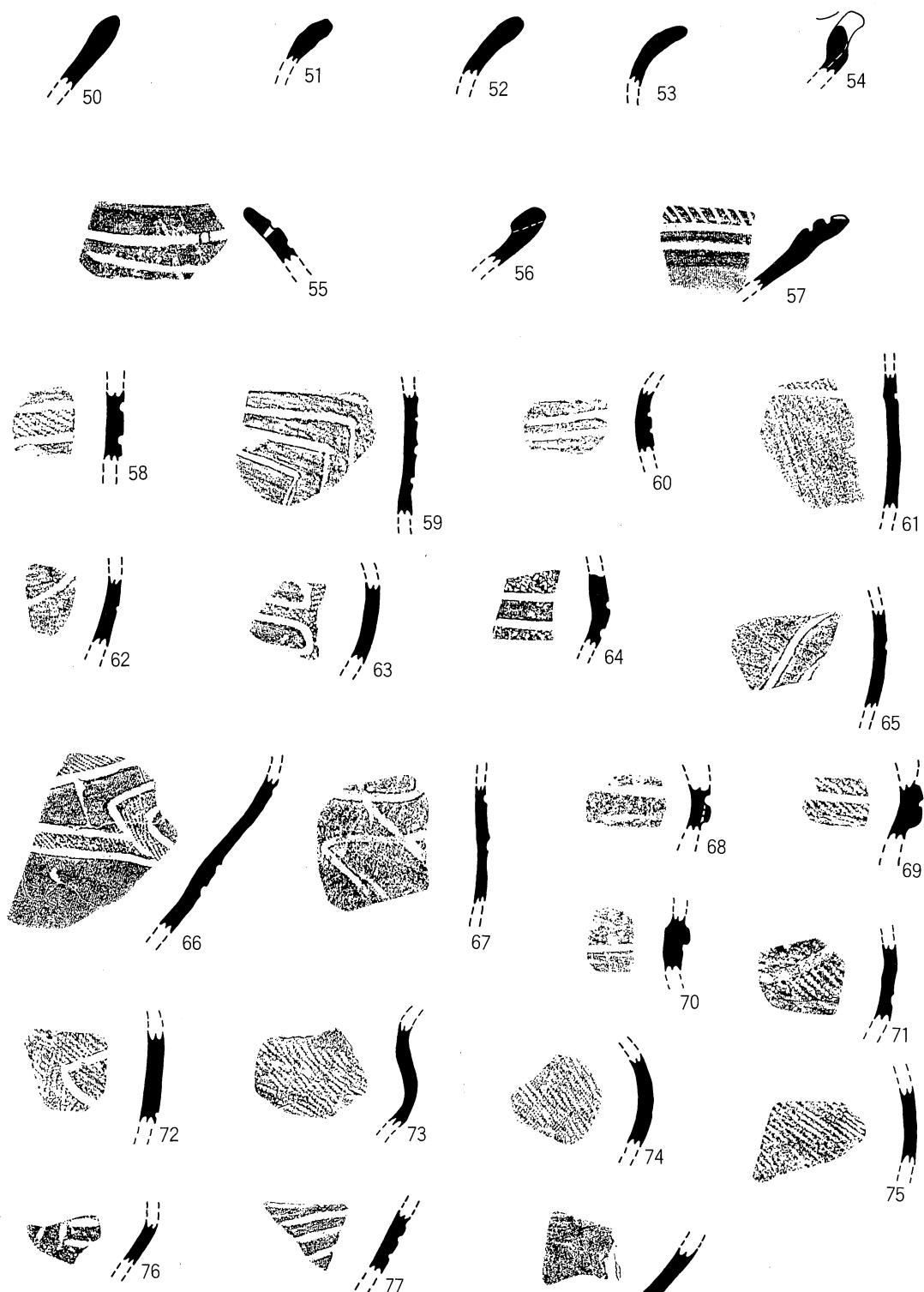


図10 包含層出土の縄文土器（浅鉢及び胴部片）

無文浅鉢口縁部（50・51～54）

0

20cm

深鉢胴部（⑦：58・61～64・71・72, ①：59・60・65・67, ④：68～70, ⑤：73～75）

有文浅鉢口縁部（66・76～78） 无文浅鉢口縁部（55～57）

a類（38・40～42）：口縁部が外反するタイプである。41は内外面ナデ調整、他は内外面共に横位の条痕を施す。

b類（39・43・47）：内湾気味に立ち上がる。39は内外面横位の条痕後、外面ナデ調整、43は外面ナデ、内面左←右の擦痕。47は口縁部が肥厚、内外面横位の条痕後ナデ調整。

c類（30・44）：口縁内面に断面三角形の粘土帯を貼付。30は内外面ナデ、44は口唇部が幅広い面をなし木理の細い原体によるナデ調整。

d類（46）：口縁外面に断面三角形の粘土帯を貼付、内外面擦痕のうえをナデ調整。

e類（31）：口縁部を外方に肥厚させ、口唇は幅広い面をなす。内面は2枚貝条痕調整。

f類（48・49）：刻目突帯を有する。48は口縁部内側が外反、突帯は断面三角形をなし体部の内面にうめ込むように貼付。刻目は指頭で押圧。49は断面台形の突帯を貼付、突帯刻目は細く口唇の刻はハケ原体で施文。共に内外面ナデ調整。晩期に属する。

③ 有文浅鉢口縁部（図10-55～57）

55は強く内傾する口縁部を有し、外面に2条まで沈線を認める。口縁下に径2mmの焼成前穿孔あり。内外面丁寧なヘラ磨きが施される。56・57は皿状を呈するタイプで、56は口縁内面に粘土帯を貼付し肥厚させる。外面荒いナデ、内面は丁寧なヘラ磨き。57は口縁内面に2条の沈線、その外にRの短沈線を配す。内面ヘラ磨き、外面は左右の擦痕後部分的に磨きをくわえる。

④ 無文浅鉢口縁部（図9・10-45・50～54）

口縁部が外反するもの（45・51～53）、皿状を呈するもの（50）、波状口縁を有するもの（54）がある。例外なく内外面を丁寧にヘラ磨きしている。

⑤ 深鉢胴部（図10）

深鉢の胴部文様は大きく4種に分けることができる。⑦磨り消し縄文（5・58・61～64・71・72）、①沈線文（9・59・60・65・67）、⑨隆帯を施すもの（68～70）、⑩縄文地（73～75）である。⑦は、すべてR L縄文を施し、58・61・63・66は沈線区画内に縄文を充填しているのに対して62・64・71・72は沈線区画外に縄文を施している。これらの沈線は、S X 1出土の5・9とは異なり全く「ドテ」を残さず、「ドテ」の部分を丁寧にナデあるいは磨きでつぶしている。①の59はクランク状の沈線を4本、他の3例は2本単位の区画沈線を描く。これらの沈線は「ドテ」を残して施文される。⑨は断面台形、カマボコ状の隆帯で、69は隆帯の上下を沈線で画し隆帯の中にも1条の沈線を施す。隆帶上面にはR Lの縄文を施している。⑩は3者共にR Lの縄文を施し、頸部無文のタイプであろう。

⑥ 浅鉢胴部外面（図10）

66・76～78、共に有文浅鉢の胴部片である。66は2本沈線の磨消縄文で外面に赤彩、76～78は幾何学的文様を配し内外面丁寧なヘラ磨きを施す。

⑦ 底部（図11）

図示し得たものは4点であり、すべて深鉢底部である。81は高台状の強い上げ底で、他は5mm

内外の上げ底である。80の外面には2本の垂下沈線端部が認められる。79・82は底部成形法を観察することができる。

(6) 包含層出土の石器（図11）

83は、切目石錐と考えられる。長さ11cm、幅2.3cm、厚1.2cm、重さ40gで、一方の端部にのみ幅5mm、深さ2mmの切り目を入れている。御荷鉢緑色岩の自然礫を利用している。85は、「石包丁状」の石器である。大部分が欠損しているが一方の短辺の抉り部を確認することができる。サヌカイト製である。

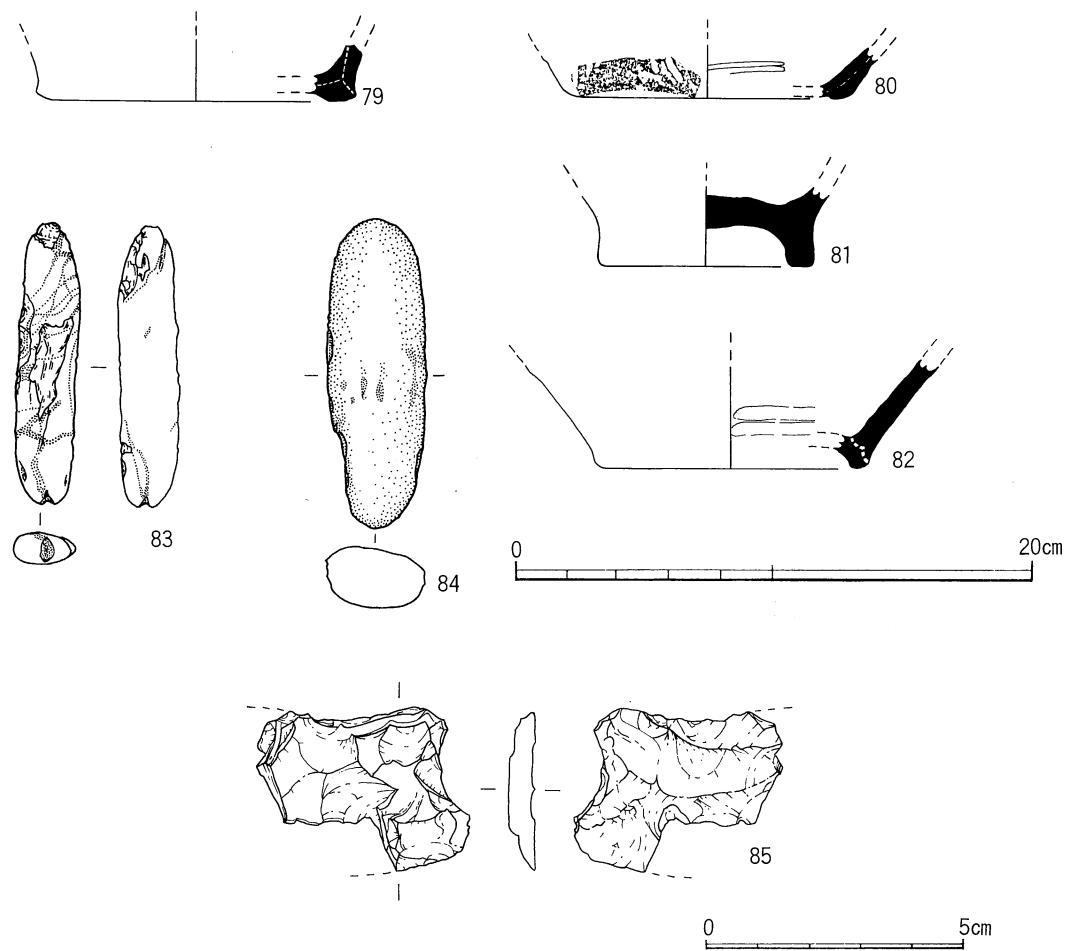


図11 包含層（79～82・83・85）及びSX 2（84）出土の遺物

3 弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1) ST 1

Eトレーナーで検出した一辺5mを測る隅丸方形の竪穴住居址である。西側をST 2に切られ、東壁の一部をピットによって切られている。検出面から床面までの深さは30cmを測るが、4面に高さ10~15cmのベッド状遺構を有している。南面と西面のベット部は版築法によって造り出し(Ⅲ層)、北面と東面のベッド部は地山削り出しによって段部を成形している。埋土はⅠ層淡茶色シルト層、Ⅱ層：黄茶色シルト層である。中央ピットは床面中央より南に偏したところにあり、1.0m×0.58mの楕円形で深さ10cmを測る。断面は船底状を呈し底面に炭化物が薄く堆積し、南西コーナー部分で焼土を検出したが中央ピット壁面は全く焼けていない。主柱穴はP1~P4を想定しなければならないが、P1とP4の位置が不可解である。P2はベッドの

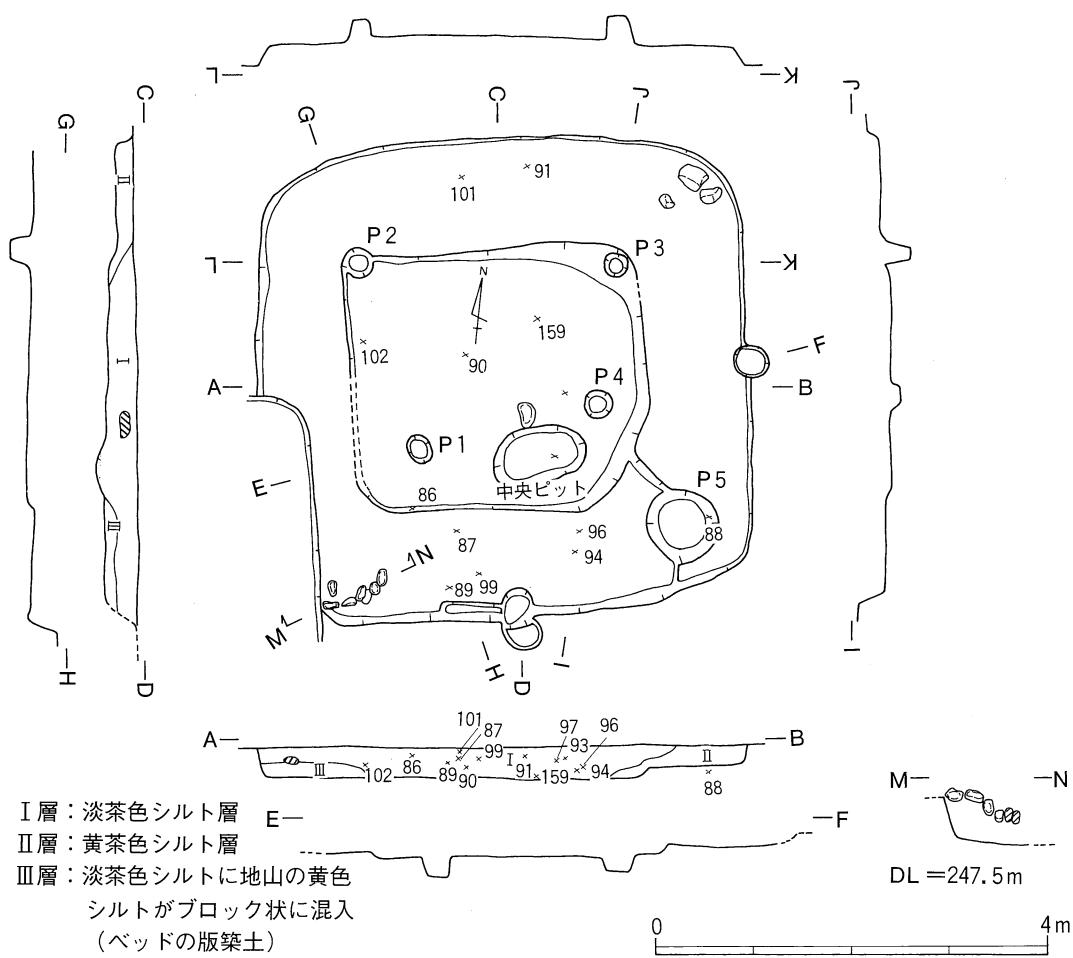


図12 ST 1 平面及び断面図

版築土を少しづつ削り下げる途中で検出し得えた。このことから版築後に柱穴を掘り込んだことがわかる。これら主柱穴の掘り方は径30cm内外、深さ20~30cmを測る。また主柱穴としたものとは別に南東コーナー部に径70cm×80cm、深さ40cmの大型ピットがあるが性格不明である。

遺物は埋土各層及び床面から甕・鉢が多く出土している。壺は2点出土している。86は大きく開く口縁部を有するもので、87は二重口縁風を呈する。88~90は甕で共に口縁部まで叩き出している。88は床面出土である。95・98・100・101は甕底部で、98は尖底であるが他は平底である。91~94・97・102は鉢で、器高は総じて深いがその形態はバラエティーに富んでいる。91・97・102はコップ状を呈し、93の底部は高台状の低脚がつく。椀状の体部を有する94は床面より出土している。96も鉢底部である。99は小型器台の環部の可能性がある。I層出土であり混入の可能性がある。石器は石包丁(159)と石鎌(172)が出土しており、前者は半分程が欠損しているが短辺に弱い抉りを有する打製石包丁で、長さ7.0cm、幅3.6cm、厚さ0.8cmに復元し得る。結晶片岩製でベッド部床面より出土している。石鎌は、長さ2.8cm、基部幅1.55cm、厚さ0.4cm、重さ1.8gを測るサヌカイト製の平基式石鎌で、一方の正面から剝離し刃部を形成している。I層出土であり混入の可能性がある。これらの遺物の他、ベッド部版築土中より縄文後期土器細片2点と弥生中期土器1点が出土している。また、図12に示したように南西コーナーより内側に向って拳大の河原石を7個列状で検出し、中央ピット脇や北東コーナーでも人頭大の河原石が数個検出できた。これらは床面より浮いていることからST1の埋没過程で入ったものと考えられる。ST1は床面遺物から見て弥生後期6期に比定することができる。

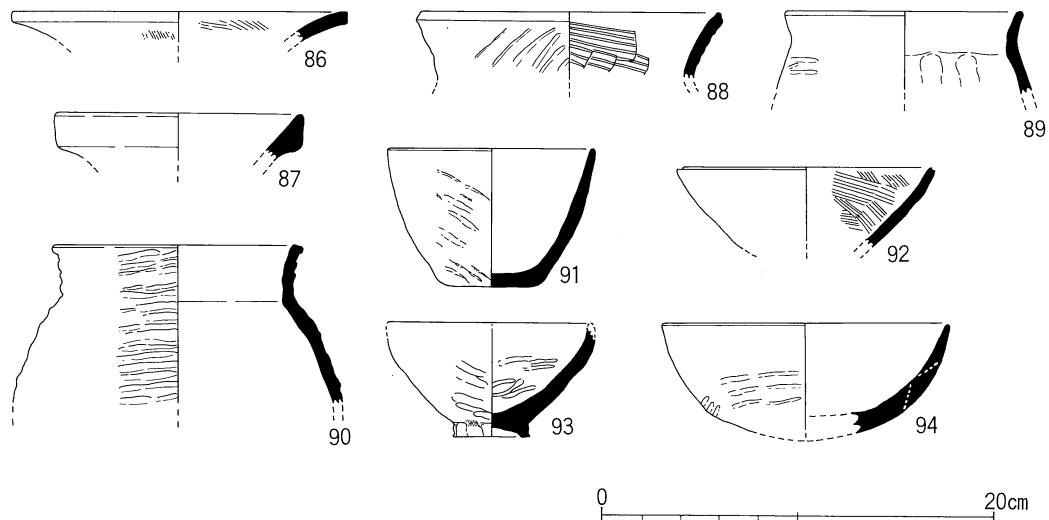


図13 ST1出土の土器

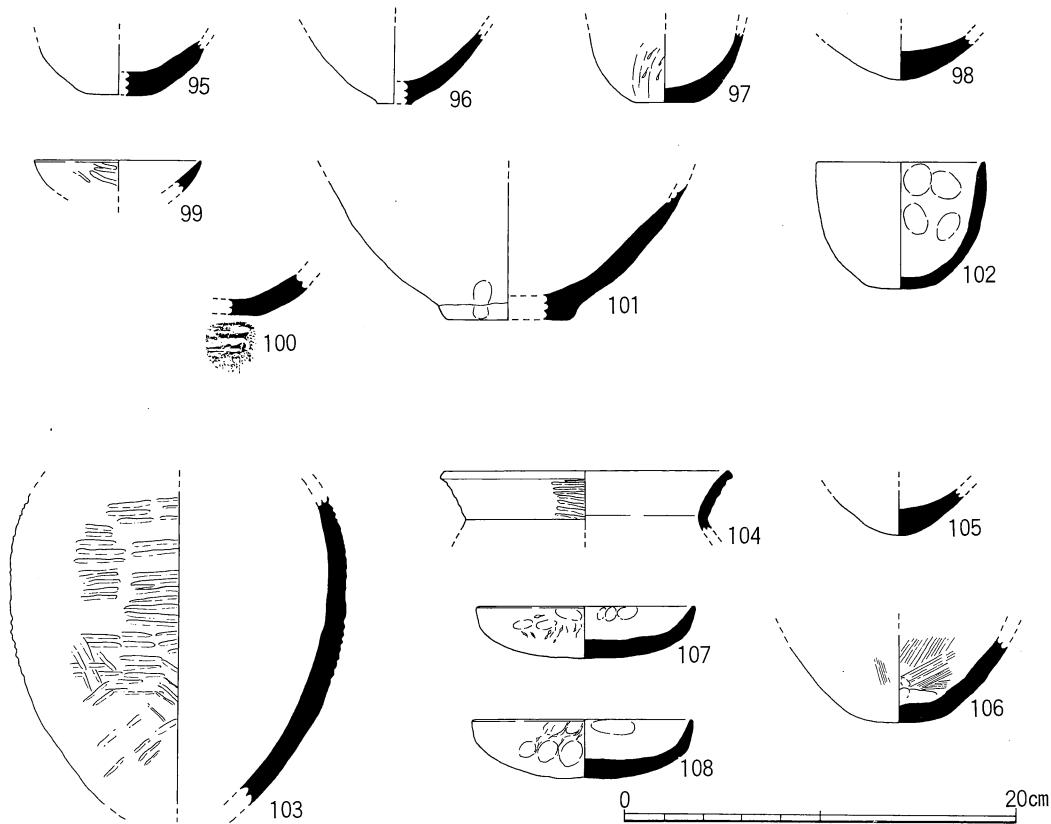
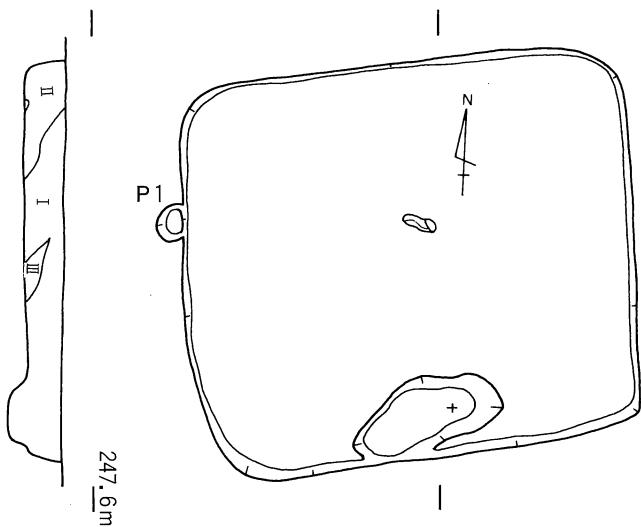


図14 ST 1 (95~102) 及び ST 2 (103~108) 出土の土器

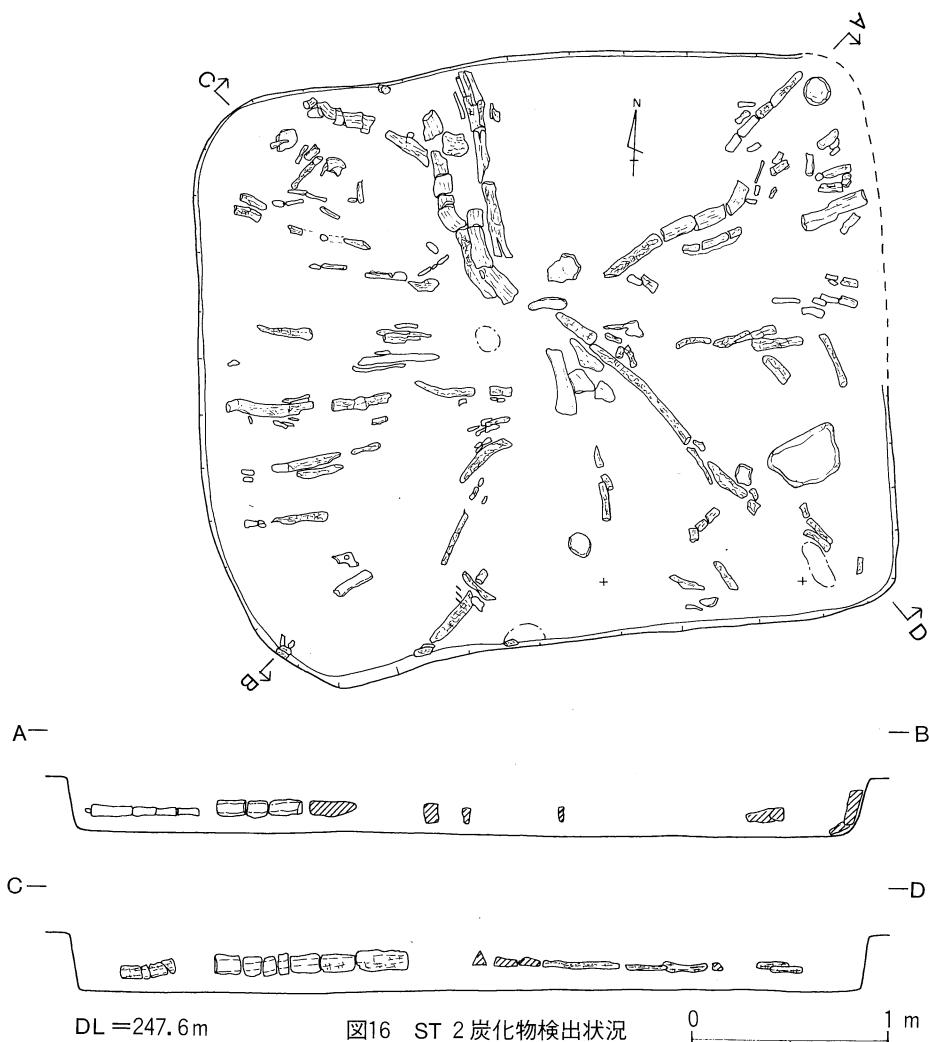


I層：淡黄灰色シルトに暗茶色
シルトがブロック状に入る
II層：淡黄茶色シルト層
III層：I層に炭化物が多量に入る

図15 ST 2 平面及び断面図

(2) ST 2 (図14・15・16)

Eトレーナーで検出した3.5m×3.1mの比較的小型の隅丸方形の竪穴住居址で、ST 1を切っている。南東コーナー部のみ他のコーナーよりも角張っている。検出面から床面までの深さは30cm前後を測る。床面から柱穴等を検出することはできなかったが、南壁側に1.2m×0.56m、深さ10cm前後の不整楕円形状の小土坑が設けられている。西壁のピットはST 2に伴うものか否か不明である。埋土はI層：暗茶色シルトがブロック状に入った淡黄色シルト層、II層：淡黄茶色シルト層、III層：I層に多量の炭化物がいった層準である。ST 2では図16に示したとおり多量の炭化物が検出された。建築材に使われたと考えられる大・小の柱状の炭化材が放射状に横たわっていた。これら炭化材の直径は、1cm程のものから10cm近くを測るものまで存在



し、比較的大きな材はコーナーとコーナーとを結ぶC-Dのライン上に顕著に認められる。これは棟木の可能性がある。またA-BラインのA側寄りにも大型の炭化材がC-Dラインに直交するかたちで横たわっている。径の小さい炭化材は垂木とも考えられるが、C-Dラインに対して必ずしも直交していない。この他壁にそって直立したまま残っているものもある。しかしこれらの炭化材の多くは床面から7~10cmほど浮いており周囲が全く焼けていない。しかも炭化材は焼け落ちたと言うよりも蒸し焼きされた木炭と同じ状態で残っている。いかなる状況下で炭化したのか不可解な点が残ると言わざるを得ない。また大型の炭化材には、表面の面取り加工が施されている。加工痕から明らかに鉄器が使われており、面取りの幅は2cm~5cm前後である。

遺物は比較的少なく、甕(103~106)・鉢(107・108)及び石錐(173)が出土している。103は甕の胴部で下半を右上り、中位を水平方向に叩いて仕上げており下位の叩きはかなりナデ消されている。104は叩き出し口縁を有する甕の口縁部、105・106も丸底を呈する甕底部である。107・108は共に皿状の鉢で内外面に指頭圧痕が顕著である。104と105・106は床面から出土している。173は、チャート製で先端部がわずかに欠損している。混入の可能性が強いST2は古墳時代初頭に属する。

(3) ST3(図17~20・24・25)

Dトレーナーで検出した7.3m×6.5mの隅丸方形の堅穴住居址である。検出面から床面までの深さは40cmを測るが、東壁の一部を除いて10cm~17cmの厚さに版築(VI層)したベッド状遺構が設けられている。ベッド状遺構の幅は、1.1m~1.9mを測り南壁側が広く、それ以外の部分は狭い。埋土はI層:濃茶色シルト層、II層:黄色シルトの小ブロックの入った茶色シルト層、III層:黄色シルトの大ブロックの入った茶色シルト層、IV層:赤茶色シルト層、V層:暗茶色シルト層である。II層中には人頭大の河原石が数多く混入していた。ベッド状遺構以外の床面は、極めて堅緻に踏み堅められている。主柱穴はP1~P3・P5であり、床面中央部には径50cm、深さ40cmの中央ピット(P6)がある。主柱穴の掘り方は径30cm~50cmを測り、P1~P3で検出し得た柱痕跡から径20cm前後の柱を主柱として使用していたことが窺われる。東壁側のベッド状遺構が切れたところには、1.3m×0.9~0.8・深さ20cmの土坑が設けられている。壁下には、幅15cm前後、深さ10cm未満の壁溝が、北壁の一部と土坑部を除いて巡っている。しかしこの壁溝はベッド状遺構の上面では一部しか確認できなかった。図17に示したセクション図のA-B、C-Dラインを観ても明らかなように、壁溝はベッド状遺構の版築土(VI層)によって埋められていることが判る。北西及び南西のコーナー部分では壁と壁溝肩との間に僅かな平場が造られているところから拡張の可能性も考えられる。いずれにしてもベッド状遺構の版築後においては壁溝は埋められており排水溝などとしては機能していない。ベッド状遺構の版築土(VI層)を取り除くと図18のようになる。南側部分に地山の僅かな高まりが残り、そこから南壁溝までの間約90cm幅で地山を抉り込んでいる。また南壁側の壁溝内側肩の部分には細

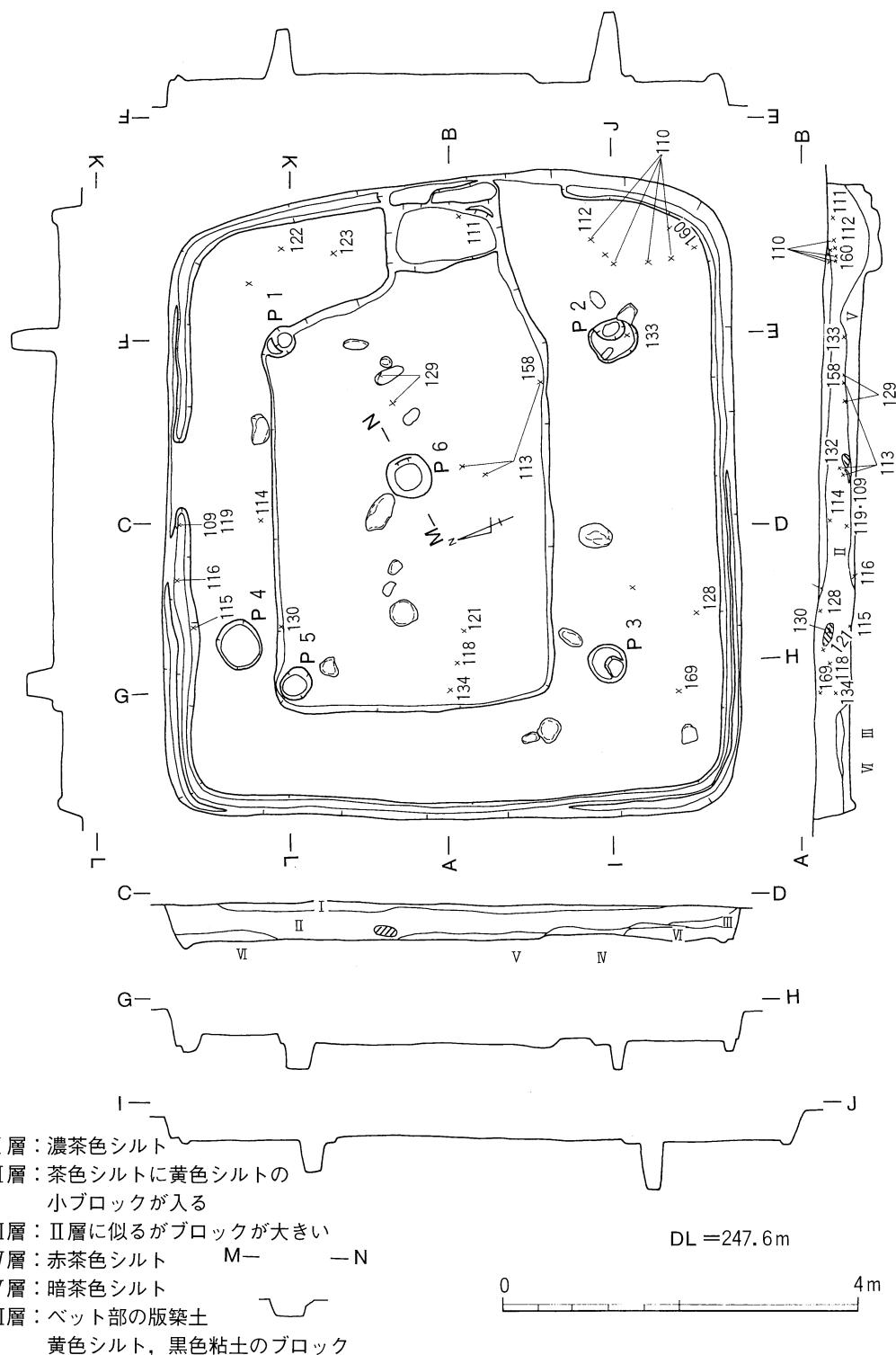


図17 ST 3 平面及び断面図

長く残された地山の平場が認められる。ベッド状遺構の版築に際して、床を平滑にする時偶然に起伏が残った可能性もあるが、同様な例は西分増井遺跡のST12₍₁₎でも確認されていることから今後類例の増加をまってベッド状遺構構築法として検討を加えなければならない。今一つ遺構について注意すべき点は中央ピットについてである。中央ピット埋土中には多量の炭化物が入っているが壁は全く焼けていない。そして先述したように床面は踏み堅められているが、中央ピットの外縁部は幅20cmにわたって全く踏み堅められていない。このドーナツ状の部分は、都出氏₍₂₎の言うように炉壁帶が設けられていたものと考えられる。

遺物は床面及び埋土Ⅱ層中より完形品を含む多量の土器・石器が出土している。後述するよ

うに埋土中の土器も床面出土の土器も時期差はほとんど認められず同時期の所産として把握することができよう。器形別に見ると甕：鉢：高壺：壺：他=13：3：2：2：2となり甕が全体の6割を占めている。個々の土器の詳細については後章で触れることとし、ここでは出土状について述べる。甕(109～116, 117～124)は、116が北壁側の床面から、113・118・119はⅡ層中位から、109は北壁のベッド状遺構床面直上から出土しており、113は3地点から出土した接合土器である。また110も1片

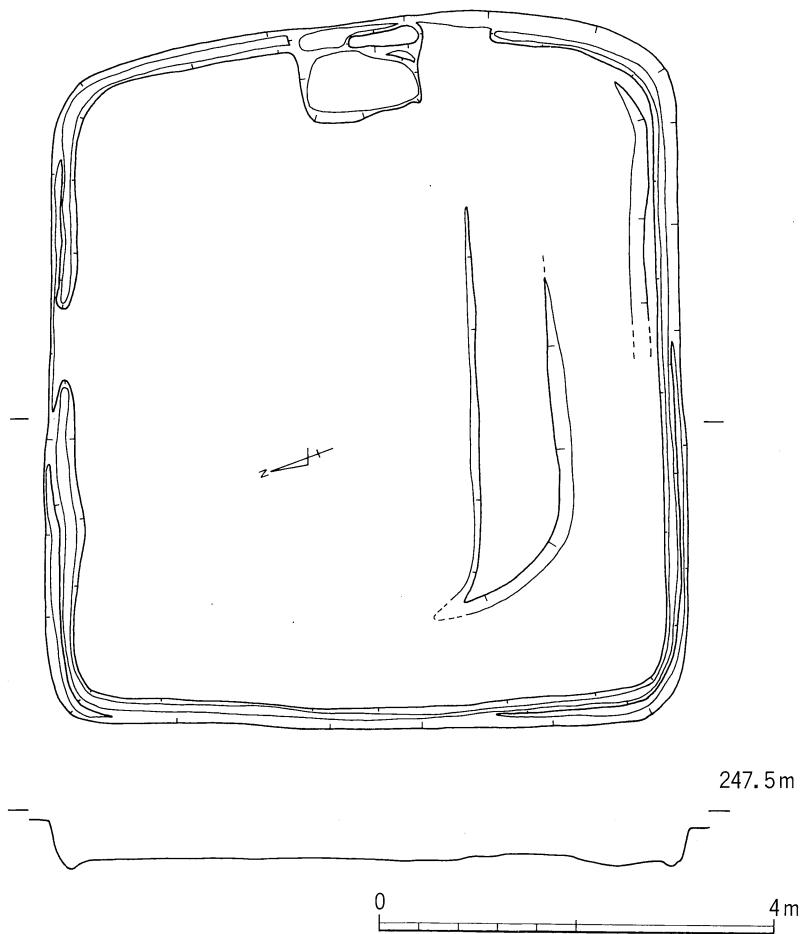


図18 ST 3 ベット部分を除去した状態

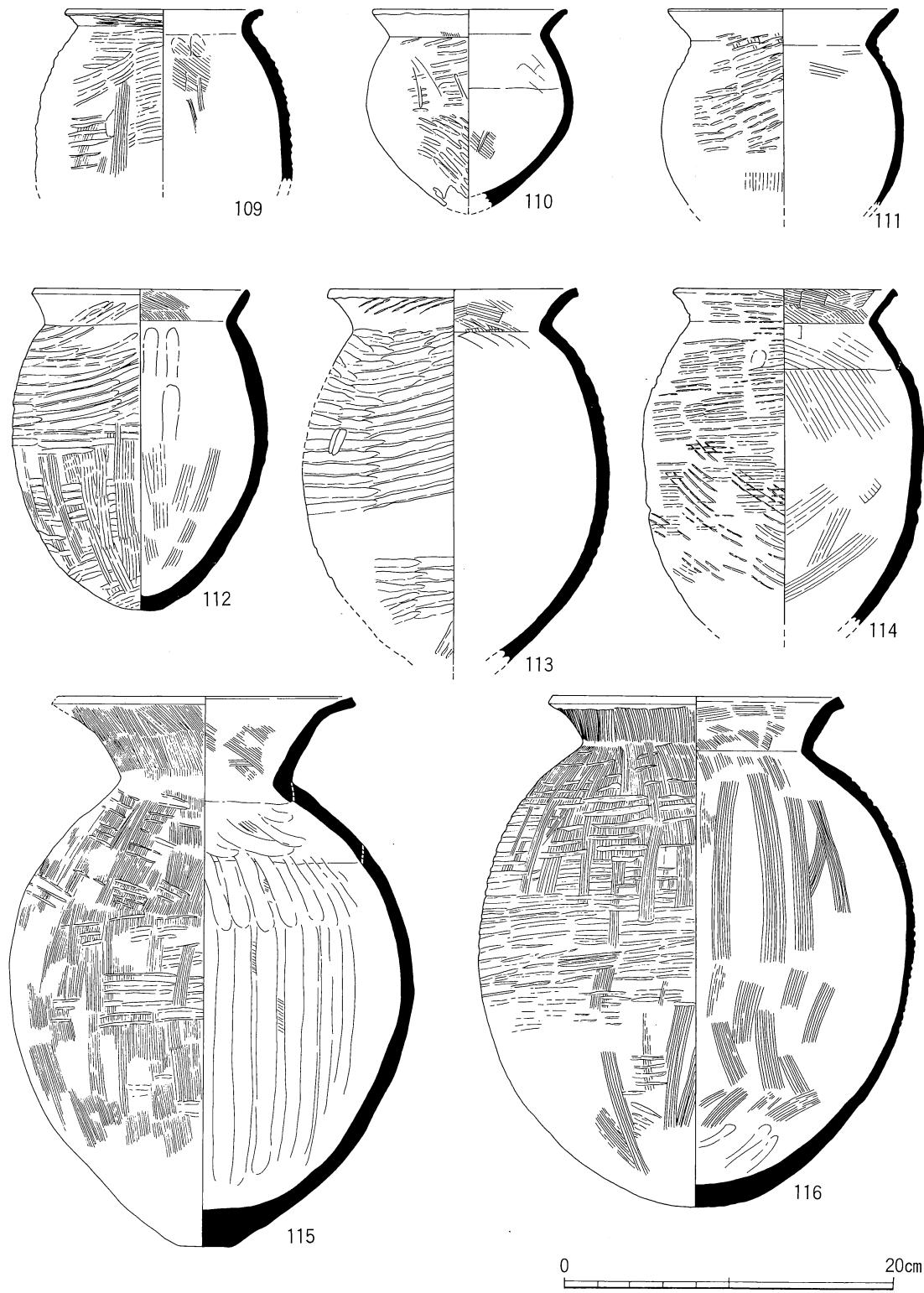


図19 ST 3 出土の土器

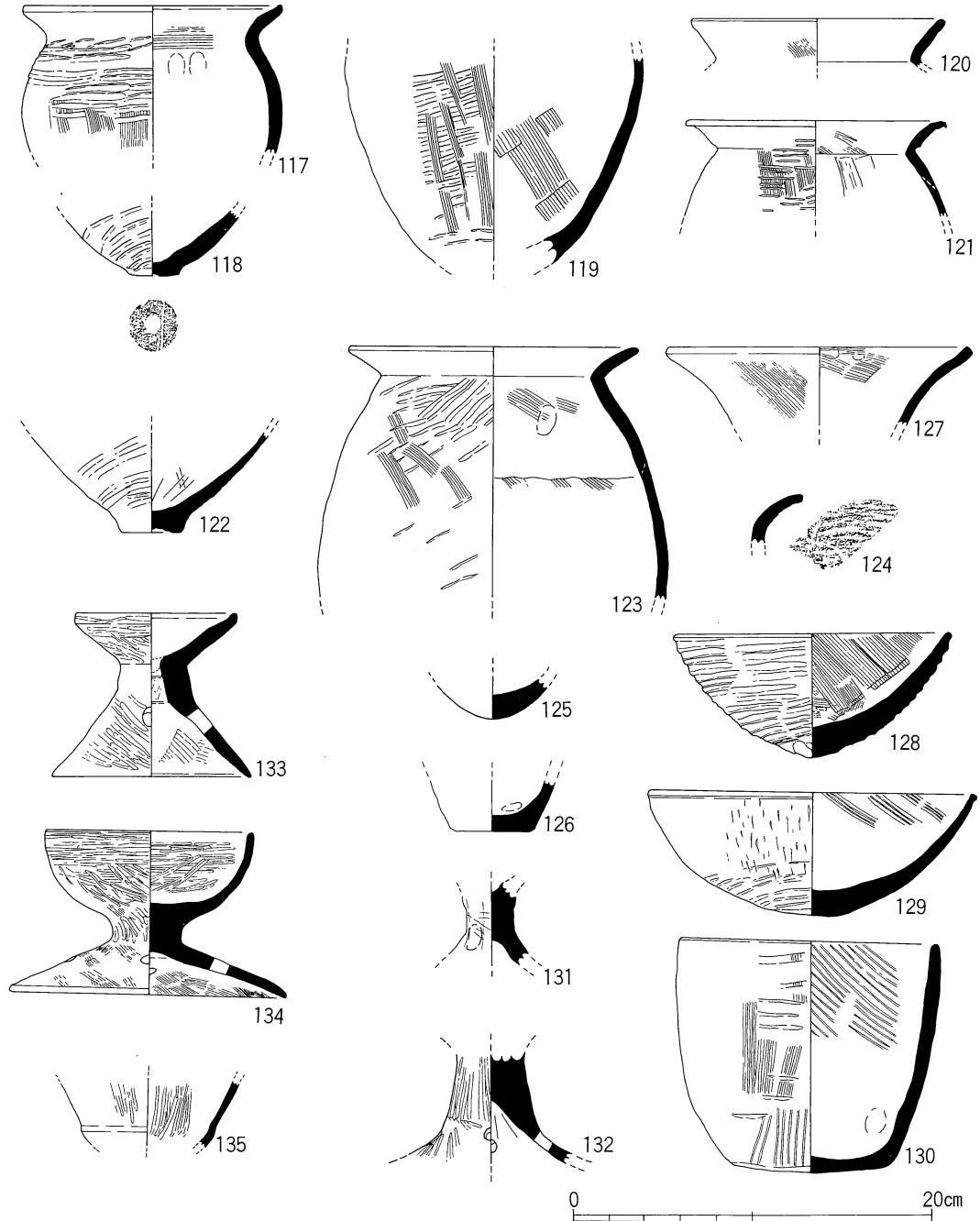


図20 ST 3 出土の土器

がⅠ層、3片がⅡ層上位から出土して接合できたものである。壺は完形の115と口縁部のみの127であり、115は甕116と接近して床上から出土している。鉢（128～130）は、130が完形品、他のものもほぼ復元完形であり三者共にⅡ層中より出土している。高杯（134・132）は、134が埋土Ⅱ層中位で俯せの状態で出土し、脚部片（132）はⅡ層中からの出土である。この他に脚部（131）が出ているが、これはS T 3が埋まった後に掘られた小ピット中から出土したものである。小形器台（133）は、ベッド状遺構に掘り込まれた主柱穴（P 2）の掘り方の最上層面より出土した完形品である。これは出土状況から見る限り、P 2に主柱を立て掘り方に土を埋め戻した最後の段階に133を意識的に入れたものと考えられる。一種の柱穴祭祀の可能性が強い。これらの他に小型丸底壺（135）・鉢あるいは甕底部と考えられる破片（125・126）が出土している。

石器は打製石包丁2点（160・162）、叩石3点（166・169・171）、石錐1点（170）が出土している。石包丁は、共に結晶片岩製でⅡ層上位より出土している。160は直線刃で背部が僅かに内湾気味をなす長方形のもので長さ7.7cm、幅3.7cm、厚さ0.7cm、重量25gを測る。刃部は片側から剥離して刃部を造り出している。背部にも剥離痕がそのまま残っている。162も長方形を呈するものであるが一方の端部寄り2.5cmには刃部が造り出されていない。長さ9.2cm、幅4.2cm、厚さ0.5cm、重量39gを測る。叩石は三者共に御荷鉢緑色岩製で、166・169は自然の円礫を使用したものである。166は265gを測り、両正面中央部と両側縁に敲打痕がある。167は490gを測り、両側縁の中央部に敲打痕がある。171は中央ピットから出土しており、円礫を縦に割ったものである。石錐（170）も御荷鉢緑色岩製で長さ11.3cm、幅3.1cm、厚さ1.4cm、重量85gを測る。量端部を打ち欠いており、両長側縁の中央部に使用によるものと思われる凹みが認められる。この凹みが使用痕であれば縄を十字にかけて使用したことが考えられる。この石錐はⅡ層上位出土であるが、縄文時代の遺物である可能性がある。S T 3は弥生時代後期7期に比定することができる。

(4) SK 1 (図21)

Aトレンチ北部で検出した。1.3m×1.2mの楕円形の土坑であり深さ20cmを測り、床面は平坦で、東側の壁は直角に近く西側の壁は斜めに立ち上がっている。埋土は茶色シルトの単純一層で、遺物は西側壁の中位にへばりついた20cm×10cmの河原石のみである。土器がないことから時期比定が難しいが埋土から見て堅穴住居址とほぼ同時期のものであろう。

(5) SK 4 (図21・22)

Aトレンチの南部にあり後述するSD 1を切っている。1.73m×1.15mを測る不整楕円形を呈し、最も深いところで36cmを測る。北壁と西壁の一部が段状に掘り込まれており床面は僅かに船底状をなす。埋土はⅠ層：暗茶色粘性～シルト層、Ⅱ層：Ⅰ層と同じ土質であるが多量の炭化物が入っており、人頭大から拳大の河原石が数多く出土した。土器の多くはこれらの礫の下から出土している。土器は甕胴部（136・138）・甕底部（139・141・142）・鉢（144）、石

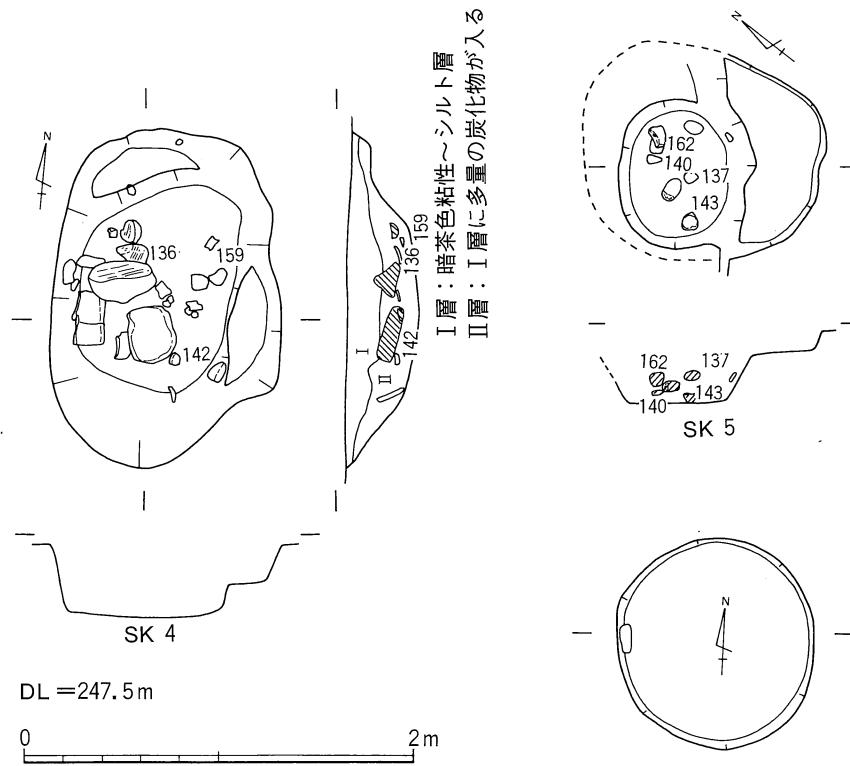


図21 SK 1・4・5 平面及び断面図

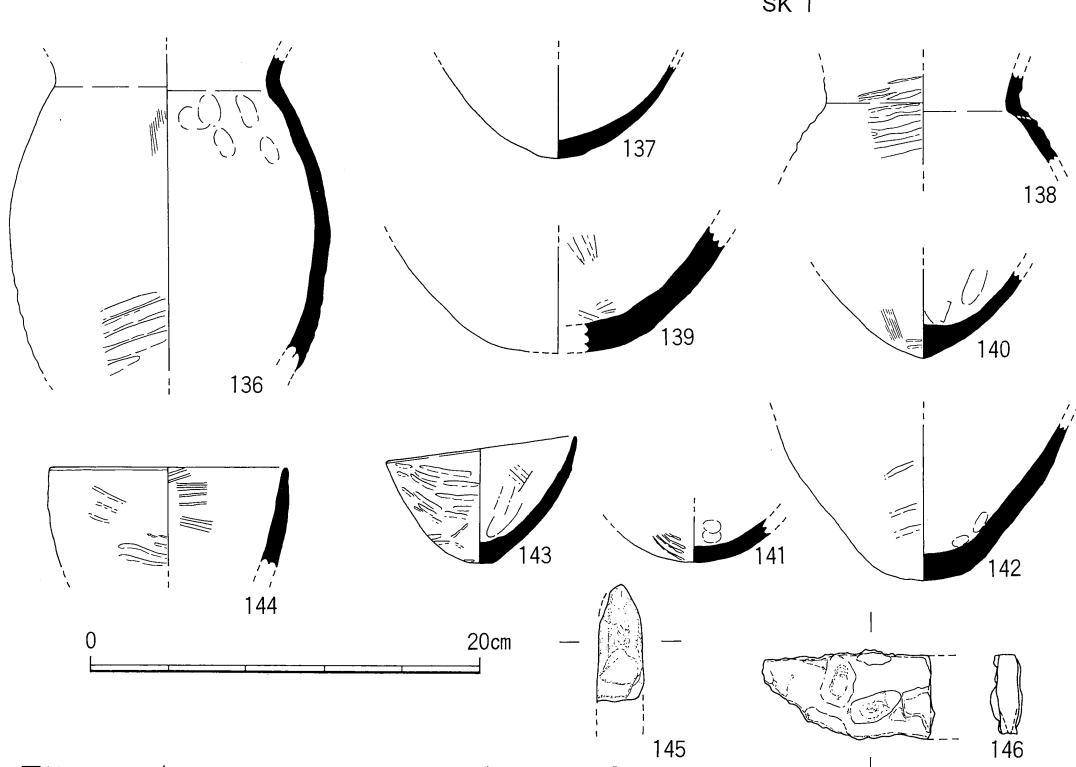


図22 SK 4 (136・138・139・141・142・144) ・ SK 5 (137・140・143) の土器及びSK 4 出土の鉄器 (145・146)

器は打製石包丁（161）が、鉄器は、鎌（145）と刀（146）が1点づつ出土している。139がⅠ層出土で他はすべて床面直上ないしはⅡ層下位出土である。甕・鉢共に叩き成形、底部はすべて丸底である。石包丁（161）は結晶片岩製で長方形状を呈し両短縁を抉っている。長さ8.2cm、幅4.3cm、厚さ0.7cm、重量40gを測る。刃部・背部共に両側より剥離しているが、背部は先端が少し丸味を帯びている。鎌（145）は、刃部先端の反り部分である。刀（146）も切っ先部分の長さ4.5cmの残欠である。身の幅2cm、厚さはサビの為に正確に測れない。SK4は古式土師器1期に属する。

(6) SK5 (図21・22・24・25)

SK4の北隣にありSD1を切っているが、北・西側のプランを正確につかむことができなかった。しかし長軸1.5m、短軸1.3m前後の隅丸方形状のプランを有する土坑と考えられる。南東側は二段に掘り込まれており、埋土は暗茶色シルトの単純一層である。遺物は段部より下層から、土器・砥石・叩石などが出土している。土器は甕底部（140）・鉢（137・143）で、共に叩き成形による。140は尖底で、143は平底、137も僅かに平底を残している。砥石（164）は、砂岩製で4面使用、657gを測る叩石（167）も砂岩製で橢円形の河原石990gを使用している。一方の側縁が大きく剥離しているが、敲打痕は両端面に顕著に残る。168も河原石を使用したもので、一方の端部に敲打痕が認められる。石英粗面岩で440gを測る。SK5は弥生後期7期～古式土師器1期に属する。

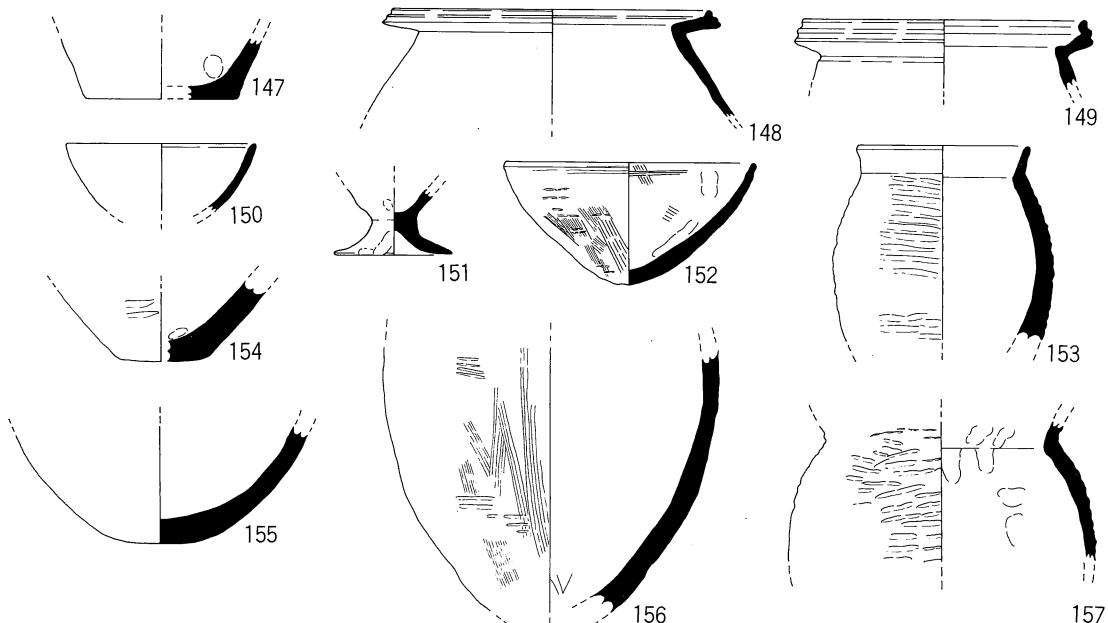


図23 SD1 (147~149)・P20 (150)・包含層出土 (151~157) の土器

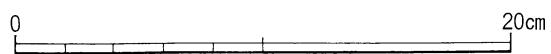
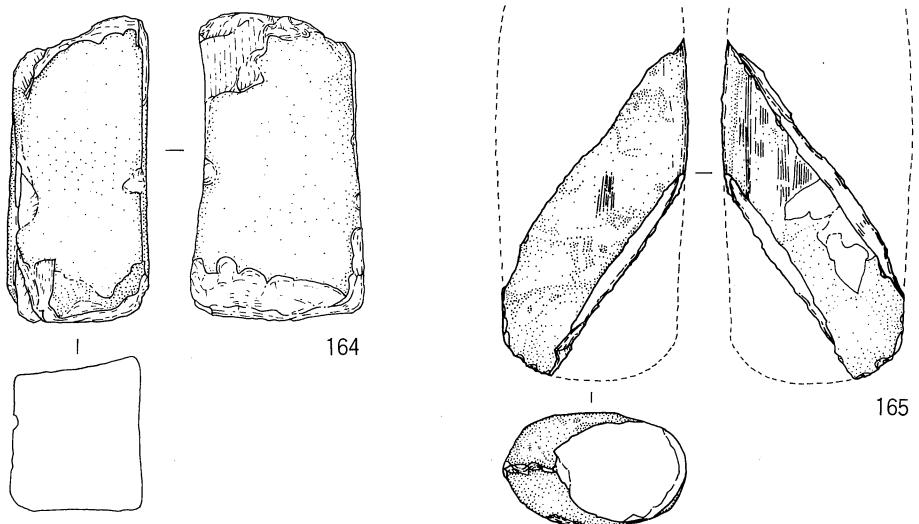
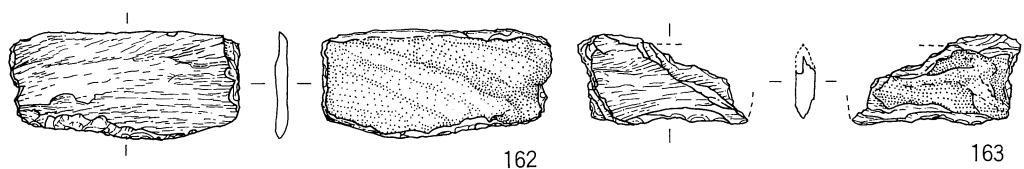
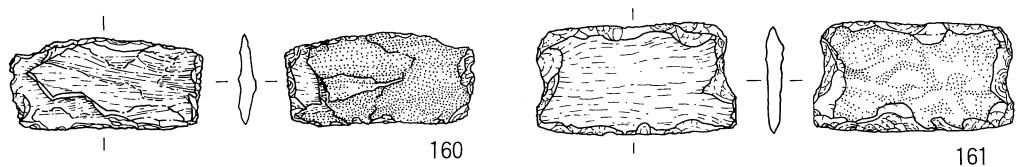
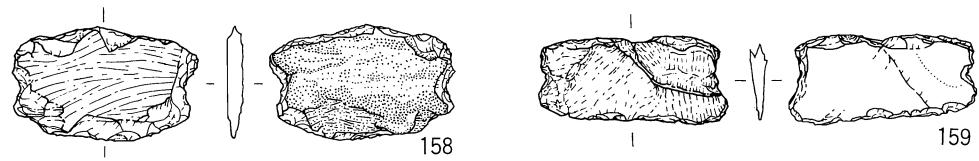


图24 石庖丁, 太型蛤刃石斧, 砧石
(ST 3 : 160・162, ST 1 : 159, SK 4 : 161, SK 5 : 164, SD 1 : 165, 包含層 : 158・163)

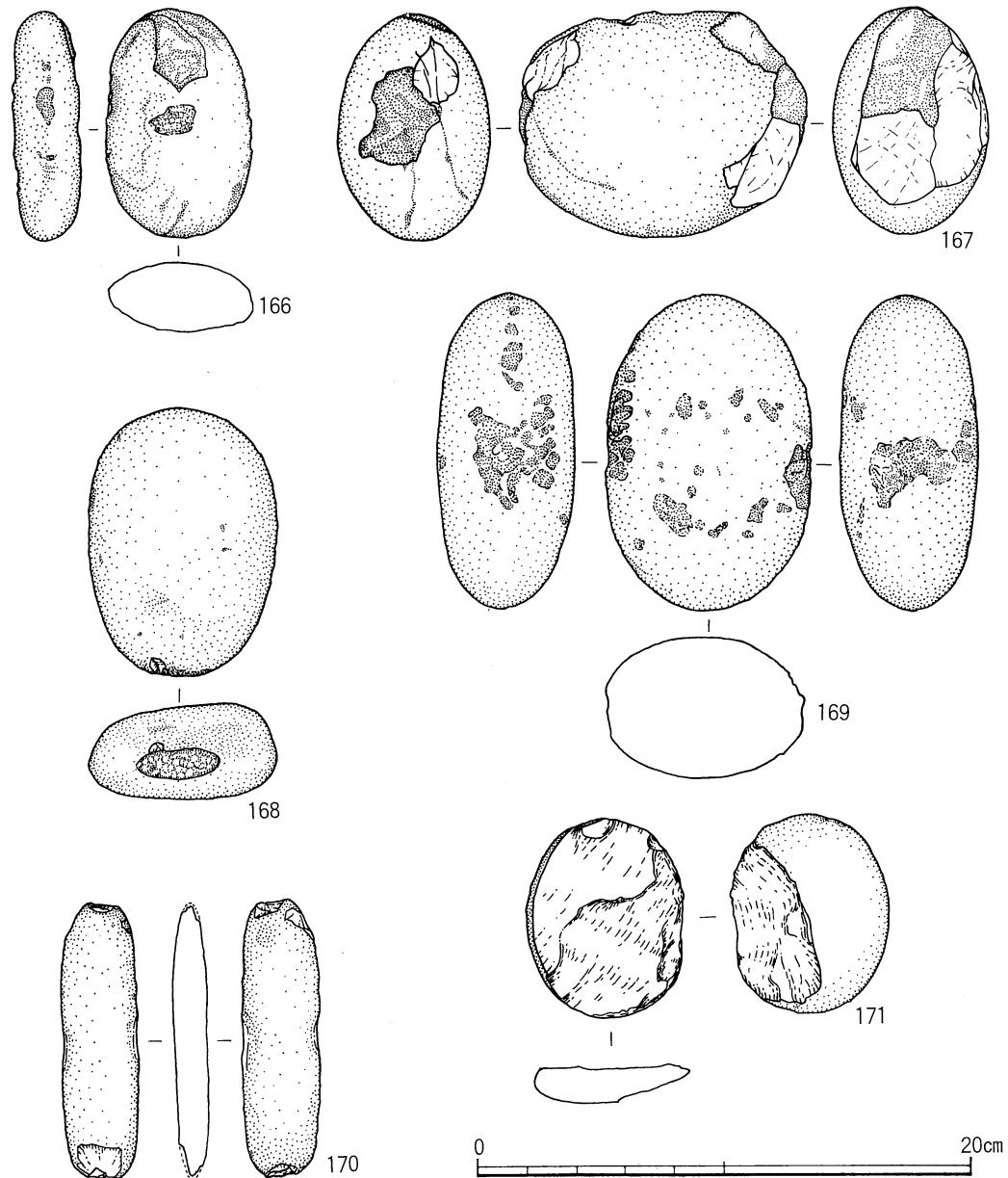


図25 石器実測図

0 5cm
叩石 (166-ST 3, 169-ST 3,
167-SK 5, 168-SK 5)
石鏃 (172-ST 1), 石錐 (173-ST 2)
石錐 (170)

(7) SD 1 (図4・5・23)

調査区を南東から北西方向に走る溝でA・Bトレンチで検出した。幅1.4m前後・深さ0.6m～1.2mを測り、南に来るに従って深くなっている。断面はV字状ないしは逆台形状を呈する。埋土はI層：暗茶色シルト層、II層：暗茶色シルト層に濃茶色及び黄茶色のシルトがブロック状に入る層準で、ところどころ地山（黄茶色火山灰土層）の崩落土がある。遺物はB区の検出面直下及びI層中より壺（147）と甕（148・149）と太型蛤刃石斧（165）が出土している。147は底部で内外面ナデ調整を施している。148・149は共に口縁部に凹線文を有する甕口縁部であり、両者共に体部下半にはヘラ削りを有するタイプである。165は斜めに大きく欠損しており、かろうじて刃部の一部が残存している。御荷鉢緑色岩製で器表は丁寧に研磨している。幅7.3cm、厚さ4.7cm、長さは30cm前後と推定される。この他埋土中より縄文土器が少量出土している。SD 1は弥生中期3-1（畿内第4様式前半）に属する。

(8) P 20 (図23)

EトレンチにありST 2を切るピットである。径40cm、深さ28cmを測る。埋土中より古式土師器の鉢（150）が出土している。150は内外面ナデ調整で内面には炭化物が著しく付着している。

(9) 包含層出土の遺物

I～III層及び調査区以外外周に排水溝を設けたときに出土した遺物である。弥生時代後期末から古墳時代初めに属するもので詳細は観察表に記す。

第V章 考察

1 縄文時代の遺物と遺構

(1) 遺物

今次調査で出土した縄文時代の遺物は土器と石器であり、土器は晩期の2点を除くとすべて後期に属する。これらの出土状況についてはすでに述べたように、遺構出土のものは少量で多くは包含層及び弥生後期・古墳時代の竪穴住居址埋土中からの出土である。唯一S X 1の出土の遺物も細片が多く必ずしも一括性の高いものとは言えない。90年度の調査で出土した縄文後期土器については、すでに報告書 I⁽³⁾で述べたように西日本の後期土器編年と組成を考える上で重要な位置付けがなされており、各方面から注目を集めつつある。今次調査資料は前回に比すると僅少であるが、前回の調査では認められなかったタイプもいくつか存在しており、時期的な幅も大きいものと考えられる。全体の形状を明らかにできる土器は一例もないが、第IV章において口縁部・胴部文様の特徴によって分類を行った。ここではそれらをもとに前回の資料と対比しつつ編年的位置付けを中心に若干の考察を行いたい。

① 後期土器

① 有文深鉢

口縁部の形態からA類～G類に、胴部文様から⑦～⑨類に分けることができた。A類(25)は3本沈線を基調とする磨消縄文を有するもので従来の編年では福田KⅡ式の範疇で把えられるべきものであり、しかも口縁下に3本沈線の縄文帯が施されるというは福田KⅡ式の中でも「古段階」とする見解がある⁽⁴⁾。しかし千葉豊氏自身も述べられているように、25の口縁部には短沈が施されており、これは福田KⅡ式には少ない新しい要素、すなわち波頂部において沈線がどのように展開するのか不明であるが松ノ木式に通じる要素である。B類(24)も波頂部から降る沈線が波頂部内面から生じていない点で福田KⅡ式よりも新しい要素として把握することができる。C類(11～22)は、口縁部内面施文・頸部無文の原則を特徴とするもので、松ノ木式土器様式を構成する中心的なタイプである。20のみ波頂部下の頸部外面に2条の垂下沈線が施されている。また21以外はすべて内側に貼付した粘土帯が大きくしっかりとしている。これらはすべて沈線外側の短沈線が例外なく当該期の縄文の撲り(R L)と同じR(右下り)に描かれている。施文の順序は縄文→沈線→刻目であ

表1 有・無文深鉢分類表

	分類	土器
有文深鉢口縁	A類	25
	B類	24
	C類	11～22
	D類	23・33
	E類	34～36
	F類	26～29, 32・37
	G類	8
有文深鉢胴部	⑦類	5・58・61～64 71・72
	⑧類	9・59・60・65 ・67
	⑨類	68～70
粗製深鉢口縁	⑨類	73～75
	a類	4・38・40～42
	b類	39・43・47
	c類	30・44
	d類	46
	e類	31
	f類	48・49

る。D類（23・33）も内面施文型に属し頸部外面無文もC類に共通するが、内面を肥厚させていない。松ノ木式に後出する彦崎KⅠ式である。E類（34～36）は、90年度の調査では1点のみ出土している。口縁部断面形がスプーン状をなす点と器面調整に特徴がある。後者は沈線を描く際に生じるドテを丁寧に磨き取り、36の口唇部に認められるように縄文帯の一部まで丁寧なヘラ磨きを施している。このタイプは小路頃才ノ木遺跡⁽⁵⁾などでまとまって出土しているものに類似している。玉田芳英氏は中津・福田KⅡ式土器様式の第3様式古段階に位置付けている⁽⁶⁾。しかしながら上述のような特徴は福田KⅡ式や中津式には見られない手法であり、その位置付けには検討の余地がある。F類（26～29・32・37）は、口縁部外面施文の土器で、内面施文のものとは系譜を異にするものである。従来の編年に比定すれば津雲A式に属する。G類（8）は、円筒状の把手を有しこの種の把手は福田KⅡに例がある。福田貝塚F K 11出土⁽⁷⁾の366に比べれば退化形態を示しており、本例も松ノ木式に伴うものと考えてよからう。

胴部文様は、磨り消し縄文の⑦類（5・58・61～64・71・72）の中で5・63が宿毛式に属し、58は沈線のタッチからE類と共通している。他は松ノ木式の胴部文様である。沈線の⑦類（9・29・60・65・67）は、沈線脇にドテを残すことで松ノ木式に特徴的なものである。隆帯を有する⑦類（68～70）は、今回初めて出土したものである。県内ではショウガイチ遺跡出土の宿毛式土器の中に類例を求めることができる⁽⁸⁾。胴部全縄文の②類（73～75）は、縁帶文期に盛行する頸部無文のタイプであり、本県中央部では田村遺跡群⁽⁹⁾や西分増井遺跡群⁽¹⁰⁾から数多く出土しているがそれらに比べると縄文の原体が細かいところに特徴がある。

⑩ 粗製深鉢

図示可能なものが18点あり口縁部形態・調整からa～e類に分類した。これらのうちa類（4・38・40～42）は松ノ木式に伴うものである。

⑪ 有文浅鉢

量的には僅少であるが磨り消し縄文を施すタイプ（2・3・7）と沈線文を施すタイプ（55・57）・口縁内面を肥厚させるタイプ（50）がある。2・3・7は皿状を呈し、すべてS X 1から出土している。宿毛式と考えられる。55は口縁が強く内傾するもので、胴部片（76・77）もこのタイプに属し、松ノ木式土器様式を構成する代表的な浅鉢である。57は深鉢D類に伴うものと考えられる。

⑫ 晩期土器

48・49は、共に口縁下に一条の刻目突帯を有するもので、49は口唇部にもしっかりした刻目を施している。これらの刻目突帯文土器が当地域で確認されたのは初めてである。49は、高知平野で遠賀川式土器と共に弥生前期初頭（田村前期1期⁽¹⁰⁾）の土器様式を構成する突帯文甕に直結する土器であり、僅少ではあるが高知平野の弥生前期初頭の土器の生成・展開と理解するうえで重要な資料である。

以上後期土器を中心に所見を述べた。細片が多くかつ量的にも十分に保障されたものではな

いが、南四国中・東部の縄文後期土器の展開を明らかにするうえでいくつかの指摘をすることができる。その一つは、宿毛式土器の存在である。宿毛式土器は言うまでもなく2本沈線を基調とする磨り消し縄文土器で南四国西部を中心に分布する後期前葉の土器である。近年では、中津式・福田KⅡ式との関連で注目されつつあり、分布域も山陰⁽¹¹⁾、中・西部瀬戸内⁽¹²⁾に及ぶことが明らかとなった。本県中・東部における宿毛式土器の出土は初めてのことである。90年度報告書で述べた如く、当地域は福田KⅡ式土器の分布圏外にあり、松ノ木式の先行形式として宿毛式土器が存在することは何ら不可思議ではない。しかしながら松ノ木式土器深鉢の胴部文様として展開を見せる区画沈線文は宿毛式にはつながらない文様意匠である。一方松ノ木式土器様式を構成する有文浅鉢は宿毛式に存在しており、その関連が考えられる。松ノ木遺跡は南四国における宿毛式土器分布圏の東限といふことができるが、松ノ木式土器とは複雑な関係にある。この複雑さは松ノ木遺跡の地理的環境、すなわち吉野川を通して東からの影響、瀬戸内からの影響等、多方面からの情報が流入することとも無関係ではあるまい。この複雑さはそのまま当該期の土器の動き、情報の頻繁な交換のあったことを示すものであり、後期の社会的関係を投影したものに他ならない。

(2) 遺構

S K 2・S K 3・S X 1・S X 2を挙げることができる。ここではS X 1・2及びS K 3を取り挙げる。この三者は相接した位置にあり、かつ90年度の土器集中地点に近接している（直線距離で4～5m）。S K 3は形態から土坑墓、S X 1・2も祭祀土坑か墓の可能性が考えられる。90年度の土器群の性格についてもすでに述べているように祭祀的性格を有するものである。この地点は中位段丘の端部から底位段丘への変化点で営まれた精神生活の場として統一的に把握することが可能である。ここ以外の地点で当該期の遺構が検出されなかったことは、日常的な生活空間から隔離されたところに存在する祭祀的な空間として位置付けることができよう。

2 S T 3出土の土器について

高知県北部吉野川上流域における当該期の土器は、嶺北高校校庭遺跡（永田遺跡⁽¹³⁾）・長徳寺遺跡⁽¹⁴⁾・銀杏の木遺跡⁽¹⁵⁾などで出土しており、すでに岡本氏によって紹介されているが、ST 3出土土器は遺構出土の一括資料であるという点において、また土器組成が豊富であるという点において従来のものよりも資料的価値が高い。近年高知平野及び周辺の地域においては、当該期の良好な資料が増加しつつあり、弥生後期土器を7時期（後期1～後期7）に編年することが可能になった。このうち後期6・7期は畿内において庄内式土器が成立している時期として理解し伝統的第V様式⁽¹⁶⁾期に併行させることができる⁽¹⁷⁾。S T 3出土の土器は、すでに第IV章で触れたように土器組成・個々の土器の特徴などから概ね後期7期に対応させができるが、これまでの高知平野を中心とする7期の資料には見出せなかつたいくつかの新しい

事実が含まれている。

ここでは、その内容を明らかにし若干の検討を行うことによって、S T 3 出土の土器を当地域のみならず南四国中・東部の土器展開との関係の中で明らかにしたい。今一度 S T 3 の土器組成を見ると甕：鉢：高杯：壺：その他=13：3：2：2：2 の割合で出土しており、その他とした土器は小型器台（133）と「小型丸底土器」（135）である。甕と鉢が土器組成の大半を占めるという特徴は、当該期の高知平野の一般的傾向と一致している。以下器形別に考察を加えたい。先ず甕は大きく2つのタイプから構成されている。すなわち長胴砲弾型の在地甕（109～114・116・119・121・124）と完形品ではないが在地甕に比べて器高が確実に低い搬入土器（117・118・120・122）である。前者は高知平野及び周辺部に広く分布するもので、この時期は概ね二段階の接合で製作し、口縁部を叩き出し、底部は丸底を指向している。対して後者は、底部がドーナツ状の輪台によって作られており、外面の叩きは中・南河内で発達するとされる右上りの連続ラセン叩きによっている⁽¹⁸⁾。更に内面には〈クモノ単状〉のハケ目を残している。このような土器製作手法は在地の土器には認められず、土器胎土も在地土器が茶色に発色しチャートなどの大粒の砂粒を含んでいるのに対し、これらは良質のカロインを含み乳白色に発色、粒子も断然細かい。明らかに畿内のいづれかの地域からの搬入品と考えられる。本県ではこれまで古式土師器Ⅰ期に至って西分増井遺跡や五軒屋敷遺跡⁽¹⁹⁾に見られるように吉備や畿内などからの搬入土器が登場するが、7期には認められなかった現象である。壺は、共にラッパ状に開く口縁部を有するもので当該期に広く認められるものであるが、7期設定基準の一つである飾られた壺が欠如している点は指摘しておかなければならない。鉢の中で128と129は一般的型態であるが、130は例を見ないタイプである。小型器台や「小型丸底土器」の出土例は僅少であり、これまで本県では古式土師器Ⅰ期になって登場する器形とされてきたが、今次資料によって後期7期にまで遡ることが明らかになった。小型器台（133）は、古式土師器Ⅰ期のひびのき遺跡 S T 3⁽²⁰⁾や西分増井遺跡群 S T 8 出土例と比べると一見して古相を帯びていることがわかる。「小型丸底土器」（135）も五軒屋敷遺跡 S T 2 出土例に比べると型式的に古相を示している。

以上のように甕において搬入品が複数例認められることや小形三種のうちの2種が7期にまで遡り得ることが明らかになった。伝統的第V様式甕が畿内のいづれの地域で生産されたものか今後究明しなければならない問題であるが、当該期に畿内中心部では庄内甕の生産が開始されているにもかかわらず伝統的第V様式甕が搬入されるということは、後期7期の段階では庄内式甕の搬出が開始されていないことを示すものである。このことは現在7遺跡で確認されている河内産の庄内式・布留式土器がすべて古式土師器Ⅰ期に属することによって裏付けられる。南四国へは、庄内式・布留式土器に示されるところの、それまでの弥生土器生産とは全く異なる政治的目的の達成のために「社会的管理の下で⁽²¹⁾」生産された土器の搬入に先行して、小型三種土器の製作と共に伝統的第V様式甕が搬入されたのである。その際当地域に持ち込ま

れたルートの問題が浮上してこよう。吉野川を徳島方面から遡上したのか、瀬戸内経由か、将又高知平野からのルートか。当該期の徳島平野の様相を見ると黒谷川郡頭遺跡に見られるように叩きを外面に残す土器は減少傾向にあり⁽²²⁾東阿波型土器を生む素地が形成される過程にあることから、同方面からのルートは考え難い。讃岐・吉備においても畿内とは全く様相を異にする土器が展開していることは周知の通りである。高知平野においては後期後半から叩き手法が盛行を見せ古墳時代に入っても叩き手法は全く衰えることがない。従って高知平野から伝わったルートが最も必然的な解釈である。本県には9個の銅鐸が確認されておりこのうち8個が畿内型突線紐式に属し、松ノ木遺跡周辺からも同型式が一個存在していることはすでに触れた。吉野川流域には同形式の銅鐸は1点も確認されておらず、南部にその分布が知られている。見通しとして筆者は、この銅鐸の分布と外面叩きっぱなしの土器残存地域とは有機的な関連があるよう思えてならない。このことは土器や青銅器の分布の特徴にとどまらず弥生時代から古墳時代へという大きな歴史的変化の実態を投影した現象である。同時に前期古墳不在の地域である高知平野の位置付けにも直結する問題であり大いに興味深い。今後の課題としたい。

(註)

- (1) 出原恵三 『西分増井遺跡群発掘調査報告書』 高知県吾川郡春野町教育委員会 1990年
- (2) 都出比呂志 「住居と消費生活の単位」『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店 1989年
- (3) 出原恵三・前田光雄 『松ノ木遺跡Ⅰ』 高知県長岡郡本山町教育委員会 1991年
- (4) 千葉豊 「縁帶文系土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」『史林』 76巻2号 1989年
- (5) 矢野健一 「遺物 縄文土器」『小路頃才ノ木遺跡発掘調査報告書』 1990年
- (6) 玉田英男 「中津・福田KⅡ式土器様式」『縄文土器大観』 4 小学館 1989年
- (7) 泉拓良・松井章 『福田貝塚資料 山内清男考古資料2』 奈良国立文化財研究所 1989年
- (8) 木村剛朗 『高知県梼原の縄文遺跡と遺物』 土佐考古学叢書1 1978年
- (9) 森田尚宏 「縄文時代」『高知空港拡張整備事業に伴う田村遺跡群発掘調査報告書』第1分冊 高知県教育委員会 1986年
- (10) 出原恵三 「高知県田村遺跡の弥生初期農耕文化」『四国における農耕の始まり』古代学協会四国支部 1989年
- (11) 安立克己 「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」『東アジアの考古と歴史』 中巻 岡崎敬先生退官記念論集 同朋社 1987年
- (12) 小都隆 『洗谷貝塚』 福山市教育委員会洗谷貝塚発掘調査団 1976年
- (13) 岡本健児 「嶺北高校校庭出土の遺物群」『長徳寺址発掘調査報告書』 高知県長岡郡本山町教育委員会 1977年
- (14) 岡本健児 『長徳寺址発掘調査報告書』 同上

- (15) 岡本健児 『銀杏の木遺跡の発掘』 高知県長岡郡本山町教員委員会 1984年
- (16) 酒井龍一 「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について」『上町遺跡発掘調査概要』 和泉市教育委員会 1975年
- (17) 出原恵三 「土佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』 古代学協会四国支部第4回大会発表資料 1990年
- (18) 都出比呂志 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』 第20巻4号 1974年
- (19) 角谷和男 『五軒屋敷遺跡調査報告書』 高知県教育委員会 1984年
- (20) 岡本健児・広田典夫 『ひびのき遺跡』 高知県香美郡土佐山田町教育委員会 1977年
- (21) 酒井龍一 「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究』 第24巻2号 1977年
- (22) 菅原康夫 「徳島県の弥生後・終末期土器の変化と社会」 埋蔵文化財シンポジウム資料 徳島県教育委員会 1992年

遺物観察表

捕団番号	出土地	器形	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	分類	胎土・色調	特徴	縄文の 撲り	沈線の 幅(mm)
7-1	S×1	浅鉢	—		0.5~1mmの砂粒 石英・長石 黄茶色	内湾気味に立ち上がり、口縁部内外面に端部側から粘土帶をかぶせて肥厚さす。内面ナデ、外面横位の条痕		
タ-2	タ	タ	—		0.5~2mmの砂粒 石英・長石・雲母 明茶色	わずかに内湾気味に立ち上がり、口唇に一条の沈線、外面は2本沈線の磨消繩文。内外面丁寧に研磨、内面黒色研磨	R L	
タ-3	タ	タ	—		砂粒をほんと含まず、 精選された胎土 雲母、明茶色	口縁部がわずかに外反、口縁外面に沈線を引き、縄文を施す。内外面丁寧な研磨	R L	
タ-4	タ	深鉢	—	a類	1~3mmの砂粒を多く 含む、淡黄褐色 チャート、砂岩、他	口縁部が外反、内外面横位の条痕		
タ-5	タ	タ	—	⑦	0.5~2mmの砂粒 長石・火成岩 赤茶色	外面2本沈線の磨消繩文、内面横位の2枚貝 条痕	R L	4~5
タ-6	タ	タ	—		0.5~2mmの砂粒 長石・火成岩・結晶片 岩、黄茶色	外面縦位の2枚貝条痕 内面横位のハケ調整		
タ-7	タ	浅鉢			0.5~4mmの砂粒 長石・石英 暗茶色	内・外面ナデ調整		3
タ-8	タ	深鉢		G類	0.5~2mmの砂粒 長石・火成岩・石英 茶色	筒状の把手。平面は4.5×4cmの楕円形。 内面外の口縁下に沈線、外面に出ると左右から の垂下沈線となる。沈線間及び口唇部に縄 文を施し、把手外面にはS字状の入組み文。 外面丁寧なヘラ磨き	R L	3~4
タ-9	タ	タ		①	0.5~3mmの砂粒 長石・石英・火成岩・ 角閃石、暗茶色	外面横位の条痕の下地の上に懸垂溝文を入組 みで描く。頸部間に区画沈線 沈線の脇にはドテが残る。外面スケル		4~5
8-11	包含層	タ		C類	0.5~2mmの砂粒 チャート・雲母 黄茶色	波状口縁を有す。口縁部は内面に粘土帶を貼 付し肥厚させる。波頂部内面の肥厚は特に著 しい。口唇部に1条の沈線、外側に右下りの 短沈線内・外面条痕		3.5
タ-12	タ	タ		タ	0.5~2mmの砂粒 石英・チャート・雲母 黄茶色	口縁部は外反、頸部外面無文、弱い波状口縁、 口縁部内面には断面三角形の粘土帶を貼付、 波頂部は内外共に拡張が著しい。口唇部には 沈線を施し、外側に縄文を施しその後に右下 りの短沈線を配す。内・外面ナデ。外面スケ ル	R L	3~4
タ-13	タ	タ		タ	0.5~4mmの砂粒多 チャート・結晶片岩 暗茶色	波状口縁を有す。口縁外反。内面には断面三 角形の粘土帶を貼付し内面に肥厚させる。波 頂部は山形突起状を呈し、外面に左・右から 短沈線。口唇部に沈線。内・外面被熱赤変、 スケル。		4
タ-14	包含層Ⅲ層	タ		タ	0.5~2mm砂粒多 チャート・砂岩 黄茶色	口縁部外反、頸部外面無文、波状口縁。口縁 部内面に断面台形の粘土帶を貼付し肥厚。 口唇部に波頂部から沈線を巡らし、外面に右 下りの短沈線を配す。波頂部には、2つの刺 突文。外面横位の条痕、内面左←右の擦痕		4
タ-15	タ	タ		タ	0.5~1mmの砂粒 角閃石・石英・雲母 黄茶色	口縁部外反。頸部無文。口縁部内面に断面台 形の粘土帶を貼付し、口唇部に1条の沈線、 外面に右下りの短沈線を施す。内面ナデ。外 面横位の貝殻条痕。		3
タ-16	ST3埋土中	タ		タ	0.5~3mmの砂粒 チャート、淡茶色	口縁部外反。頸部無文。波状口縁。波頂部は 山形突起状をなす。外面は横位の条痕。		
タ-17	包含層	タ		タ	0.5~2mmの砂粒 長石・火成岩・雲母・ 石英 茶色	直立する口縁の外側に幅2cm、厚さ1cmの粘 土帶を斜めに貼付。段状をなす口唇に1条の 沈線を巡らし、外側にRの短沈線。 内外面横位の2枚貝条痕、外面スケル		4
タ-18	タ	タ		タ	0.5~2mmの砂粒 長石・火成岩・角閃石 ・雲母、灰褐色	口縁部外反。頸部無文。口縁内面には断面三 角形の粘土帶を貼付し肥厚させる。口唇に沈 線、外側に右下りの短沈線		2~3
タ-19	タ	タ		タ	0.5~2mmの砂粒 長石・火成岩・角閃石 ・雲母 黄褐色	口縁部外反、頸部無文。口縁内面には断面三 角形の粘土帶を貼付。口唇中央部に1×0.8cm 深さ1.4cmの太い刺突文を配し、そこから口 唇に沈線を巡らす。外面に短沈線、短沈線の 下地に縄文あり。 内外面条痕、外面スケル。	R L	4

遺物観察表

掲図番号	出土地	器形	法量 口径 器高 胴径 底径 (cm)	分類	胎土・色調	特徴	縄文の 燃り	沈線の 幅(mm)
9-20	包含層	深鉢		C類	0.5~2mmの砂粒 火巣岩、長石、石英、 角閃石、暗茶色	口縁端部を欠くも、外反し波状口縁を有するものである。波頂部下の頸部外面には2条の沈線口縁内面肥厚、内外面横位条痕の上をナデ。沈線脇にドテを残す。		4
〃-21	SD 1 埋土中	〃		〃	1mm内外の砂粒 火巣岩、長石 暗灰褐色	口縁部外反、頸部無文、口縁内面に断面三角形の粘土帯を貼付し、内側に肥厚、口唇に沈線、外側に右下りの短沈線		3.5
〃-22	包含層	〃		〃	0.5~2mmの砂粒 火巣岩、長石、石英、 結晶片岩、雲母、角閃石 茶色	口縁部外反、頸部外面無文、口縁内面に断面三角形の粘土帯を貼付し内面に肥厚さす。口唇に沈線、外側に右下りの短沈線、外面スケル、沈線脇にドテを残す		4
〃-23	〃Ⅲ層	〃		D類	0.5~1mmの砂粒 火巣岩、石英、長石 灰褐色	口縁部外反、頸部無文、内面に2本の沈線、2本共に連結せず内側に向かって垂下、外面に右下りの短沈線。内外面横位の条痕		2.5~3
〃-24	〃I層	〃		B類	0.5~1mmの砂粒 火巣岩、石英、長石 外面 茶色 内面 黒褐色	頸部は外方に直線的に立ち上がり、口縁部は内傾気味につく。波状口縁、口唇面には波頂部から沈線が施され、外側に刺突文。波頂部外面には縄文を施す。	R L	2.5
〃-25	SD 1 床	〃		A類	0.5~1mmの砂粒 火巣岩、結晶片岩、雲母 茶色	外反気味に立ち上がり、口縁部は内側に肥厚。波状口縁。外面3本沈線の磨消縄文。口唇部は縄文を施し、右下りの短沈線。波状部から垂下沈線。内面ヘラ磨き	R L	3.0
〃-26	包含層Ⅲ層	〃		F類	0.5~1mmの砂粒 火巣岩、雲母 濃褐色	口縁外面に粘土帯を貼付した。縄帶文土器。肥厚した口縁の上・下端に縄文。弧状の短沈線を配す。内面右下りのハケ調整。	R L	4.0
〃-27	包含層	〃		〃	0.5~2mmの砂粒 長石、火巣岩、雲母、 角閃石、赤茶色	肥厚した口縁部外面に右下りの沈線を施す。縄帶文土器。内面右下りの条痕、沈線脇にドテを残す。		4~4.5
〃-28	ST 1 埋土	〃		〃	1~2mmの砂粒 火巣岩、長石、角閃石、雲 母 黄茶色	肥厚した口縁部外面に右下りの沈線を施す。縄帶文土器。器表の摩耗が激しい。		
〃-29	〃	〃		〃	0.5~2mmの砂粒 石英、火巣岩、雲母 淡黄色	口縁部は内傾。外面に短沈線。内・外面 卷貝条痕		4.0
〃-30	SD 1 I層	〃		c類	0.5~2mmの砂粒 火巣岩、長石 黄褐色	直線的に外方に立ち上がり、口縁内面に断面台形の粘土帯貼付。		
〃-31	包含層	〃		f類	0.5~1mmの砂粒 火巣岩、角閃石 淡黄色	内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反、内面に粘土帯を貼付し肥厚、内面横位の条痕外面スケル。		
〃-32	〃	〃		F類	0.5~1mmの砂粒 石英、チャート、雲母	口縁部は内傾気味に立ち上がり、外面に2本の沈線、沈線間に縄文を施す。内面スケル。		2.0
〃-33	〃I層	〃		D類	0.5~1mmの砂粒 チャート、雲母 淡茶色	わずかに肥厚した口縁部内面に右下りの短沈線。内外面横位ナデ。内外面被熱赤変スケル。		3.0
〃-34	〃	〃		E類	0.5~4mmの砂粒 石英、雲母 黄褐色	スプーン状にカーブして立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面に2条の沈線、沈線間に縄文。沈線脇を磨く。	R L	4.0
〃-35	表採	〃		〃	0.5~3mmの砂粒 石英、火巣岩、長石 桃茶色	スプーン状にカーブして立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面に沈線、沈線脇を磨く。		
〃-36	ST 3 埋土	〃		〃	0.5~2mmの砂粒 火巣岩、石英、長石、雲母 灰黒色	スプーン状にカーブして立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁部下に沈線を巡らし口唇部との間に、縄文を施す。口唇部ヘラ磨き。沈線脇を磨く。	R L	4.5
〃-37	表採	〃		〃	0.5~2mmの砂粒 チャート、雲母 淡褐色	波頂部外面に渦巻文をもつ縄帶文土器。内面指ナデ、沈線脇を磨く。		9.0
〃-38	包含層Ⅲ層	〃		a類	0.5~2mmの砂粒 火巣岩、石英 茶色	外しながら立ち上がり、口縁内面を肥厚さす。内外面横位の貝殻条痕。外面スケル		

遺物観察表

挿図番号	出土地	器形	法量 器高 cm) 胴径 底径	分類	胎土・色調	特徴	繩文の 擦り	沈線の 幅(mm)
9-39	包含層Ⅲ層	深鉢		b類	0.5~2mmの砂粒 火成岩、長石、雲母、 角閃石	内湾して立ち上がり、端部は光り気味 内外面横位の条痕		
〃-40	SD1Ⅰ層	〃		a類	0.5~2mmの砂粒 結晶片岩 灰黄色	口縁部外反。端部は丸味をもつ。 外面横の条痕		
〃-41	包含層Ⅰ層	〃		〃	0.5~1mmの砂粒 火成岩、長石、雲母 暗褐色	口縁部は外反。口唇面をなす。 内外面ナデ。ススケる。		
〃-42	〃Ⅲ層	〃		〃	0.5~1mmの砂粒 火成岩、長石、雲母、 石英、暗灰色	口縁部は外反、口唇は丸くおさめる。 内外面横位の巻貝条痕		
〃-43	〃	〃		b類	0.5~2mmの砂粒 火成岩、石英、雲母 茶色	わずかに内湾して立ち上がり、口唇は面をなす。 内面左→右の削り、外面ナデ。外面ススケる。		
〃-44	〃Ⅰ層	〃		c類	0.5~2mmの砂粒 チャート、雲母	直立気味に立ち上がり、口縁内面は断面三角形の粘土帶を貼付し、肥厚さす。内外面横位のナデ調整		
〃-45	表採	浅鉢			0.5~2mmの砂粒 火成岩、石英、長石 赤茶色	口縁部は短く外反 口唇は丸くおさめる。		
〃-46	包含層Ⅲ層	〃		e類	0.5~1mmの砂粒 火成岩、石英、長石、 角閃石、茶色	口縁外面に粘土帶を貼付し、肥厚さす。 口唇は丸くおさめる。		
〃-47	表採	〃		b類	0.5~2mmの砂粒 火成岩、石英、長石 茶色	内湾気味に立ち上がり、口縁は内面に肥厚。 口唇は丸くおさめる。外面ススケる。		
〃-48	ST3埋土中	深鉢			0.5~2mmの砂粒 結晶片岩、石英 灰茶色	口縁部内面が大きく、外面が小さく外反。 口縁下に刻目突帯、突帯の刻日は、指痕による 圧痕風、外面ススケる。		
〃-49	〃	〃			0.5~2mmの砂粒 長石、石英、火成岩、 雲母 茶色	直線的に立ち上がり、口唇は丸くおさめる。 口縁下に刻目突帯を貼付、口唇も刻む 刻み原体はハゲ状工具、内外面横のナデ		
10-50	包含層	浅鉢			0.5~1mmの砂粒 火成岩、石英、角閃石 黄茶色	皿状を呈す。口唇は丸くおさめる。 調整の観察不能なるもヘラ磨きか。		
〃-51	〃Ⅲ層	〃			0.5~1mmの砂粒 長石、火成岩、石英、 角閃石 暗茶色	口縁部は外反、口唇は丸くおさめる。 内外面ヘラ磨き		
〃-52	〃Ⅰ層	〃			0.5~1mmの砂粒 石英、長石 内面黒色、外面灰色	口縁部は外反、端部を丸くおさめ、内外面横位の丁寧なヘラ磨き		
〃-53	ST1埋土	〃			0.5~1mmの砂粒 長石、石英 暗灰色	〃		
〃-54	包含層Ⅰ層	〃			0.5~1mmの砂粒 長石、石英、火成岩	波状口縁を有し、波頂部がわずかに外反。 口唇は丸くおさめる。		
〃-55	〃Ⅲ層	〃			砂粒をほんと含まず 精選された胎土 外面暗茶色、内面黒褐色	口縁部に向かって強く内湾 外面に沈線文様、 内外面丁寧なヘラ磨き、口縁部に焼成前の穿孔あり。		
〃-56	表採	〃			0.5~1mmの砂粒 火成岩、長石、石英 外面桃色、内面灰褐色	皿状の器形を呈し、内面に断面カマボコ状の 突帯を貼付。内面ヘラ磨き、外面条痕		
〃-57	SD1埋土	〃			0.5~1mmの砂粒。 角閃石、火成岩、石英、 長石 淡茶色	皿条の器形。口縁部内面を肥厚させ 2条の沈線を巡らし、外面には左下りの刻日。沈線脇のドテは、丁寧にヘラで磨き取られている。 外面は左→右の擦痕	3.0	
〃-58	〃	深鉢胴部		⑦	0.5~2mmの砂粒 火成岩、長石、雲母、 角閃石 暗茶色	外面は2条沈線の磨消繩文、内面ススケる	R L	4.5
〃-59	ST3埋土	〃		⑧	0.5~2mmの砂粒 火成岩、石英、長石 茶色	外面は横位の条痕の後、クランク状の沈線、 沈線脇にドテ。内面は擦痕のうえをナデ		3.5

遺物観察表

挿図番号	出土地	器形	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	分類	胎土・色調	特徴	縄文の 擦り	沈線の 幅(mm)
10-60	包含層Ⅰ層深鉢胴部				①	0.5~2mmの砂粒 石英, チャート 茶色	外面3本の沈線, 内外面ナデ		3.0
〃-61	〃	〃			⑦	0.5~2mmの砂粒 火巣岩, 雲母, 角閃石 赤茶色	外面右下りの貝殻条痕の下地のうえに沈線で 画された縄文帶。縄文帶はわずかに沈線をこ えて下にも着く。外面スケル。	R L	3.0
〃-62	〃Ⅲ層	〃			〃	0.5~2mmの砂粒 火巣岩, 長石, 角閃石 茶色	沈線と縄文をわずかに認める		3.0
〃-63	〃	〃			〃	砂粒をほとんど含まない。 精選された胎土, 灰褐色	外面2本沈線の磨消縄文, 外面スケル。	R L	3.0
〃-64	〃Ⅰ層	〃			〃	0.5~2mmの砂粒 火巣岩他 淡茶色	2本の沈線の上・下に縄文帶。内・外面ヘラ 磨き	R L	4.0
〃-65	ST3埋土深鉢胴部				①	0.5~2mmの砂粒 チャート, 雲母, 角閃 石, 明茶色	外面に沈線。沈線脇にドテあり。		3.5
〃-66	包含層Ⅰ層浅鉢胴部					0.5~1mmの砂粒を少 量。精選された胎土。	2条沈線の磨消縄文。外面赤彩, 内面黒色塗 布。内外面丁寧に研磨, 沈線のトデは磨き取 られている。	R L	3~4.0
〃-67	ST3埋土深鉢胴部				④	0.5~2mmの砂粒 火巣岩, 雲母, 石英, 長石, 明茶色	外面沈線文。沈線脇にドテあり。		4.5
〃-68	ST1埋土	〃			⑨	0.5~1mmの砂粒 火巣岩, 石英, 角閃石, 長石 暗灰褐色	隆帯の両脇に沈線		4.5
〃-69	包含層Ⅲ層	〃			〃	0.5~1mmの砂粒 長石, 石英, 角閃石, 火巣岩 明茶色	断面カマボコ状の隆帯の中央と下に沈線 隆帯上面に縄文を施す。	R L	3.0
〃-70	表採	〃			〃	0.5~1mmの砂粒 火巣岩, 長石 濃茶色	外面に隆帯, 隆帯下に沈線。内面は段を有し, ヘラ磨き。		2.5
〃-71	ST1埋土	〃			⑦	0.5~1mmの砂粒 火巣岩, 長石, 雲母, 角閃石, 茶色	外面は縄文地に幅広い沈線を描く内面ナデ調 整	R L	4~5.0
〃-72	攪乱層	〃			〃	1~2mmの砂粒 石英, チャート 淡褐色	外面は縄文地に区画沈線, 沈線脇にドテあり 内面は横位の条痕	R L	4.0
〃-73	包含層Ⅲ層	〃			⑤	0.5~2mmの砂粒 結晶片岩, チャート 黄褐色	頸部外面無文, 脊部外面縄文, 内面ヘラ磨き	R L	
〃-74	〃Ⅰ層	〃			〃	0.5~2mmの砂粒 火巣岩, チャート, 長 石, 茶色	脇部外面全縄文。内面スケル。	R L	
〃-75	〃Ⅲ層	〃			〃	0.5~2mmの砂粒 チャート, 石英, 火巣 岩	〃 内面ヘラ磨き。	R L	
〃-76	ST3埋土浅鉢胴部					精選された胎土で砂粒 を含ます。明茶色	外面長方形の区画沈線		3.0
〃-77	包含層Ⅲ層	〃			〃		外面に沈線多条		3.0
〃-78	〃Ⅰ層	〃				0.5~2mmの砂粒 火巣岩 外面黑色, 内面茶色	内・外面研磨。わずかに弧状の沈線を認める。		3.0
11-79	〃深鉢底部					0.5~2mmの砂粒 石英, 長石, 火巣岩 淡茶色	わずかに上げ底。粘土紐接合部で剥離。		
〃-80	〃	〃				0.5~1mmの砂粒 火巣岩, 結晶片岩, 雲 母, 長石 淡茶色	外面に垂下沈線の端部, 底部内面スケル。		
〃-81	〃Ⅲ層	〃				0.5~3mmの砂粒 火巣岩, チャート, 結 晶片岩, 淡茶色	高台状の底部		
〃-82	攪乱層	〃				0.5~2mmの砂粒 火巣岩, 角閃石, 長石 黄褐色	内面ナデ調整。上げ底		

遺物観察表

挿図番号	出土地	器形	法量 器高 胴径 底径 (cm)	口径 高 度	胎土・色調	特 徴	備考
13-86	ST 1	壺	17.3 — — —	1 ~ 2 mmの砂粒 石英、チャート 茶色	ラッパ状に開く口縁。口唇横方向のナデ内・外面右下りのハケ調整		
〃-87	〃	〃	12.9 — — —	1 ~ 2 mmの砂粒 チャート、雲母 茶色	二重口縁状を呈す。内・外面横方向のナデ調整		
〃-88	〃	甕	15.4 — — —	0.5 ~ 2 mmの砂粒 チャートを多く含む 桃茶色	口縁部叩き出し(右上り)。内面は木理の粗いハケ調整		
〃-89	〃	〃	12.3 — — —	〃	口縁部叩き出し。口縁内面右下りのハケ調整。上胴部内面指頭圧痕顯著。		
〃-90	〃	〃	13.0 — 17.2	0.5 ~ 2 mmの砂粒 石英、結晶片岩 雲母、茶色	口縁部叩き出し。外面は全面ススケる。		
〃-91	〃	鉢	10.8 7.1 4.2	0.5 ~ 2 mmの砂粒 石英、雲母 桃茶色	外面右下りの叩き。ヒビワレ状の亀裂が走る。		
〃-92	〃	〃	13.0 — —	精選された胎土 茶色	外面ナデ、内面ハケ調整。外面の一部に黒斑。口縁端部未調整		
〃-93	〃	〃	10.7 5.8 4.3	〃	内湾気味に立ち上がり、口縁はわずかに内曲。 高台状の底部を有し、高台外面に指頭圧痕顯著。 内・外面ヘラ磨き		
〃-94	〃-床面	〃	14.8 — —	0.5 ~ 2 mmの砂粒 茶色	内湾して立ち上がり口縁部に到る。端部未調整。 外面叩き、内面ナデ調整。断面に接合部を認む。 丸底であろう。	モミ压痕あり	
14-95	〃	甕底部	— — —	0.5 ~ 2 mmの砂粒 チャート、雲母を 多く含む。淡茶色	平底。外面叩き。内面ナデ調整。		
〃-96	〃	鉢	— — —	〃	突出気味の平底。内外面ナデ調整		
〃-97	〃	〃	— — 3.0	0.5 ~ 2 mmの砂粒 カコウ岩、石英、 チャート、長石、 雲母、淡茶色	ドーナツ状につくられた平底の底部から内湾して立ち上がる。 外面右上→左下への削り。内湾はナデ調整。		
〃-98	〃	甕底部	— — —	1 ~ 3 mmの砂粒 砂岩、チャート 雲母	尖底風の丸底。		
〃-99	〃	鉢	— — —	精選された胎土 黄白色	小型器台杯部の可能性あり。内外面丁寧なヘラ磨き。		
〃-100	〃	甕底部	— — —	1 ~ 2 mmの砂粒 雲母 暗褐色	平底の外底に叩き。下胴部外面にハケ調整。内面ススケる。		
〃-101	〃	〃	— — 6.3	0.5 ~ 2 mmの砂粒 石英、結晶片岩 黄茶色	底部平底。内・外の調整不明。焼成不良		
〃-102	〃	鉢	8.8 6.5 —	0.5 ~ 2 mmの砂粒 石英、結晶片岩 暗褐色	平底でコップ状を呈す。内・外面ナデ調整。外面にヒビワレ状の亀裂が走る。		
〃-103	ST 2	壺	— — 17.4	0.5 ~ 2 mmの砂粒 石英、チャート、 雲母 暗褐色	下胴部右上り 中位水平方向の叩き、下胴部の叩きはほとんどナデ消されている。中位外面ススケる。器壁が厚い。		
〃-104	〃	〃	14.9 — —	0.5 ~ 1 mmの砂粒 火砲岩、結晶片岩 茶色	口縁叩き出し、口唇面取り。外面著しくススケる。		
〃-105	〃	〃底部	— — —	0.5 ~ 2 mmの砂粒 チャート、石英、 雲母	わずかに平底が残るがほとんど丸底。外面叩き		
〃-106	〃	〃	— — —	0.5 ~ 6 mmの砂粒 石英、雲母 桃茶色	丸底、外面叩き、内面ハケ調整		
〃-107	〃	鉢	11.4 2.7 —	精選された胎土。 茶色	内・外面に指頭圧痕。外面にヒビ割れ状の亀裂。		
〃-108	〃	〃	11.4 3.0 —	〃	〃		

遺物観察表

挿図番号	出土地	器形	口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径	胎土・色調	特徴	備考
19-109	ST 3	甕	12.4 — 16.0	1~3 mmの砂粒 長石, 石英 灰褐色	口縁部は丸味を帯びてく字状に外反。口唇部叩き出し。口唇部面取り。胴部外面水平方向を基調とする叩き。叩きのうえを部分的にハケ調整。外面ススケる。内面右下りのハケ	
〃-110	〃	〃	12.1 13.0 13.0	1~2 mmの砂粒。 火巣岩, 石英 茶色	口縁は内側に稜をなしてく字状に屈曲。叩き出し口縁であるが、丁寧な右下りのハケ調整を施す。胴部中位に最大径、ここを境に上は水平方向、下は右下りの叩き。上胴部内面に接合痕あり。底部は尖底か。外面全面被熱赤変しススケる。	
〃-111	〃	〃	13.9 — 14.7	0.5~2 mmの砂粒 火巣岩, 石英 淡灰色	口縁はく字状に外反。口縁部は叩き出しにあらず。口縁内外横方向のナデ。端部は丸くおさめる。外面右上りの叩き。下胴部、ハケで消えている。内面ナデ。外面全面ススケる	搬入品
〃-112	〃	〃	13.0 19.9 15.6 2.0	0.5~2 mmの砂粒 チャート, 石英 茶色	口縁は内面に丸味をおびてく字状に外反。口唇は面取り。叩き出しであるが、内面右下りのハケ。外面ナデる胴部は砲弾状。下胴部外面は叩きの方向が乱れる。中位水平、上胴部右上り。胴部内・外面ハケ調整。内面上半指頭によるナデ。外面全面ススケ、下半被熱赤変	
〃-113	〃	〃	15.0 — 18.7	0.5~3 mmの砂粒 石英, チャート, 紅レン石 茶色	口縁部叩き出し、内面に稜をなしてく字状に外反。口唇面取り、内面は右下りのハケ。胴部砲弾形。全面叩き下半は水平、上半は右上り。外面全面ススケる。内面ナデ。	
〃-114	〃	〃	13.3 20.5	0.5~5 mmの砂粒 チャートが多い。 茶色	口縁部叩き出し。内面に稜をなしてく字状に外半、内面右下りのハケ。胴部長胴砲弾形。全面叩き。下半右下り、上半水平方向。中位は水平方向を右下りの叩きが切っている。内面上胴部右下り、下半上りのハケ。外面全面ススケ。一部被熱赤変。	
〃-115	〃床面	壺	18.0 34.2 24.7 3.3	1~3 mmの砂粒 チャート, 雲母 茶色	内面に稜をなしてく字状に屈曲して直線的に伸びる頸部から口縁部が外反。口唇は面取る。口頸部内・外面右下りのハケ。胴部外面全面叩きの下地のうえにハケ調整。胴部上位右下り、中位水平方向の叩き。内面指頭によるナデ。叩きの方向変化点でハケ、ナデの方向も変化する。底部はわずかに平底胴部外面中位が帯状にススケる。	
〃-116	〃	甕	17.4 31.6 26.3 3.0	〃	口縁はく字状に外反し、端部が外反、口唇は面取り。外面縦、内面右下りのハケ。胴部外面全面叩き、下端は右下り。それ以外水平方向。叩きの上にハケ、内面全面ハケ。胴部中位が帯状にススケる。	
20-117	ST 3	〃	14.5 — 14.9	0.5~2 mmの砂粒 火巣岩, 石英 淡灰色	口縁叩き出し、く字状に外反し、内外面横方向のナデ。口唇はつまみ上げるようにして面取り。胴部外面水平方向の叩き。内面ナデ。外面全面ススケる。	搬入品
〃-118	〃	〃	— — — — 2.8	〃	下胴部外面ラセン状叩き、わずかに突出したドーナツ状の底部。外底に木葉圧痕あり。外面ススケる。 117と同一個体の可能性あり。	〃
〃-119	〃	〃	— — 16.8	1~5 mmの粗大な 砂粒 暗灰色	胴部中位外面右上りの叩き。その上をハケ。胴部下端を除いて外面全体ススケる。内面ハケ。	
〃-120	〃	〃	19.0 — — —	0.5~1 mmの砂粒 石英, 雲母 灰褐色	口縁部はく字状に屈曲。口唇は丸くおさめる。外面右下りのハケ。内面横方向のナデ。外面ススケる。	
〃-121	〃	〃	14.8 — — — —	0.5~2 mmの砂粒 チャートを多く含む 茶色	口縁部叩き出し、内面に稜をなしてく字状に屈曲。内面右下りのハケ調整。胴部外面水平方向の叩き。その上をハケ。外面ススケる。	
〃-122	〃	〃	— — — — 3.4	砂粒をほとんど含まない。雲母 淡灰色	突出したドーナツ状の底部、外面ラセン状の叩き。内面放射状の圧痕あり。黒斑あり。	搬入品
〃-123	〃	〃	16.4 — 19.6	〃	口縁部はく字状に屈曲。内外面横方向のナデ。口唇は丸くおさめる。胴部外面右上りの叩き。上胴部内面に粘土帶接合のラインを認める。下部内面をハケ調整し、その上に粘土を接合していることがわかる。外面ススケる。	〃
〃-124	〃	〃	— — — —	0.5~6 mmの砂粒 石英, 長石 茶色	く字状に外反する口縁。叩き出し。口唇面取り。	
〃-125	〃	〃	— — —	0.5~2 mmの砂粒 石英 淡茶色	尖底風丸底	
〃-126	〃	〃	— — — 4.2	0.5~2 mmの砂粒 火巣岩, 雲母	平底	
〃-127	〃	壺	17 — —	0.5~3 mmの砂粒 チャート, 石英 茶	ラッパ状に外反する口縁部。口唇部面取り、内外面右下りのハケ調整	

遺物観察表

掲図番号	出土地	器形	口径 器高 法量 (cm) 胴径 底径	胎土・色調	特徴	備考
20-128	ST 3	鉢	15.2 6.9 —	0.5~3 mmの砂粒 チャートが多い。 茶色	尖底、厚いつくり。外面叩き、内面右下りのハケ。	
△-129	△-床	△	18.6 6.8 3.5	0.5~2 mmの砂粒 火成岩、石英、雲母 茶色	体部下半ラセン状の叩き。上半ヒビワレ状の亀裂。内面ハケ、口縁部は外方にわずかに肥厚。	
△-130	△	△	14.5 12.9 — 8.5	0.5~2 mmの砂粒 石英、結晶片岩 茶色	バケツ状の鉢。叩きのうえをハケ調整。原体に粗、細の2つあり。内面上半は粗い原体により右下りの調整。	
△-131	△	高杯	— — —	0.5~3 mmの砂粒 石英、長石	小型高杯の柱状部。外面に指痕圧痕。	
△-132	△	△	— — —	0.5~2 mmの砂粒 火成岩、石英 茶色	脚部の4箇所に径9 mmの円孔、外面丁寧なヘラ磨き。内面には、放射状の压痕。	
△-133	△	小型器台	9.2 9.1 — 10.3	精選された胎土 淡茶色	受け部は直線的に立ち上がり、端部は丸味を帯びてわずかに上に向く。脚部は途中から屈曲の度をまし、直線的に開く。受け部底の充填粘土剝離。脚中位の径1 cmの円孔3個。内面右下りのハケの後ナデ。	
△-134	△	高杯	11.9 9.2 — 15.8	△	椀状の杯部、口縁端部丸くおさめる。短い柱状部を経て脚が八字形に開く。柱状部、杯部ヘラ磨き。脚部内面右下りのハケ。外面ハケのうえをヘラ磨き。脚部に径1 cmの円孔4個	
△-135	△	鉢	— — —	0.5~2 mmの砂粒 チャート、カコウ 岩、雲母 赤茶色	小型丸底の元祖のようなタイプ。 内・外面丁寧なヘラ磨き。	
22-136	SK 4	甕	16.8 — —	0.5~5 mmの砂粒 結晶片岩、石英	胸部下半右上りの叩き。中位から上はナデ消されている。 内面指痕圧痕、外面スケる。	
△-137	SK 5	鉢	— — —	0.5~3 mm チャートが多い。 黄橙色	丸底、外面叩き。	
△-138	SK 4	甕	— — —	0.5~4 mmの砂粒 チャートが多い。 茶色	口縁叩き出し。内面ナデ。外面スケる。	
△-139	△	△	— — —	1~3 mmの砂粒 チャート、砂岩、 茶色	ほとんど丸底、内外面ハケ調整。内面スケる。	
△-140	SK 5	△	— — —	0.5~4 mmの砂粒 チャート、石英 桃茶色	尖底	
△-141	SK 4	△	— — —	0.5~3 mmの砂粒 チャートが多い。	丸底、外面叩き	
△-142	△	△	— — —	1~5 mmの砂粒 チャート、結晶片岩	丸底、外面右上りの叩きのうえをナデ調整	
△-143	SK 5	鉢	10 6.6 — 1.7	0.5~5 mmの砂粒 茶色	わずかに平底が残る。外面叩き。内面ハケ調整。	
△-144	SK 4	△	12.3 — —	0.5~5 mmの砂粒 チャートが多い	外面右下りの叩き。内面木理の粗いハケ調整	
23-147	SD 1	壺	— — — 7.8	0.5~2 mmの砂粒 長石、石英、火成岩 茶色	内外面ナデ調整	
△-148	△	甕	16.2 — —	0.5~1 mmの砂粒 チャート、雲母 淡茶色	口縁は水平に近く外方に屈曲。口縁は上方に拡張し2条の凹線文。内・外面ヨコ力方向のナデ調整	
△-149	△	△	14.5 — —	△	口縁はく字状に屈曲。口縁は上方に拡張2状の凹線文を施す。内外面横方向のナデ。外面スケる。	
△-150	P 20	鉢	10 — —	0.5~2 mmの砂粒 暗茶色	口縁内面に面をつくる。内外面ナデ。内面ニスが著しく付着。	
△-151	包含層	△	— — 6.2	0.5~4 mmの砂粒 石英、チャート、 結晶片岩 桃茶色	脚付鉢。内・外面指痕圧痕。	
△-152	△	△	12.8 6.3 —	0.5~2 mmの砂粒 石英、長石 淡茶色	尖底風。外面は叩き後ハケ調整。内面ナデ調整。	

遺物観察表

挿図番号	出土地	器形	口径 器高 法量 (cm) 胸径 底径	胎土・色調	特徴	備考
23-153	包含層	甕	9 — 11.4 —	0.5~2mmの砂粒 チャート, 石英, 結晶片岩, 雲母, 桃茶色	口縁叩き出し。胴部外面右下りの叩き。 外面全面ススケる。	
23-154	〃	〃	— — — 4.3	0.5~2mmの砂粒 チャート, 石英 黄灰色	外面叩き。平底。外底部周辺に黒斑あり。	
23-155	〃	〃	— — — —	0.5~2mmの砂粒 チャートが多い 淡茶色	丸底。内・外面ナデ調整	
23-156	〃	〃	— — 17.4 —	0.5~2mmの砂粒 チャート, 雲母, 石英 淡茶色	外面叩きのうえをハケ調整。胴部外面中位が煤ける。	
23-157	〃	〃	— — 15.8	1~5mmの砂粒 石英, 結晶片岩 灰色	口縁部はく字状に外反。口縁叩き出し。胴部外面水平方向の叩き。 外面全面ススケる。	

図 版



発掘調査前風景（北から）



発掘調査前風景（東から）

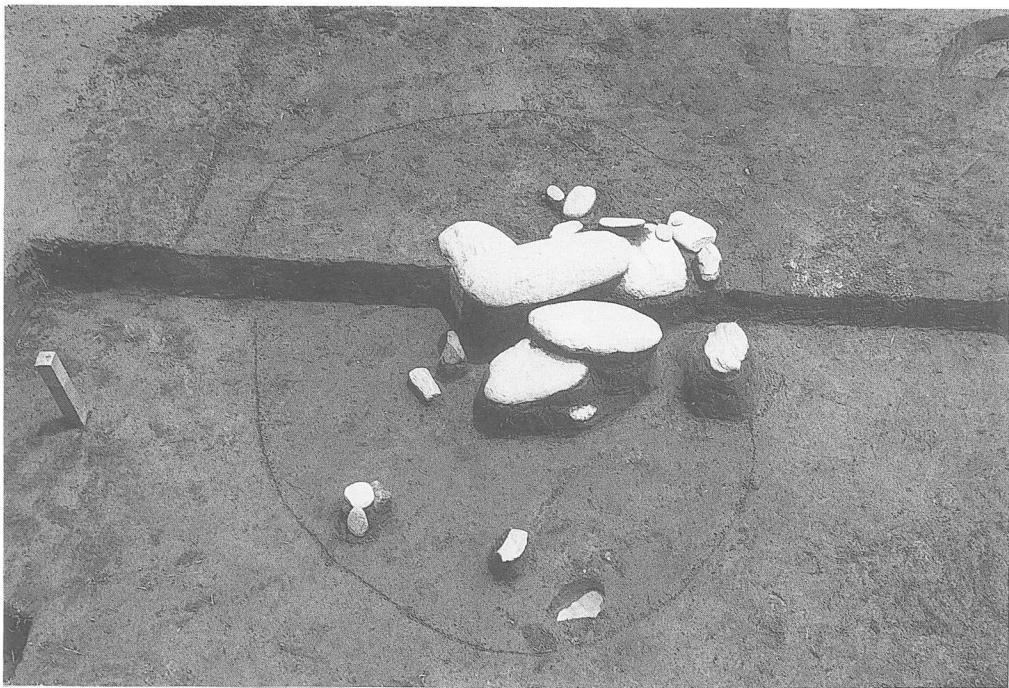
P L 2



A・B トレンチ完掘状況（南から）



SX 2

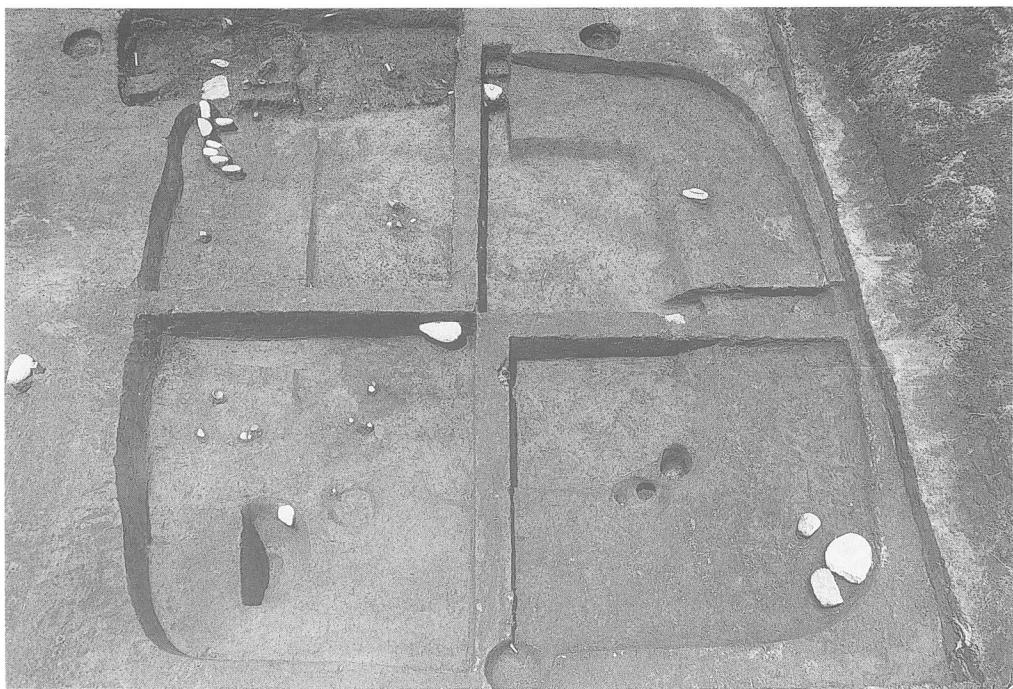


SX 1 検出状況



SX 2

P L 4



ST 1 (東から)



ST 1 (南から)



ST 2 炭化物出土状況（南から）

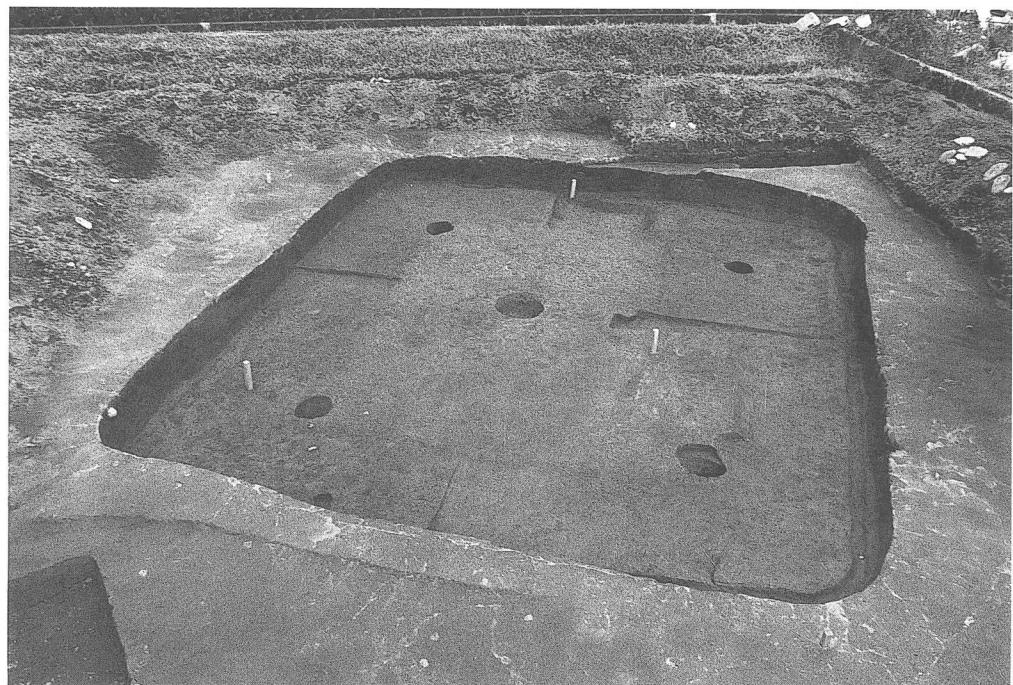


ST 2 完掘状況（南から）

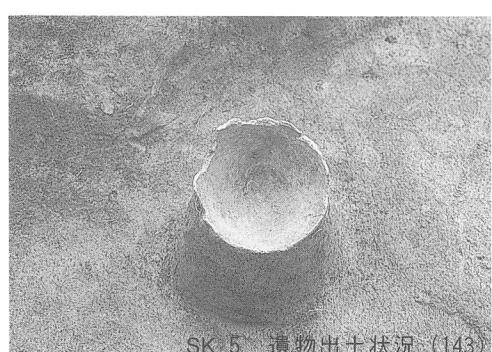
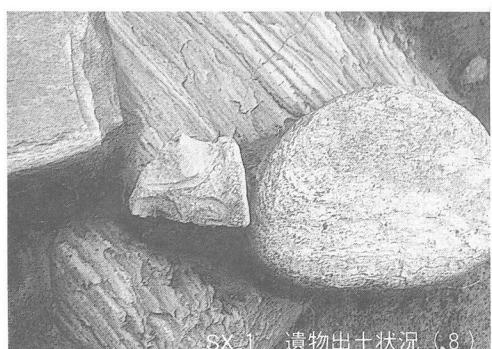
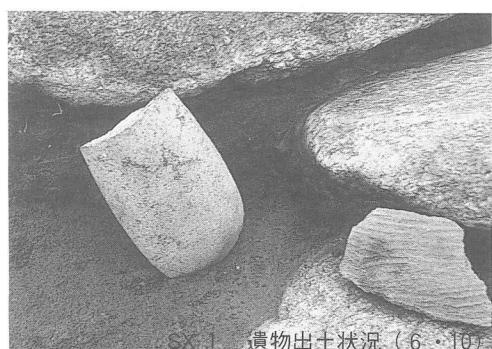
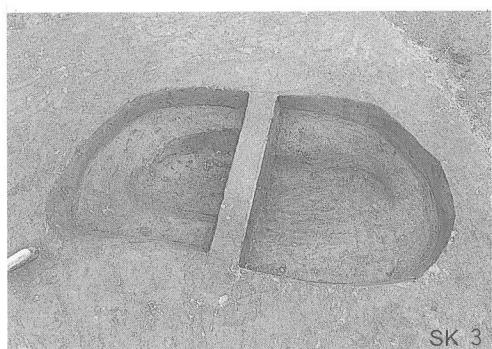
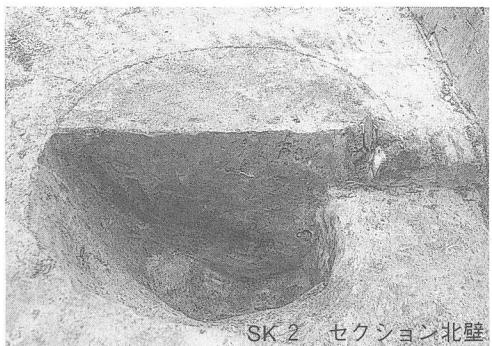
P L 6



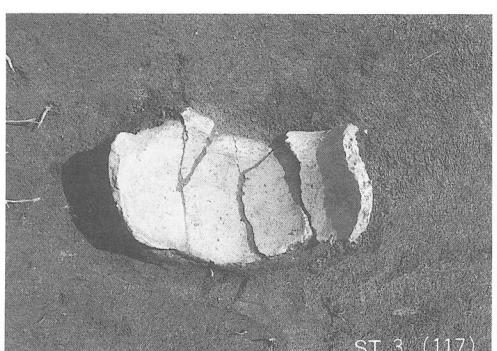
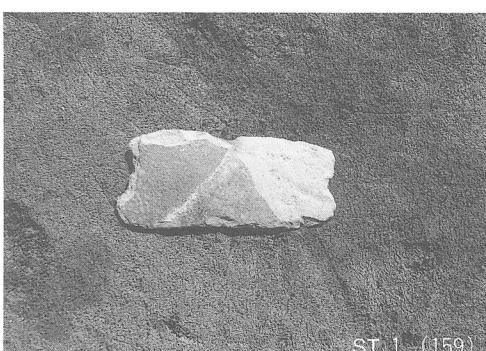
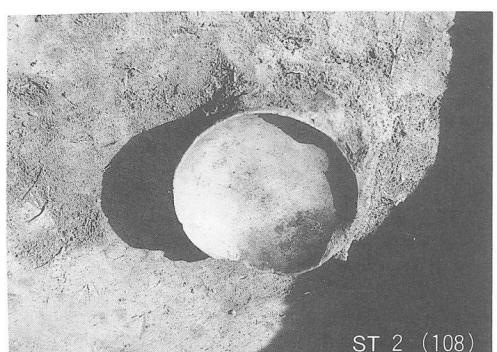
ST 3 完掘状況（西から）



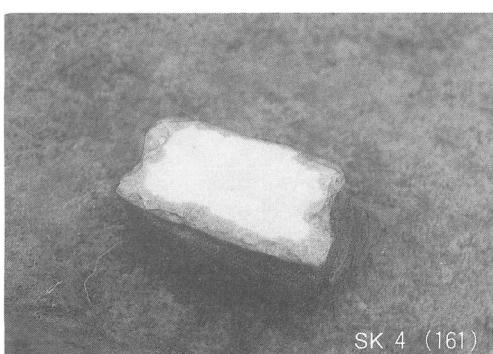
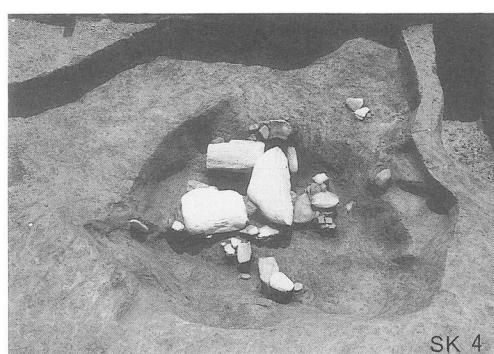
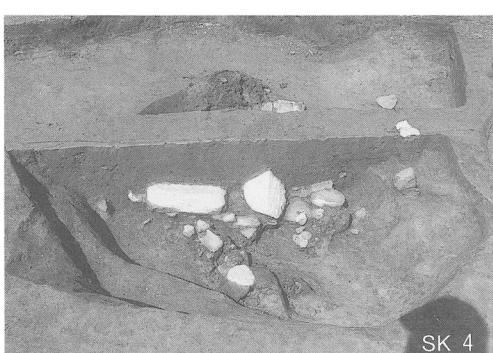
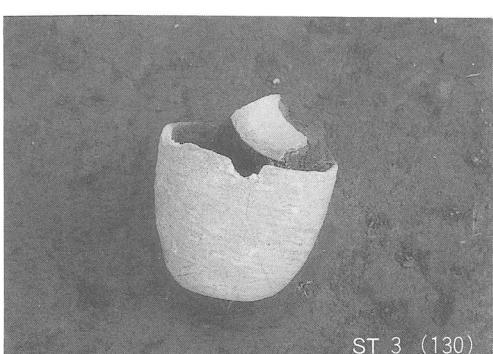
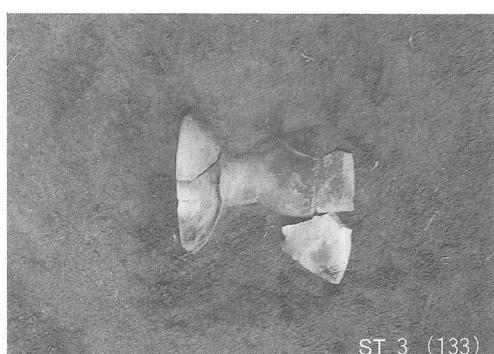
ST 3 ベッド状遺構除去（西から）



検出遺物と遺構

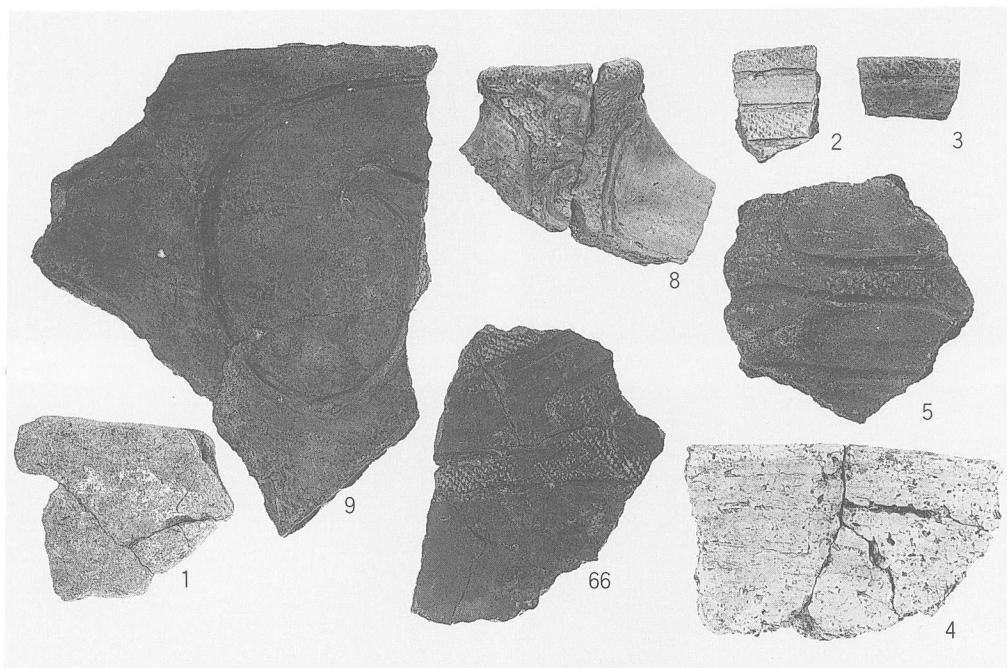
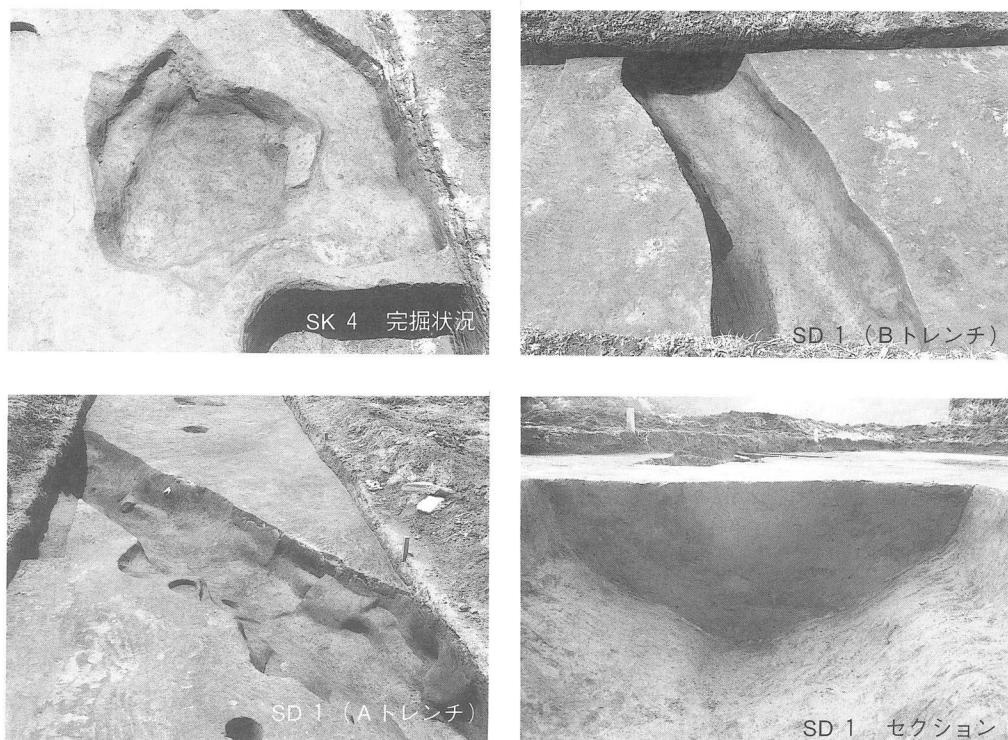


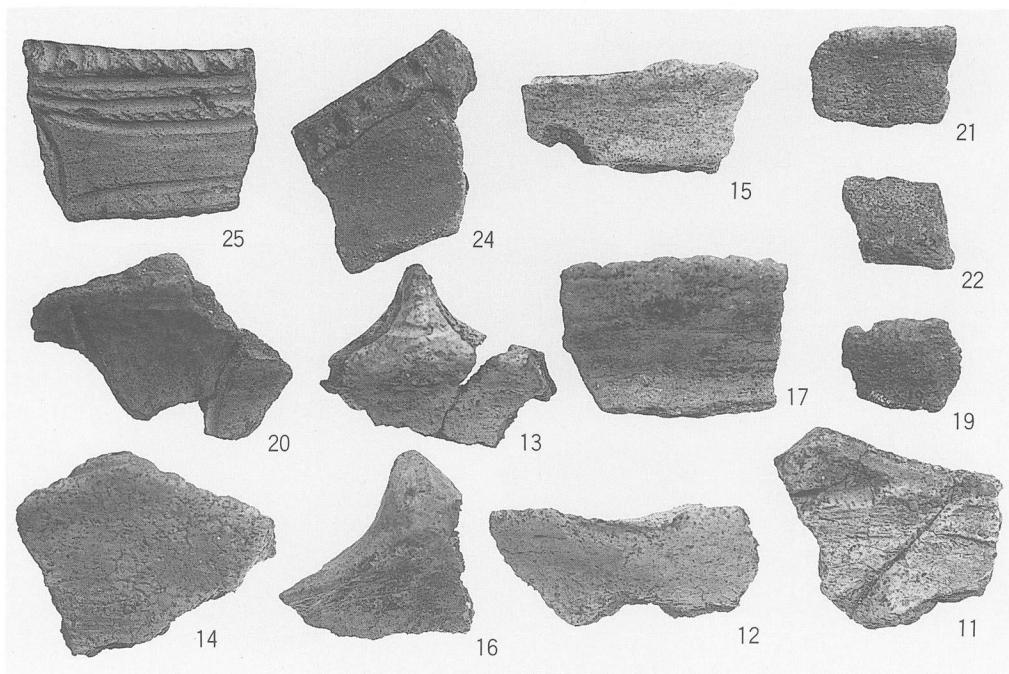
ST 1 · 2 · 3 遺物出土狀況



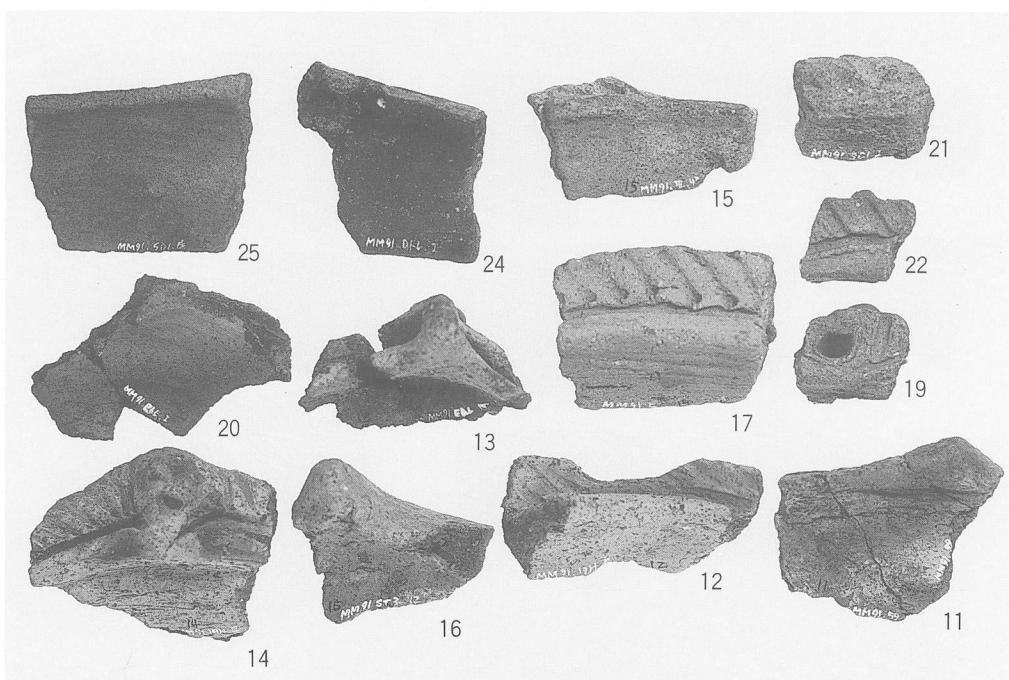
ST 3, SK 4 遺物出土狀況

PL 10

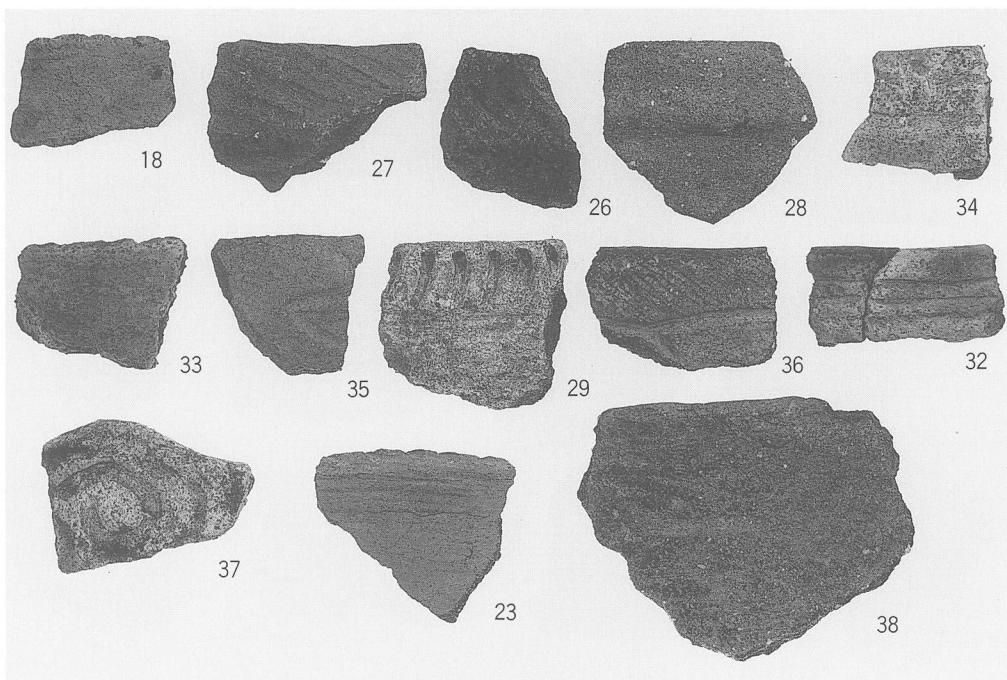




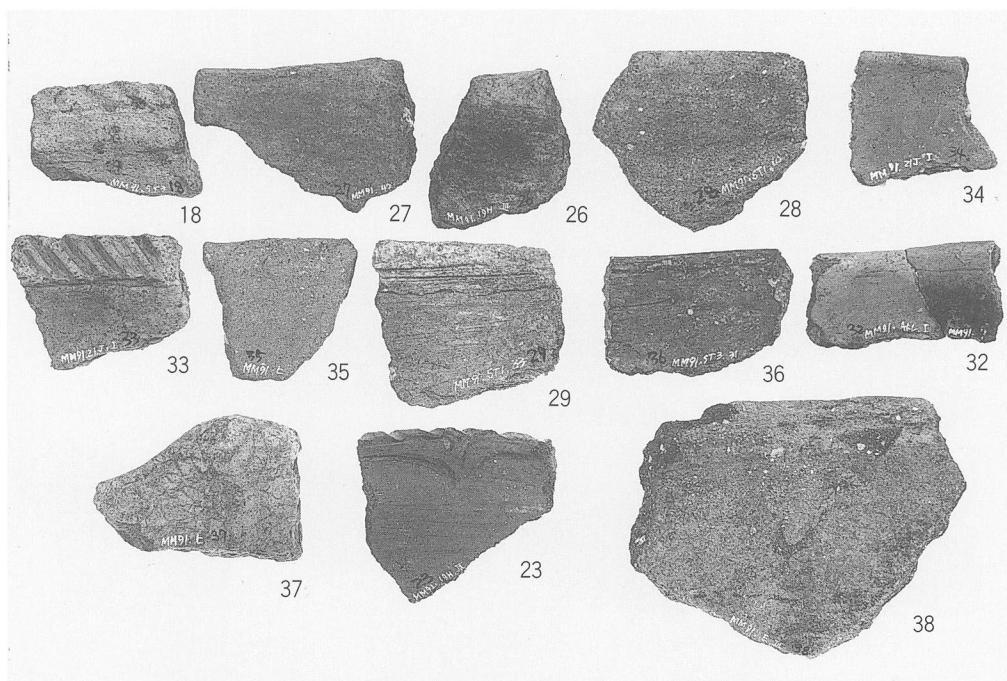
縄文時代後期土器



同上 裏面



縄文時代後期土器



同上 裏面



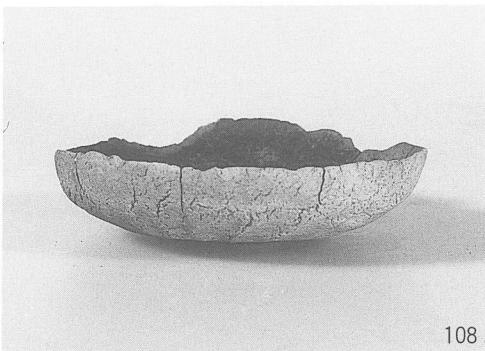
133



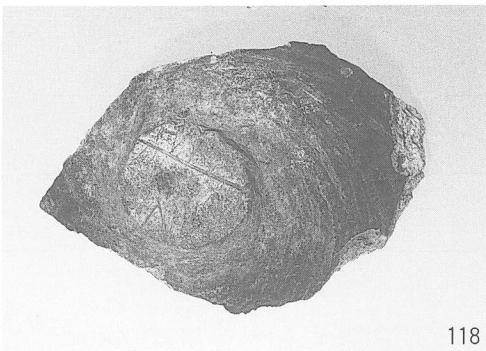
134



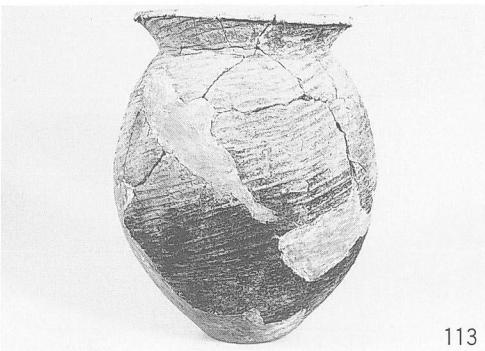
107



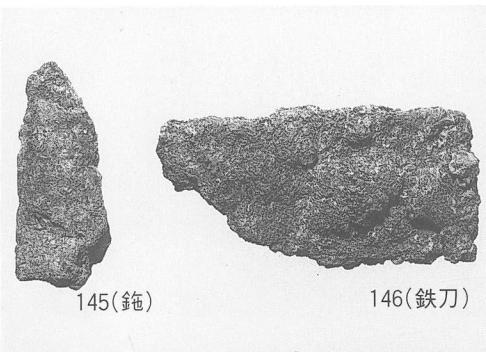
108



118

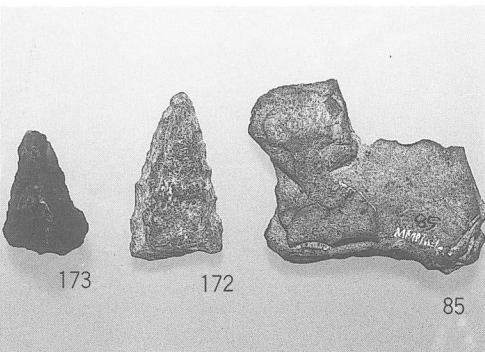


113



145(鉈)

146(鉄刀)



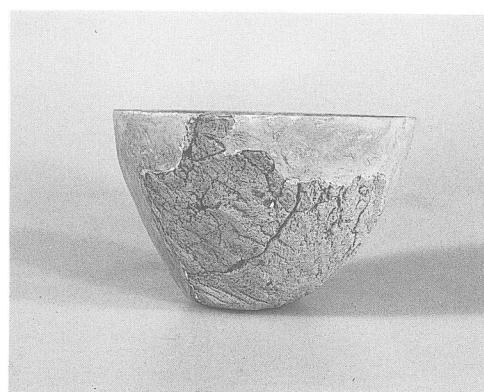
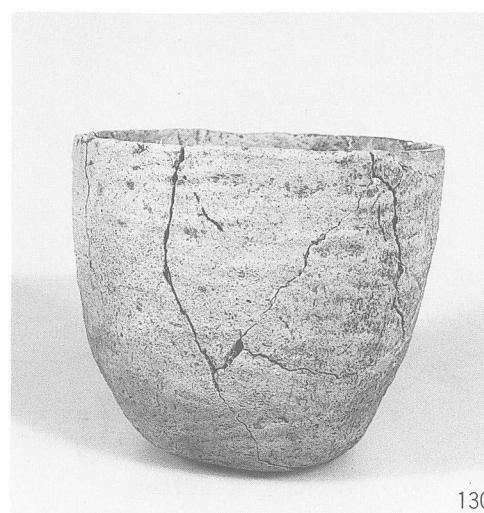
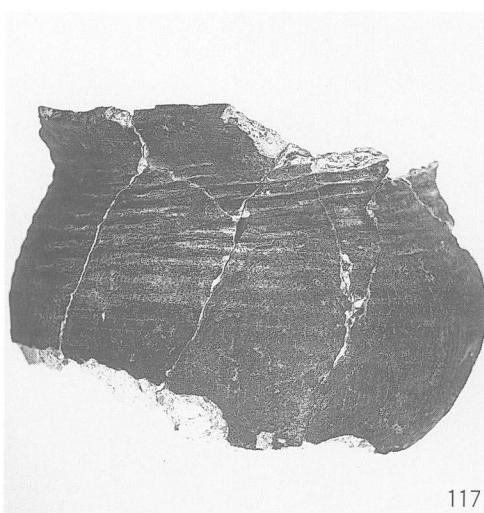
173

172

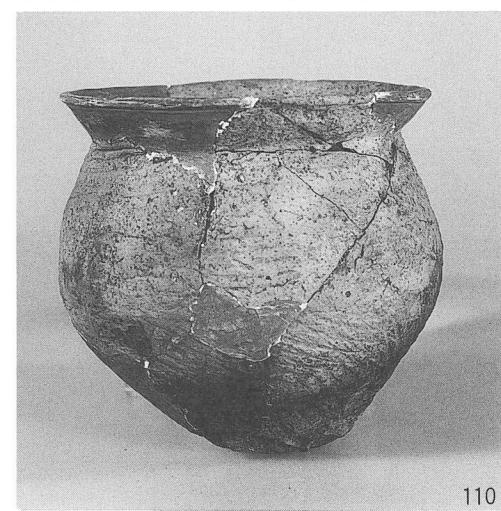
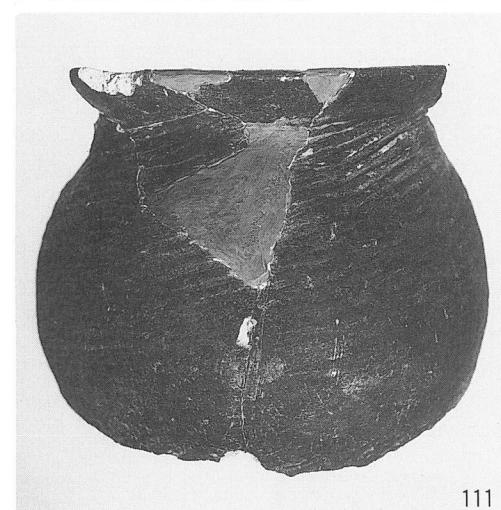
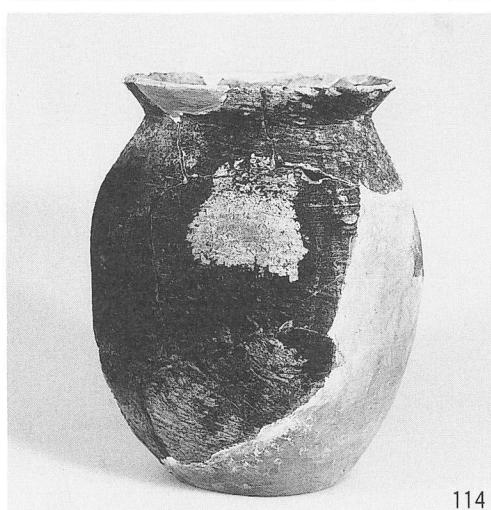
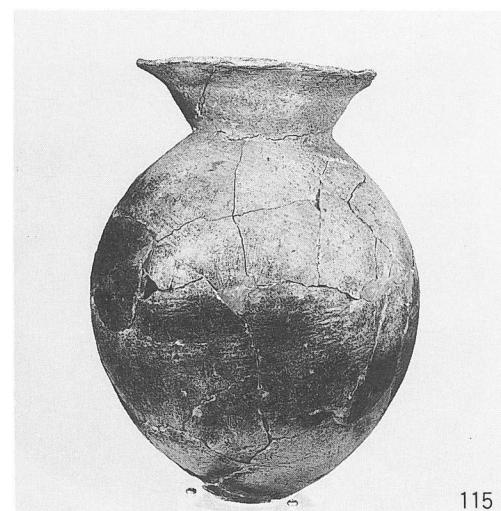
85

(実大)

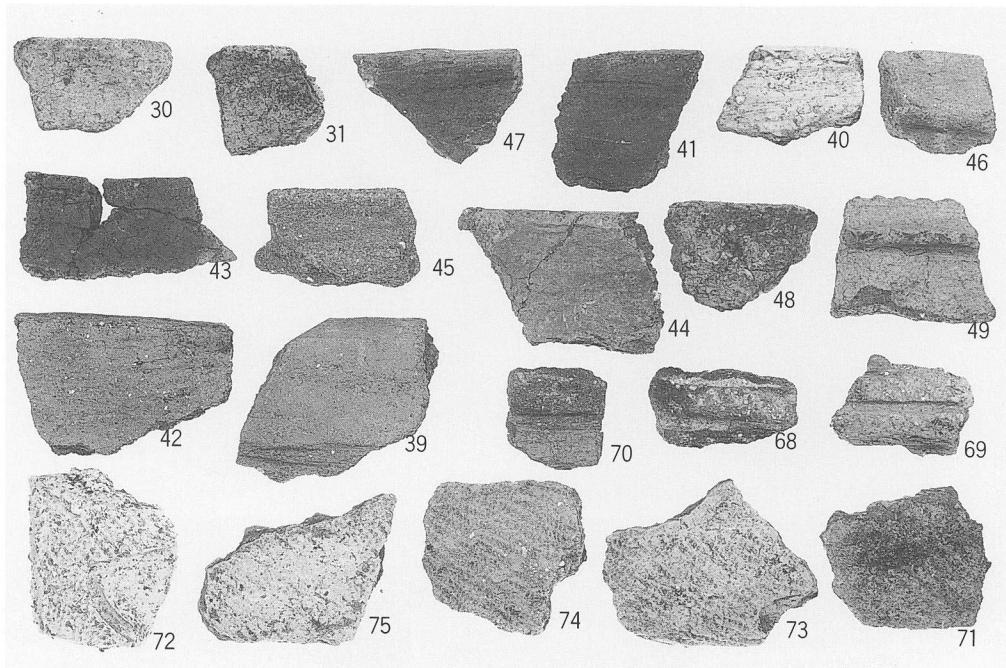
ST 1 (172) · ST 2 (107 · 108 · 173) · ST 3 (133 · 134 · 118 · 113), SK 4 (145 · 146), 包含層 (85) 出土の遺物



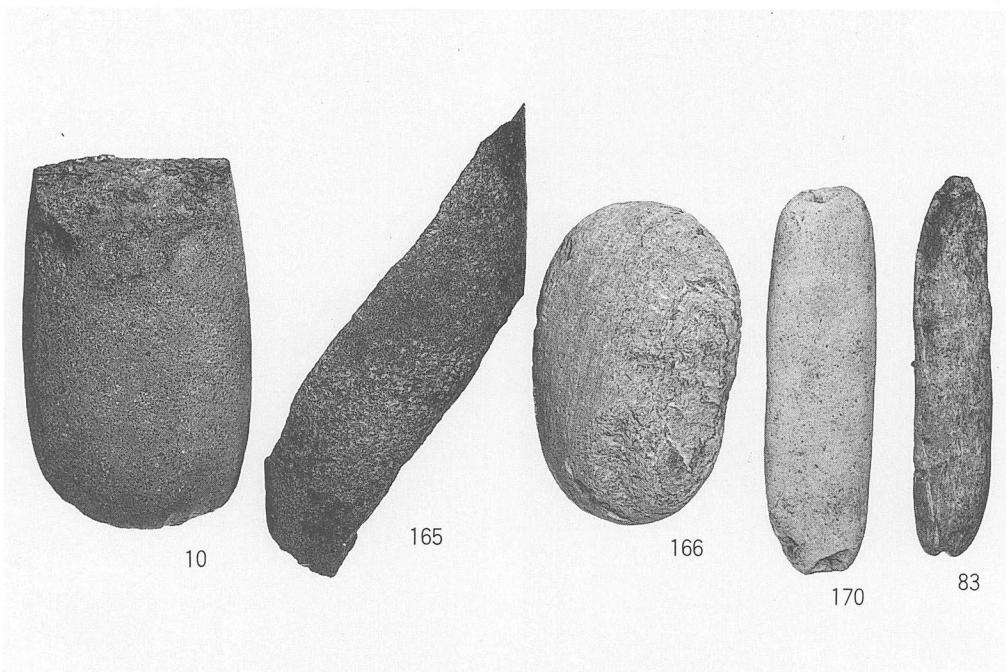
ST 1 (102・91) · ST 2 (103) · ST 3 (112・117・130) 出土土器



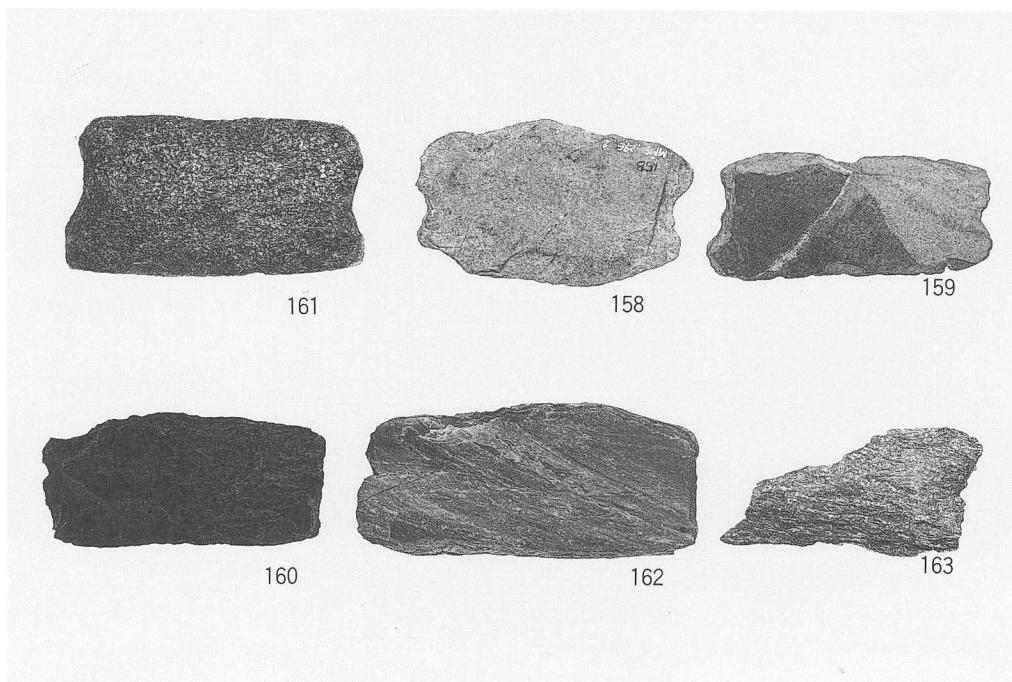
ST 3 出土の土器



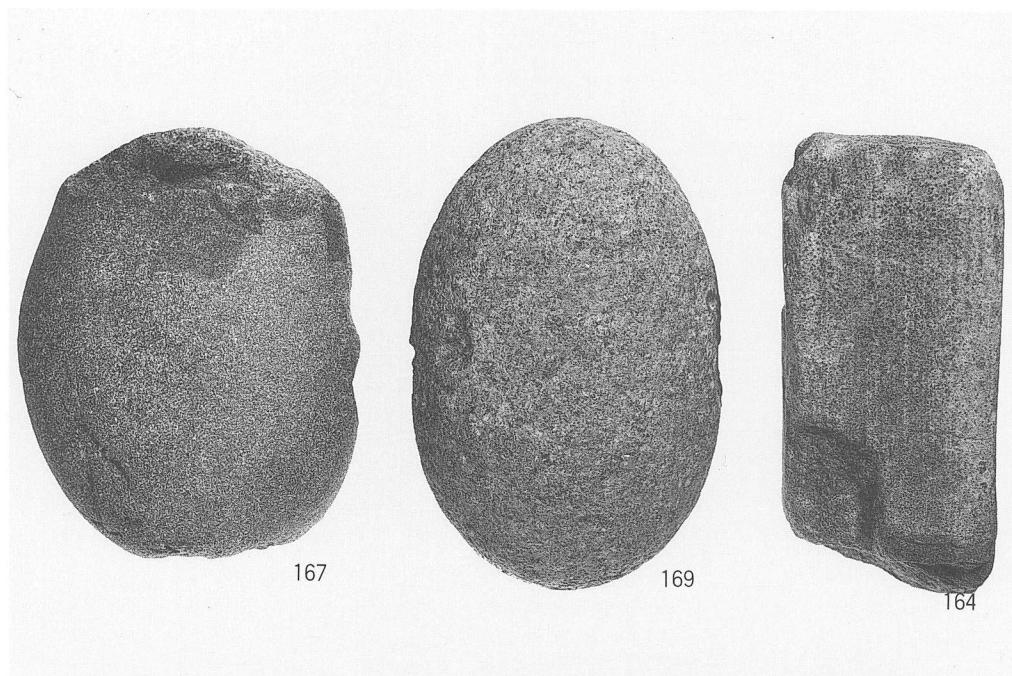
縄文後期及び晩期（48・49）の土器



SX 1 (10), SD 1 (165), ST 3 (166・170), 包含層 (83) 出土の石器



ST 1 (159) · ST 3 (160 · 162), SK 4 (161), 包含層 (158 · 163) 出土の石包丁



ST 3 (169), SK 4 (164) · SK 5 (167) 出土の叩石, 砧石

松ノ木遺跡Ⅱ

(本山町埋蔵文化財
報告書第4集)

1992年3月

編集 本山町教育委員会

発行 高知県長岡郡本山町本山506-3

電話 (0887)76-3913

印刷 西村謄写堂